
澤の蛭

せりもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

澤の螢

【Nコード】

N5112W

【作者名】

せりもも

【あらすじ】

「物思へば澤の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞみる」…
…和泉式部の和歌の本歌取りです。辛くて悲しくて、体からさまよ
い出てしまった魂は、どうなるのでしょうか。ホラー、ミステリの要
素もあり、ジャンルミックスな物語です。

蛭邸

その1

一、蛭邸ほたるてい

さわさわと木々の梢しすえが鳴り渡る。
深いしじまに満ちた森。
沢の水に映る、歪んだ星明かり。

苦しさに耐えかね、高く飛び、低く這はう。

言い切れるか。この苦しみが終わる日が来ると？

神も仏も、世迷いごと。

久遠くおんの果ての、その果てまでも、地獄の業苦とともに在る。

死は、救済ではない。

それを知っているから生き続ける。生きることの苦しさに、悶え、
のたうち、飛翔する。

中有ちゆうゆうの闇へ。

湿った木々の匂いを突き破り、瞬く星に届けとばかり、

……。

一瞬の、開放。浴びるばかりの月の色。

嗚呼、それでも。

振り切ることのできない苦しみはあまりに重い。
下に引く力の、強く強く、息詰まるほどに激しく、どろろと落ち
る。

切っ先鋭き下生えの茂み、茨の棘が、全身を苛む。もはや、身動
き一つならぬ。

さわさわと流れる水の音。湿った匂い。

物哀しく唱和する虫たちの声。

この世に行くべき先は、ない。逃れることなどできはしない。
ならば……。

ならば、なすべきではないか。

なすべきことを。

……。

蛭邸 その1 (後書き)

お楽しみいただけますように。

蛭邸 その2

父が任地の駿河へ出立した日、沙翻さつは、蛭邸の前へ降り立った。沙翻にはすでに母はない。

年頃の娘を、辺鄙な田舎へ連れて下ることは、娘を溺愛する、年老いた父には、どうしてもできなかった。

口をきいてくれる人がいて、沙翻は、二人の姫君と幼い若君のお世話係りとして、この蛭邸で使われることになったのだ。

蛭邸とは、なんとも優雅な名だと、沙翻が言うと、口をきいてくれた人は、微妙に言葉を濁した。ちょっと気にはなつたが、仕事の内容が、主として姫たちの話し相手だと聞いて、父は、喜んだ。

身分のある姫君たちの身近にいれば、沙翻にも、しかるべき縁が舞い込むのではないかと、期待したのだ。

広大な敷地は下草など生い茂つて、手入れが行き届いていない感じがする。下使いの者の気配もなく、なんだか寂れた感じだ。

想像していたのと、違う。

本当に、妙齡の姫君たちがいるのだろうか。

「もし。もし！」

声を掛けてみたが、返事はない。荒れ果てた庭園の奥から、こだまが返ってきてそうで、不安が募る。

困り果て、誰か来はしないかと、大路の向こうを見やり、ふと視線を戻すと、何の気配もなく、女の童が立っていた。

びっくりして、声も出なかった。

垂れて削いだ前髪のかわいらしい子だった。とても白い顔色をしている。病的な感じではないのだが、子どもらしい無邪気さはなく、ひどく落ち着いている。

にっこり微笑んで、沙醐の手を引いた。唇を横に引き結んで、頬がひきつれたような笑いだった。

女の童は、丈長く生い茂った下草の間の、まるで踏み固められたケモノ道のような、一条のすきまを縫って歩いていった。

ケモノ道には、しかし、よく見ると石が敷いてある。気をつけないと、すべる。

大きな赤松の枝が見えたかと思うと、唐突に、寝殿造りのお邸が現れた。

女の童はためらうことなく、邸の中へと入っていく。まるで迷路のように入り組んだ廊下を、沙醐の手を引いたまま、進んでいく。

この子の手を離したら、迷子になってしまう。

不安になって、沙醐は、童の手をしっかりと握りなおした。

小さな、冷たい手だ。沙醐は、自分の手が汗ばんでいるのを感じた。

邸の奥の、とある局の前で、童は、沙醐の手を離した。

「誰か？」

中から問う声がする。

「あ……」

沙翫は慌てた。

「す、駿河の国の国司の娘、沙翫にごぞいます」

「ああ、新しい女房ね」

垂れた布が捲り上げられ、中から、細面の髪の薄い、年配の女が、ひよいと顔を出した。

「よく、この局がわかったわね」

「あ、女の童が来てくれて……」

振り返ると、女の童の姿はなかった。

「女の童？」

女の顔が一瞬歪んだような気がしたが、気のせいだったろうか。

彼女は首を振り、沙翫を中に招じ入れた。

「私の名は、百合根^{しゆね}。あなたの先輩にあたる女房よ。よろしくね」

百合根は、きよときよと視線をさ迷わせ、なぜか怯えて見えた。

沙翫に白湯など勧めながら、落ち着きなく、身体を揺り動かしている。

「あのう。私、管弦も習字も和歌も、いまいちなんです。こんなんでも、勤まるのでしょうか」

沙翫は、漢文だけは父から手ほどきを受けたが、母がいないせいか、和歌や音楽など、雅な道には、あまり縁がなかった。

大きな声ではいえないが、そのたった一つの漢文でさえ、覚えた

内容は夢うつつの彼方にある。失望した父は、残りの時間を武芸を教えることに費やしたが、このことは、内緒である。

姫君たちのお相手と聞いて、教養がないという自覚が、ずっと、心にわだかまっていた。

「そんなこと。大丈夫よ、大丈夫。だって、あなたって、フツ―
ですもの」

「は？」

「あなた、妙なものが見えたりしないでしょ？」

「妙なもの？」

百合根は、ぐんと身を寄せてきた。

「天から降りてくる牛車や、羽虫の大群、光る玉とか、青鬼よ」

「お話がよくわかりませんが」

「言葉どおりの意味よ」

百合根は白湯を飲み干した。筋張った喉が、くいと動く。

所在がなくて、沙醐も、碗の白湯を口にした。幽かに香木の匂いがしみつぎ、なんだか薬臭い。

「小式部には見えたのよ」

「小式部……私の前任の方ですね」

沙醐は身体を硬くした。前任者の女房は、身体を壊して、お邸を退いたと聞く。

「いろいろ、言ってたのよね。一の姫の局が毛虫でいっぱいだとか、二の姫が、空に舞い上がって、踊ってたとか。馬鹿げた冗談よ。そんなこと、ある筈がないでしょ。それが、先月の雷の日、お庭に青

鬼が落ちたと叫んで、それっきり……」

「それっきり？」

「実家に逃げ帰っちゃったのよ」

「するとその、小式部という方は」

「頭が弱かったのね」

百合根はあっさりと言って、碗を下に置いた。

「男出入りも激しかったし。あなた、通ってくる殿方とか、いらっしやる？」

「いえ、私は、そんな」

沙醐は顔を赤らめた。沙醐はまだ若い。いつかはそのような日があると信じている、愚かといえれば愚かな乙女に過ぎない。

「あら、残念」

トウの立ち切った百合根が、さらっと言った。

「あんまりたくさん殿方との同時進行は困るけど、一人二人なら、いらした方がいいのに。このお邸は、マトモな殿方に縁がなくてね。ま、姫さまたちがあのようでは、仕方がないことなのかもしれないけど」

沙醐は、さっき見た、草ぼうぼうの庭を思い出した。あれでは、どんなに美人がいても、外から見えよう筈もない。

恋は、垣間見かいまみから始まるのに。

おこぼれでもよいから、娘に良縁を。

父のほのかな期待は、着いて早々に、ついでたような気がする。

蛭邸

その2（後書き）

「垣間見^{かいまみ}」とは、いい女はいないかな、と、貴公子などが、よ
そんちの垣根の間から覗くことです。その後のことを書くと、R1
8の指定をしなくてはならず、ちょっと長くなりそうなので、やめ
ておきます。

かの有名な「源氏物語」は、垣間見の文学、と呼ばれています。

その時、几帳のかたびらが割られ、白く光るものが飛び込んだ。
た。

「百合根さま、百合根さま」

一向に動ぜず、白湯のおかわりなどを継ぎ足している百合根の袖を、
沙翻は強く引いた。

「ただいま、何かが几帳の内に……」

「え？ 何が？」

おっとりと構えている。

「いえ、何か、光る白い玉のようなものが……」

「気のせいじゃないの？」

百合根の声に被さるようになり、ぱたぱたという軽い足音が渡殿を渡っ
て、近づいてきた。

「マロの生き須玉はどこ！」

飛び込んできたのは、まだ年端もいかぬ、垂れ髪の童だった。完膚
なきまでに着崩してはいるが、直衣と袴を着用し、ただならぬ身分
であることを示している。

「うぬ、見慣れぬ奴。何者！」

沙醐の姿を認め、間髪を入れず、左手に持った補虫網を差し向ける。太刀でも差し向けるような、仰々しい物腰である。

振り上げられた棹の先から、目の細かい網が、だらんとたれ下がった。

よく見ると、右手には、虫かごも下げている。

「まあ、若さま。無粋でございますぞ」

落ち着き払った様子で、百合根がたしなめた。しかし、その百合根の手が、がたがた震えているのに、沙醐は気づいた。

「蛭に触られたら、御手をお洗いになりましたか」

「蛭じゃない、生き須玉だ。大きいかごに移そうとしたら、飛んで逃げちゃったんだ」

「お手は？ お手は、おきれいですか？」

「……手は、まだ洗ってない」

「では、これで、お拭きなさいませ」

いつの間に用意したのか、濡らした手拭布を差し出だす。

子どもは素直に布を受け取り、両手を拭い始めた。

「こちらは、沙醐。新しい女房です」

「沙醐にございます。どうぞ、よろしゅう……」

沙醐は慌てて頭を下げた。それでは、この方が、若様……。邸には、他に、二人の姫君がいるはずだ。

「――睡こいすじゃ。見知りおけ」

取り繕ったような尊大な態度で言つと、几帳のうちを、きよるきよると見渡す。

「ここに、生き須玉が飛んできた筈だけど」

「生き須玉というのは、あの、白く光る玉のことでございますか？」

おずおずと、沙翻は尋ねた。

「お前、見えるじゃないか。百合根は、見えないと言つんだ」

「何をおたわむれを」

ゆったりとした口調で、しかし、その眼はどうにも落ち着きを欠いて、百合根が口を挟んだ。

「それより、甘いものでもいかがですか？　干し柿がございます」
袂を「ごそごそ」と探っている。

「干し柿。うん、ちょうだい」

その時、几帳の隅から、白い光がぱつと飛び立った。

「あ、あそこに！」

沙翻が指差したのと、一睡と名乗った少年が飛び上がったのは、ほぼ同時だった。

「「うら、生き須玉。待て！」

几帳から垂れた絹布を割つて、白い玉が、続いて補虫網をふりかざ

した少年が、元気よく飛び出していった。

「百合根さま……」

振り返った沙醐は、びっくりした。百合根が、両手にしなびた干し柿をしっかりと握り締め、口から泡を噴いて倒れていたのだ。

「百合根さま、百合根さま。誰か、誰かー！」

ここが平安貴族の邸宅だということも忘れて、沙醐は、力いっぱい叫んでいた。

蛸邸 その3（後書き）

平安時代の貴族の屋敷は、母屋を「寝殿」といい、他に、「対屋^{たいのや}」という建物がある。いくつかあります。「渡殿」は、これらをつなぐ、屋根つき渡り廊下、といった感じでしょうか。

建物内部は、そりゃあもう、がらんとしていますから、目隠しや間仕切りが必要です。「几帳^{きちょう}」の出番です。立てた2本の柱の上に横棒を渡し、絹などをひっかけて、使用します。中に美人などいると、大変、優雅です。

さて、「一睡」登場です。どうぞよしなに、お見知りおきを。

「直衣^{ちつし}」は、平安時代の貴族の服装です。垂れ髪、とあるのは、^あ削ぎ^{まて}のことで、おかつぱヘアのことです。一睡の外見を今風に述べてみますと、前髪はつつんのがきんちよが、大人の男のスーツ姿でキメてみたけど、なんか変……って感じでしょうか。

百合根が一睡の気を引くのに出した干し柿ですが、甘味の少ないこの時代、けっこう、貴重なお菓子でした。祭礼の供物としての記録もあるようです。

蛭邸 その4

「なんじゃ、うるさい」
「ひっ」

不意に身近でどやされ、沙醐はぎよっとした。

そして、ど迫力で迫ってくる人を見て、よりひどい恐怖を感じた。
確かに、それは女だった。

着ている花撫子の襲かさねから、若い女、それも身分のある姫君である
ことは間違いない。

しかし、驚くべきは、その顔だった。

まず、四角い。

そして、白粉など一粒ものっていないと思われる浅黒い顔には、
毛虫と見まごうばかりのもじやもじやの眉が鎮座ましましている。

眉は、剃り落とすのが普通で、沙醐でさえ、そのくらいのたしな
みはある。

天然自然の毛深い、恐ろしげな眉の下から、猛烈なインパクトを
放つ鋭い眼が、沙醐のことをきつと見据えた。

「何を騒いでおるのじゃ」

言い放ったその口元から、白い歯が、きららら……、と光りこぼれ
るのを見て、沙醐は、度肝を抜かれた。なんとこの姫君は、お齒黒
もしていない。

「お前は誰じゃ」

口をぱくぱくさせている沙醐に、重ねて問う。

「さ、沙醐……」

名を名乗るのが精一杯である。

「そうか、新しい女房だな。小式部のアトガマの。妾は、按察使の
大納言の女むすめじゃ」

すると、この姫君は一睡と名乗った少年と並んで、沙醐の新しい
主人の一人であるわけだ。

「なんじゃ、百合根は。いかが致した」

うまく言葉が出てこない沙醐に痺れをきらして、按察使の姫君は、
局の奥を覗き込んだ。

「ほう。また、何か、あらざる物を見たのじゃな」

姫君は、ずかずかと踏み込み、倒れている年配の女を抱き起こし
た。

かさつな物言いには似合わぬ、優しい仕草でゆるゆると揺ると、
百合根は、ぱつと目を開けた。

「あつ、カワ姫！」

「また、何か見たのか？」

「いいえ、私は何も……」

「ふむ。見たのじゃな」

姫君は、一人頷く。

「何も見てはおりませぬ。ただ、一睡さまがおいでになって、……。そう、蛍が。蛍じゃ！ そうであったな、沙醐殿」

「えっ？」

ふいにふられて、沙醐はうろたえた。おまけに、按察使の姫君が、例の天然自然の毛深い眉毛の下から、疑い深そうな目をぎよろりたさせて、こちらを見ているので、余計、落ち着かない。

「私は……。私には、蛍は……」

「何も見なかったのか？」

「いえ、光る白い物が見えました」

百合根が蛍と言い張るので、沙醐の言葉に勢いはない。ただ、蛍にしては大きすぎるし、光り過ぎていた。昼間のこの明るさの中でも、はつきりとわかる白い光を放っていた。

「よいのう、新参者は無邪気で」

つぶやくように、姫君が言った。はっとして姫君を見たが、それ以上の言葉は続かなかった。

その時、邸の奥の方で、何やら大きな物音がした後、甲高い叫び声が聞こえていた。

「男よ！ 男だわ！ 捕まえて！ 捕まえるのよ！」

続いて、固い角ばった物を転がすようなものすごい音が聞こえた後、幼い子どもの泣く声が響き渡った。

「やれやれ」

按察使の姫は、百合根から手を離して立ち上がった。

「男はいかん。成敗してくれよう」

「姫様、一睡さまは子どもです。何卒お手柔らかに」

百合根が縋りつく。

「お前、何を勘違いしておる。男が迷い込んでおると、迦具夜かぐやが言うておるのじゃ。一睡のことであるわけがなかるう。きつと、あの子がゆうべひつつかまえてきた、生き須玉いきすたまのことに違いない。それに……」

にやりと不気味に笑う。

「迦具夜のそばに、たとえ生き須玉といえ、男を置いておいておいたら、どんなことになるか、お前にも予想がつくだらう」

按察使の姫は、長く垂れ下がっている横の髪を、耳の後ろにたばさんで、意気揚々と、立ち去っていった。

「あなた、あなた、お願い……」

百合根が息も絶え絶えに、沙汰に懇願する。

「どうぞ、一睡様を見てきて。あの子がもう、泣くことのないように」

沙鞠は頷いて、按察使の姫の後を追おうとした。

一步踏み出した足が、なにやら、ぐにゃっ、と、踏み潰した。

足元を見ても、理解できなかった。

なぜ、そのようなものが、この繭まゆにこもったように奥深い、局しほねに落ちていたのか。

それは、およそ考えられる限りの数の、とげとげした毛を、体中

に生やした、鳥毛虫かわむし 毛虫 だった。

そうしてそれは、もちろん、潰れていた。

再び、静かな貴族の邸宅に、沙鞠の悲鳴が響き渡った。

蛭邸 その5

「この中に逃げ込んだのよ」

そう言った姫君は、これはまた、女の沙翻でさえ、息を飲むような美しさであった。

たとえではなく、本当に、光り輝いているのだ。

沙翻は何度も目をこすり、その、光り輝く姿に目をこらした。人間離れして、美しい。

この方が、先ほど、按察使の姫君がおっしゃった、迦具夜姫である。まこと、かぐ（光る）というにふさわしい、美しい姫君であった。

「たわけたことを。妾の局つぼねに逃げ込んだだと？」

按察使の姫君が鼻をならした。

「踏み込むわよ」

美しい姫は、按察使の姫の憤慨には頓着していない。

「迦具夜、それは、まずいんじゃないの」

真赤に目を泣き腫らした一睡が、迦具夜姫の袖を引く。

「ぞろぞろ出てくるよ」

「それは……」

迦具夜姫は、腕を組んで、考え込んだ。

「そうね、この局の主が行くべきね。カワ姫、あなたが、捕まえてきて」

「いやじゃ。男なんて、身の毛もよだつ。ここは、この邸に持ち込んだ、一睡の出番じゃろう」

「確かに。妙なものを捕まえてきた、一睡が悪い。一睡、行きなさい」

「マロはいやだ！」

言下に一睡が答えた。

「カワ姫の局しほねになぞ、誰が入るものか。マロは、絶対に、いやだ」

「確かに一理あるわ。カワ姫。あなたの局なのよ」

「厭だと、言っておるだろう。だいたい、男は、そちの専売特許である」

「失礼ね。男どもが、勝手についてくるだけよ。それに、私がいたぶって嬉しいのは、生身の男だけ。魂だけいたぶったつても、おもしろくもおかしくもないわ」

迦具夜姫が美しい顔をして、恐ろしいことを言う。

沙醐には、完璧には理解できなかったが、とにかく、一睡坊やが捕まえてきた、あの白く光る玉が、按察使の姫の局に逃げ込んでしまったことだけは、おぼろげながら把握できた。

「あろう」

沙醐は、恐る恐る、三人の主人に声をかけた。

三人は、今更ながら沙醐の存在に気がついたように、こちらを見た。

「迦具夜の姫さま、お初にお目にかかります。沙醐と申します。今日から、こちらのお邸でお世話になります。どうぞ、よろしゅうに身を折って、深々と一礼する。」

「この人、見えるんだよ！」

手柄をあせるように、一睡が叫んだ。

「まあ！」

迦具夜姫が、輝くような顔に、邪悪な微笑を浮かべる。

「飛んで火に入る夏の虫、というか、雷の日の木登り、というか、なんとというタイミング……」

「迦具夜、それはかわいそうだよ。カワ姫の局には……」

「なんじゃと。妾の局を侮辱する気か！」

「お黙り！」

迦具夜姫が一喝した。

そして、にわかに一変して、うっとりするような素敵な微笑を浮かべて、沙醐に向き直った。

「沙醐、この邸に来て、さぞや嬉しいことでしょう。どう、初仕事をしてみない？」

「はい」

沙醐は張り切って、美しい女主人の顔を仰ぎ見た。

「さきほどあなたが見たという、白い玉、あれが、この、カワ姫の

局に逃げ込んで、困っているの。ほら、貴族の娘には、似合わないものでしょ。体裁というものがあるし。それを、捕まえてきて欲しいの。いえね、噛み付いたり、襲い掛かったりということはありません。おとなしいものです。ただ、光るといっただけで、みな、気味悪がって……。でもまさか、姫たちや御子が捕まえたりなんかできるわけがない。どう？ 私たちを助けてくれない？」

「喜んで」

この世のものとも思われぬ、美しい女主人から、このように頼まれて、断れる使用人がどこにしようか。

喜んで、と、答えた沙翫の言葉に、嘘はなかった。

ただ、先ほどの、男がどうのこうの、という言葉には、ちょっと不安を感じた。

だが、沙翫だって、受領の娘、身近に全く男がいなかったわけではない。現に、泥だらけになって遊んだ幼友達の大半は、男だった。

それに、あの玉が人間の男であるわけがない。きつと、何か珍しい生き物のオスなのであろう。貴族の邸には、とかく、下々の者の予想もし得ないようなものがあるものだ。

「喜んで？」

迦具夜姫は、手を打って、喜んだ。

「頼もしいわ！ 是非、あの玉を捕らえてきて。期待しているわよ」「はい！」

張り切って、沙翫は答えた。噛み付きも襲い掛かりもしない、ただ光るだけの白い玉を捕らえるのに、何の困難があろう。おまけにこ

れは、初仕事だ。是非とも、主人らの気にいらなければならぬ。

「気をつけてね」

先ほどの横柄さが、影も形もない様子で、一睡が捕虫網を差し出した。

「マロのタモを貸してあげる」

「ありがとうございます」

沙醐は、この小さな少年に微笑んだ。よく見ると、愛らしい顔をしている。

「沙醐とやら。局の中の物には、決して、触らんで欲しい」

やや不安そうに、按察使の姫君が言った。沙醐は、絶対に、何にも触らないと請合った。

「では、しばしお待ちを」

大層な決意をすることもなく、軽い気持ちで、沙醐は、局の入口に垂らされた、帷子かたひらを上げた。

「早う!」

按察使の姫君が急かした。

「早う、入るのじゃ。しゃっ、と入らねばならぬ」
「はい」

沙翻は、衣擦れの音をたてて、何だか薄暗い局の中に踏み入った。

蛭邸 その6

ここ、空気が悪いわ。掃除の時に換気をしなくっちゃ。

そう思った時だった。光の透き入る、入り口の帷子かたひらを、誰かがぎゅっ、と抑えた。そのまま、でんと、立ちふさがっている。

出口を塞がれた？。

心に浮かんだ思いを、沙汰は打ち消した。主人が、使用人を局しほねに閉じ込めるなどということが、考えられなかったからである。

それにしても、薄暗い部屋である。

それに、あちこちに、なにやら四角いものが積んである。几帳の下、文机の上、見渡す限り、角ばった箱のような物が、危なっかしく、積みまれている。

「捕まえた？」

せつかちな迦具夜姫の声が聞こえてきた。

「いえ、あの、部屋の中が暗いものですから」

「光るものよ。白く光るものを探すの」

「あちこちに、箱のような物が積みまれている……。どこかの影に隠れているに相違ちがいません」

「箱に触ってはならぬ！」

ヒステリックな声で、按察使の姫が叫んだ。

「いいか、沙醐とやら、どの箱にも、指一本触れてはならぬぞ」
「はあ」

それで、どうやって探すのだと、沙醐は途方に暮れる思いだった。
光る玉なぞ恐くない。しかし、この薄暗がりの中で、陰に隠れたモノを、部屋の中の物に触れずに、どうやって探し出したらい？

「沙醐、踊るのよ」

鈴を振るような、とても形容したくなるくらい、麗しい声で、迦具夜が言い寄越してきた。

「古の物語にもあるでしょう？ 自ら隠れたのを引き出すには、にぎにぎしく踊り狂うのに限るのよ」

「何のをおっしやっているのか……」
「おっぱいをちらちらさせて、股の間をすっかりさらして踊るんだよ。着物をぐつともちあげて」

無邪気なのか無知、否、無恥なのか、一睡がはしゃいだ声で言う。
「冗談なのだと、沙醐は思う。」

「ほら、マロが歌うから。」

大荒木の 森の下草 老いぬれば

変な節をつけて歌いだす。

「大荒木いゝのおゝ 森のおゝ下草あゝ あゝ老いぬればあゝ
ねえ、踊ってる？」

「え？」

「え、ではない、踊りなさい」

ここから、迦具夜姫も唱和しだす。

「駒もすさめず 刈る人もなし」

この世のものならぬ美しい声に、知らず知らず、沙醐の腕が持ち上がる。イマイチ、とはいえ、最低限の教養は、父がつけてくれた。母なき娘に、なんとか良縁を、という、悲願からである。最低限の舞踊の心得もある。

「あゝ駒もおゝすさめずうゝ 刈るうゝ人おゝもおゝ、なあしいゝ」

それにしても、迦具夜姫の、なんとという美声であることが。

「なんじゃなんじゃ、辛気臭い」

蛮声とでも表現したくなるような、いがいがした声が割り込んだ。言わずとした按察使あせちの姫の声だ。四角く角ばった顔が、くつきりと沙醐の臉に浮かんだ。

「それは、どうした歌か、知っておるか」

「あなたの歌よ」

「なんじゃと」

「だから、カワ姫の歌だと、言ってるの」

「その歌のどこが、妾の歌じゃ」

「ああ、ものわかりの悪い。一睡、説明しておやり」

「だからあ。森の下草が枯れちゃって、馬がこない、あ、馬つてのは、若い男のことね。つまり、この年になると、男なんて来っこないっていう……」

「そ・の・う・た・の・おー！」

「は？」

「その歌のぉー、いったいどこが、妾じゃー！」

「だから、全部」

「こらぁー！ー！」

外廊下で、派手な音がする。

うえーん、という、一睡の泣き声。

この邸では、全ての揉め事は、一睡の泣き声を誘発するらしい。

その時、奥の文机に置かれた箱の影から、白い光が、僅かに漏れた。

「あっ！」

外からは相変わらず、二人の姫君のわめき合いと、一睡の泣き声が聞こえてくる。

箱の影から、覗くように、白く輝く球体が顔を出した。

「いた！」

外の騒ぎがぴたりとやんだ。

「いたのね」

「捕まえよ。決して逃すでないぞ」

「うえーん！ー！」

複数の指示が飛んで、沙鞠は一步を踏み出した。

「あ、痛っ！」

文机の角に思い切り、向うずねをぶつけた。こんなに暗ければ、無理もない。

乱暴な男でも泣き出しそうなほど、痛い。

「いた、は、わかっておる。はよ、捕らえるのじゃ」

「はっ、はいっ！」

主の命令は、神の声、痛みをこらえて、沙醐は、更なる一步を踏み出した。

机の角にぶつけた右足を、こころもち、引きずったのは、仕方のないことといえよう。

上げきれなかった右足が、机の下に積まれていた箱の山の頂上を掠めたのは、これまた、仕方のないことといえよう。

箱の山が崩れたのは……これは、天の配剤というしかあるまい。

しかし、箱の中から出てきたものは……。

ぶーん、というこの羽音は？

委細構わず、沙醐は、白く光るものに向けて、捕虫網を突き出した。なんとか、そやつを救い上げようとする。

この邸にきての初仕事だもの、失敗するわけにはいかない。

ふわり。白い玉は浮き上がった。

部屋の上まで舞い上がり、馬鹿にしたように、ぼこぼこ上下する。

「おのれ」

沙醐は頭に血が上った。

網をふりまわす。長い袖が邪魔になる。袖をまるめ、袂に突っ込んで、しゃにむに、白い玉を追い回す。

タモの先が、部屋の隅に高く積んであった、箱を振り払った。滑り落ちた箱は、その隣の箱の山に雪崩落ち、そのまた隣のがらからがら。凄まじい音がした。

「なんじゃなんじゃ。まさか……」

悲鳴のような按察使の姫の声。

「箱が落ちましてございます」

「だから、あれほど……」

「東の箱だけでございます」

「ああ……」

「全然、一向に、構わないわよ」

涼やかな迦具夜姫の声。

「いや、構う。沙醐、お前はクビじゃ」

「玉を捕らえたら、許す！」

すかさず、迦具夜姫が言う。

沙醐は、あせった。

あの玉を捕まえねば、もう、今日から、行くところはない。

玉は、部屋の上で、次第に光を強くしていく。

「あっ！」

「いかがいたした！」

「壁が、壁が動いております！」

箱の上に僅かに除く部屋の壁が、なにやら、もぞもぞ動いて見える。

唱和したのは、一睡の悲鳴だったと思うが、さだかではない。

沙朶を追うようにして、あたり一面、燐粉を撒き散らしながら、蛾の大群が、大量に、局から飛び出してきた。小さなものでも雀くらいの大きさのそいつらは、そのまま、黒いつむじ風のように、外へと飛び出していった。

蛭邸 その6（後書き）

少し補足を。

迦具夜姫の言う、「古の物語」とは、「古事記」のことです。

隠れてしまったアマテラスを引き出す為に、

天の岩戸の前で、アマノウズメが踊ったという、例の一件です。

一睡が下品なことを言っていますが、

日本の神話を踏まえた、教養あふれてじゃぶじゃぶのセリフと、「
理解下さいませ。

また、歌は、「源氏物語」の「紅葉賀」からの引用です。

わりと正直に引用しておりますので、カワ姫が、怒っております。

お読みいただいて、ありがとうございます。

来週より、分量をもう少し増やし、

午前中の更新とさせて頂きます。

蛍邸 その7

顔中が目のオバケが、ドアップで覗き込んでいる。
びっくりして、飛び起きた。

顔を覗き込んでいた一睡と、思いっきり、おでこを鉢合わせた。

「あたたたたた」

額に手をやる。なんだか膨らんでいる気がする。

「こぶが……」

「こらあ。ご主人さまの心配をしるおー！」

痛そうにおでこを抑えているわりには、元気いっぱい声が、威張っている。

「あ！ 一睡さま。」

沙翻は、廊下に寝かされていた。あのまま、ここに放置されていたのだろう。

「マロの柔らかかなおでこにできた、コブの心配をしてよ」
「も、申し訳ございません」

思わず平伏してしまった。

それから、はっとした。

「姫様方は？」

「迦具夜は化粧でもしてるんじゃない？ カワ姫は、メメズと一緒に、虫取りに出かけたし」

カワ姫と聞いた途端に、さきほどまでの記憶が、洪水のように、沙
醐の頭に蘇ってきた。

何よりも、あの、壁をわしわしと這い回る、あまたの毛虫たちの
映像が、鮮やかにフラッシュバックする。

ああ、思い出しても身の毛もよだつ。

あの、おぞましい、いばいぼとげとげの、

あ、そういえば、さつき、百合根の局で一匹ふんづけたような……。

……あれは、カワ姫の体から落ちたものに相違ない。

いけない、私ったら。ご主人さまを「カワ姫」だなんて。身のほ
どをわきまえなくっちゃ。

……。
なんだか、腕がかゆい。あああ、ケが、毛虫のケが、刺さってる

「カワ姫でいいんだよ」

気の毒そうに、沙醐の腕を覗き込みながら、まるで沙醐の心を読ん
だかのように、一睡が言った。

カワ……鳥毛虫かわとは、毛虫のことである。

「カブレてるね」

不意に、全ての記憶が蘇ってきた。

「私！ 私、やっぱりクビになるんですか？」

「うーん。カワ姫の大事なペットどもの箱をひっくり返したからなあ。よくも、そんな大それたマネができたものだ。勇気あるね」

「わざとではございません」

「マロらは、触ることとて許されないと云うのに。ま、触りたいとも思わないけど」

「それは、私も……」

同じことである。

しかし、そんなことを言っている場合ではない。

「あの、私の処遇は……」

「うむ、それだ」

「クビ？」

もうどうにでもなれという気もする。

しかし、クビになったら、行くところがない。

一睡は、にたりと笑った。

「生き須玉を捕らえたら、許してあげる」

「生き須玉って、さっきの、あの、白い玉のことですか？」

「そう。奴らは、暗い夜でないと、満足に動けないんだ。ほら、まだ、そのこの松の枝に……」

昼間の明るさで見にくくはあったが、確かに、赤松の高い枝の上に、白い塊が、ぼわんと鈍く光っている。

「あのような高みに……」

「そうだな。おーい、迦具夜あー！」

「呼んだあ？」

間の抜けたような声と共に、ふわふわ現れた迦具夜姫を見て、沙醐は、腰を抜かしそうになった。

なんと迦具夜姫は、庭の、地上数メートルほどのところを浮揚しているのだ。

しかし、按察使の姫君の、あの虫攻撃の後では、どのようなことでも受け容れることができるほどに、沙醐の神経は参っていた。

浮遊する迦具夜姫に、一睡が言う。

「あの生き須玉、な、ちよっと、高すぎる」

「はあ。それで？」

「沙醐には、届かないだろ」

「そうねえ。沙醐、木登りは得意？」

「苦手です」

「仕様が無いわねえ」

迦具夜姫は、袂から何かを取り出すと、ふわりふわりと、なおも地上高く、生き須玉のそばまで舞い上がった。

「沙醐、糸をつけてあげたわよ」

「糸？」

見ると、確かに、玉から白い糸が下に垂れ下がっている。

「私は、あなたを気に入ったわ。クビにしたくないもの」

そう言うと、高らかに笑いながら、西の方角へ飛び去っていった。

大変な美女だけに、なんだか凄く、妖怪じみていた。
ついでに捕まえてくれればよかったのに、と、沙翮は思う。

「カワ姫だつてな、お前をクビになど、したくないのだ。見かけは怖いが、本当は、優しい女なんだ」

一睡が言う。

「……」

もじゃもじゃ眉に、きららかに光る齒。

「だから、お前に最後のチャンスを与えて、自分は新しい虫ハエを探しに行つたんだ。ここで、お前が、生き須玉さえ捕まえれば、全ては丸く納まる」

「しかし、私にできましようか?」

「カントン至極」

一睡は力をこめた。

「暗くなって、奴が飛び始めたら、な、あの糸に飛びつけばいい」
「今ではいけませんか? 今、引きずりおろすというのは?」

「生き須玉は明るい昼は弱っている。そのような時に戦いを挑むのは、卑怯というもの」

「はあ」

「心配するな。マロが見守つてやるから。最後までつきあってやるぞ」

「一睡さま……」

思わず沙翮は、目がつるむのを感じた。

一睡は、鷹揚にうなずいた。気分よさげだった。

「あらあら、まあまあ」

百合根が現れ、二人の額にできたこぶを見た途端、走り去った。

すぐに、氷の入った桶を持って戻ってきた。大きく膨らみ、熱を持ったこぶに、氷の塊は気持ちよかった。

沙醐には、初めての冷たさだ。

腕の、毛虫にかぶれた所も、毛抜きで丁寧に棘を抜き、よく洗って、軟膏を塗りつけてくれた。

「下手な薬師より、よっぽど役に立つ」

一睡が自慢げに言った。

「ときに百合根、あれ、松のてっぺんの、生き須玉が見える？」

意地悪そつな口調だった。

「生き須玉」と聞いた途端に、百合根の顔が歪んだ。

「見えませぬ。そのような、あらざりしもの、この身には、何も見えませぬ」

「沙醐、お前は見えるよな」

「はい」

一睡の片棒をかついで、百合根をいじめるような結果になりかねなかったが、見えるものは仕方がない。

沙醐には嘘はつけない。

「不思議だねえ。沙醐には見えて、百合根は見えないと言っ。なぜだろうねえ」

「見えぬものは見えませぬ」

「百合根の目は、おかしいのかねえ」

「百合根の目には、あらざりし物は映らぬのでございます。それが、憂き世を生きる、知恵というもの」

「あのう、イキスダマとは、何ですか？」

沙醐はおずおずと口を出した。

「生き須玉、知らなかったの？」

「一睡があきれたように言った。」

「一般常識が欠如しているねえ」

「まっとうな生活をしていればね、そんなもの、知らなくて当然なんです」

百合根がきっぱりと言いつつ切った。

蛭邸 その8

その時、松の枝の上で、白い玉がかすかに、みじろぎをした。

「あ、動いた！」

「沙醐、行け！」

沙醐は慌てて、打ち合わせどおりに、白い糸にとびついた。背後で、百合根がひっくり返る気配がした。

「まだ、酉の刻にもならないのに。生命力の強い奴だ」
一睡がつぶやいた。

沙醐はそれどころではなかった。ひもが、物凄い力で、上へ、上へと、引っ張られたのだ。

「あ、あー！」

叫んでいるうちに、足が地面を離れた。

「ちょっと、ちょっと、」

驚きの余り、こんなまぬけな言葉しか出ない。

続いて、ばしばしばしつ、と、木々の下枝の先が顔を打ち、凄まじい声をあげて飛び立つ鳥たちの羽が、耳元をかすめた。

でも、この糸を放したら、私は、クビ。

きつと、京を出ないうちに、野垂れ死に。

遠く駿河の地で、父上が、さぞ、嘆き悲しむことだろう。

命に替えても、イキスタマとやらを、逃すわけにはいかなかった。
沙醐は、目をつぶって、必死の思いで糸にしがみついた。

「じつじつと、風の音がする。」

「いいぞ、沙醐、糸を放すな」

風をつんざいて一睡の声が聞こえた。
沙醐は薄く目を開けた。

「ひええー！ 飛んでる」

蛭邸の、ぺんぺん草の生えた屋根が、はるか下に見えた。

「あ、こら、手を放すなと言ってるでしょ」

一睡の声に、我に返る。ここから落ちたら、命の保証はない。

「一睡さま、と、飛んでおります」

「それがどうした」

そういう一睡も……。

「い、一睡さまも、飛んでおります」

「だから、それがどうしたと、聞いてるのっ！」

「普通、人は、飛ばないものでは？」

全く、迦具夜姫といい、この、一睡といふ……。

「百合根のようなことを、言うな！」

平安貴族は、空を飛ぶのもアリなのか？

沙醐は混乱した頭で考えた。

何にしても、上空百米メートルほどの地点で、まともに頭が働くわけがない。

一睡は、空をつんざくように、一直線に、沙醐の横を滑っている。その手には、しっかりと、捕虫網と虫かごが握られていた。

「手、手が痛い。肩が抜けそうです」

糸を握った両手が上に引つ張られているのだ。

てのひらに食い込む細い糸も痛ければ、腕だけで、自分の体重を支えることも、そろそろ限界に近い。

「大丈夫、抜けやしないから」

「もうダメです」

「落ちたら死ぬよ」

「一睡さま、下から支えて下さい」

「下から支えろって？ 主そなたに向かって？」

「だって……」

「もう少し頑張って！ 高度が落ちてきたようだよ」

確かに、目の下の家並みが迫り、どうやら、下降しているようだ。恐れ多くも、内裏の近くであるらしいことが、沙醐にもわかった。

「生き須玉のやつ、家に帰るつもりだな」

「一睡さま、生き須玉って……」

「生霊のことだよ。この世の憂きことに耐えられなくなって、体を抜け出してしまった、魂魄のこと」

「それって、バケモノのことじゃあ……」

「あーっ、手をは・な・す・なー！」

一睡が叫んだのと、沙翻の体が、透垣すいがいに叩きつけられたのは、ほぼ同時だった。

凄まじい音をたてて、土ぼこりが舞い上がった。

「あいててて……」

今日は、よくよく、ひどい目に遭う。

体に降り積もった椿の小枝や葉を、のろのろと払い除けながら、沙翻は思った。

小さな擦り傷はたくさんできたが、大きな怪我を負っていなかったのは、奇跡だ。

多分、沙翻が手を放した時点で、低空飛行になっていたせいだろう。

「大丈夫？」

さすがに心配そうに、一睡が、そばによつてきた。

このたびは、沙翻も、それが好意だと、誤解しなかった。できるわけではない。

「大層、痛うございました。それに、衣が台無しです」

「衣くらい、いくらでも、賜るぞ。迦具夜がなんとでもしてくれる」

「迦具夜さまの御衣おんそは、私にはハデ過ぎます」

「わかった。母上に頼んであげる」

母親がいたのか。ま、いるかもしれない。

「それで、生霊は？」

「体のところへ帰ったのだ。この家に住んでいるようだね」

どうやら、魂は垣根をすり抜けたのに、生身の沙翻の方はすり抜けることができず、垣根に叩きつけられたらしい。

手を放してよかったのだ。

ここが、土塀じゃなくて生垣で、本当によかった。

「で、どうします？」

「決まっている。乗り込む」

「一睡さま、このお邸は、かなりの家柄のようでございますよ」

内裏だいりの近くであることといい、一睡たちの蛸邸とは比べ物にならないほど手入れの行き届いた庭といい、とてもではないけれど、家人の承諾なしに、中に入り込むことができるとは思えない。

「それに私たち、生垣をこんなに壊しちゃったし」

「あの生き須玉は、マロのものだ。取り返さなくちゃ。マロが捕まえたんだ」

「生霊は本人のものでしょうか」

呆れて、沙翻は言った。

「体の元に帰れて、よかったじゃないですか」

「よくない！」

その時、邸の方から、郎党どもがばらばらと走り出てきて、二人

は取り囲まれた。

「なにやつ!」

抜き身の刀を振りかざし、殺気立っている。

昨今新興してきた武士たちは、気性も荒く、何をするかわからない。女子どもが相手でも、平気で乱暴を働くと聞く。

沙鞠は震え上がった。

その時、緊迫した空気を引き裂いて、りんとした声があがった。

「わが名は、一睡。たちはなのもろなお橘師直中将殿にお会いしたい」

年端もいかぬ少年が、思いもかけず、大人顔向けの言上を述べたからか、武士たちがたじろいだ。

一睡が、大きく息を吸った。

「橘師直中将殿、おわしますか! ただす 糺の森のお約束、貴殿の苦しみを取り除きに参りましたぞ」

甲高い、少年の声が響き渡る。

「は?」

頭領らしき、一際凶悪そうな武士が、首を傾げた。

手下どもは、大声を出す少年とその連れに、手を出しかねている。

逃げるチャンスかもしれない。

沙鞠は思った。

どこまで逃げられるかわからないが、いざとなれば、一睡は、空を飛ぶことができる。

自分が、武士どもを、一瞬でも引き付けておくことができれば、大事な主人を逃がすことができるのではあるまいか。

「紂の森の約束？ ええい、わけのわからぬことを！ われらが主人は、滅多なことでは邸の外へお出にはならぬわ」

ついに、頭領が太刀を高く振り上げた。

「邸に討ち入る怪しい奴、成敗してくれる」

……もはやこれまでか。

いや、最後の最後まで諦めない。

沙翻は、一睡の袖を引いた。走ろう、という合図である。

その時、鈴の音が、辺りの緊迫した空気を切り裂いて、りん、と鳴った。

武士達は、互いに顔を見合わせた。振り上げられた刀が下におろされる。一睡と沙醐を困んだ輪が次第に広がっていった。

りん。

再び鈴の音がして、輪の一部が崩れ、立派な身なりの女房が進み出てきた。

焚き染められた香の匂いが、幽かに漂ってくる。

「お客人に無礼であろうぞ」

女にしては低い声ではあったが、威厳があった。長年、人に命令しなれている人の声だ。

武士達は、一斉に刀を鞘に納め、頭を下げた。

「下々の者が、失礼をば致しました。いざ、中へ」

否やを言わせぬ強い声である。沙醐は、催眠術をかけられでもしたように、ふらふらと前へ進み出た。

一睡が、沙醐を引き止めた。

「お前んところは、客人をもてなすのに、白刃を以ってなすのか！」
一睡の唇の両端が、得意げにびくびくするのが見えた。

シヤレを言っている場合じゃないのに。

せつかく命を救ってくれた人を怒らせてどうする、と、沙醐は気がでない。

女房は、ほほほ、といささかの華やぎもない乾いた声で笑った。
「これは申し訳ありません。では、こちらにも、壊れた生垣や、折れた立ち木のことは、不問に付しましうぞ。」

一睡が何か言おうと口を開きかけたのを、女房は制した。

「いずれも、都、随一の庭師の技、修復には、どれほどの費用がかかりますでしょう。何も、若い身空で、一生かけて償うことはございませんでしうに。」

一睡は齒噛みした。

女房はゆっくりときびすを返し、歩き出した。

長い裳裾もすそが、ふわふわと広がっている。人ごとながら、これでは庭掃除ができてしまうのではないか。高級そうな衣裳なのに。

その端を、一睡が、足を振り上げてふんずけようとしたのを、危ういところで、沙翻はおし留めた。

奥の間に着くと、女房は頭を下げ、退いた。

「こちらへ。」

几帳の影から、弱々しい声がある。

「まるで、女のようにだね。」

「しっ、聞こえます。」

沙翻は慌てて、一睡を黙らせた。

若く、青白い男が、脇息わきしやくに寄り掛かっていた。

「橘師直です」
声まで弱々しい。

若い男は、なよなよと首を振り、沙醐に目を止めた。

「どこかでお会いしたようない……」

しかし、沙醐には、覚えがない。

「この女人は？」

「わがハシタメじゃ」

一睡が短く答えた。

「ハシタメ……」

沙醐は、つくづくと我が身を見下ろした。破れた衣服、泥と細かな木の葉にまみれたこのかっこうでは、ハシタメと言われても仕方がない。

「私の苦しみを取り除いてくれると、のたもつておられたが……」

一睡に向き直り、おずおずと言う。

「生き苦しさを取り除いて進ぜましょう」

すまして、一睡が答える。

「頃はよし。さ、庭へ参りましょう」

そして、師直に手を差し延べた。

「なにをぼんやりしておる。肩をお貸しせぬか」

一睡の、沙醐に対する言葉遣いが変わっている。

沙醐は慌てて、師直の体を支えた。

師直の体は、ぐにやぐにやと、捕らえどころがなかった。全身を

預けてくるので、小柄な沙醐には支えきれない。

「一睡さま、お手をお貸し下さい」

一歩先を歩いている一睡に懇願するのだが、耳も貸さない。最初に差し伸べた手も、とうに引っ込めてしまっている。

「一睡さま!」

「うるさい。マロは、箸より重いものは持ったことがないんだ!」

虫網は、箸より重いぞ。心の中で沙醐は突っ込んだ。

庭には、大きな池があった。

一睡が石を投げ込むと、静かに波紋が広がり、やがて消えた。

師直は、池に渡された橋の、朱塗りの欄干に身をもたせた。

沙醐は、ほっとして、肩を外した。身を離してもなお、全身に、師直の体臭がまわりついてくるようで、気持ちが悪い。

「今宵は風もなく」

「水面も穏やかでござるな」

「水草にも風情がございます」

「猿沢の池の玉藻にも劣らず」

一睡と師直は、風流な会話を交わしている。

昔、まだ奈良に都があったころ、帝の寵愛を失ったと思い込んだ采女うねめが、猿沢の池に身投げしたという。

玉藻というのは、その采女の乱れ髪を表現している。

さすが、平安貴族。腐っても鯛。今のこの場面さえも、物語の中の一場面のようにはないか。

沙醐は、ちよっと感動した。

「鯉は、おりますか?」

「大きい奴がおりますよ。うっかりすると、指を噛まれるそうです」

「かなり深い池なのでしょうな」

「わが悩みと同じくらい」

「それは理想的」

「は?」

「独り言です。時に、美しい月ですな」

つられて、沙翻も空を見上げた。

その時、まるで牛が鳴くような、モオーツ、という声が聞こえた。物語世界をぶち壊すような、野太い声だった。

驚いて、沙翻は、池の面に目を映した。牛の音が、池の中から聞こえたような気がしたのだ。

しかし、師直はなお、うつとりと、月を見上げている。

「あの声は……」

問いかけて、ぎょつとした。

ひそかに師直の背後に廻り込んだ一睡が、かがみこんで、上を向いた師直の足をすくおうとしているのに気がついたからである。

こんな、橋の上で足をすくわれたら、欄干を飛び越えて、池の中にまっさかさまである。

池は深いし、水草が生い茂っているようである。

そうでなくても、師直のようなぼやとした貴族が、池に突き落とされて無事でいられよう筈がない。

子どものいたずらにしても、悪質だ。

「一睡さま……」

思わず声が尖る。

一睡は、ちらつと沙朶を見ると、悪びれた様子もなく、もとの姿勢に戻った。

「ああ、あれは、ウシガエルですよ。牛の声で鳴く蛙です
師直は何も気付いていない。」

蛭邸 その10

「さてと。もう少し先までいってみませんか」

再び師直もろちくに肩を貸し、立派な庭園ていゐんの中をよろよろと歩く。

「師直殿は、どの木がお好きですか。やはり、桜でしょうか」
「桜の花は、私には派手過ぎます。いつの間にやら盛りを迎え、地味に長く咲く、桃の花が好きですね」

「長く」は、「百歳ももとせ」など、「桃」と同じ読みをする「百もも」を踏まえている。

これまた、雅な表現である。
沙醐は、再び感心する。

それにしても、師直の体は、重い。柔らかくて、捉えどころがない。もう少し、鍛えた方がいいのではないか。

「なるほど、桃の方が大きくてうまいですね」
一睡が、見当外れの感想を、述べた。

師直は足をもつれさせ、なかなか前へ進めない。
身軽な一睡はどんどん先に行ってしまった。

「庭を歩くのは、久しぶりです」
息を切らせながら師直が言う。

「はあ」
いらいらしながら沙醐は答えた。

師直の体臭がきついのだ。息が切れているのに、思い切り呼吸するのがためられる。

だいたい、女の肩を借りなければ歩けないなんて、ちょっと、まじいんじゃないか。そう言いたかった。

しかし、身分が高く、教養豊かな貴公子に、そのような野卑な暴言は許されよう筈もない。

「あなたとは、どうも、初めて会った気がしない」

「ばつちり、初対面です」

短く沙翻は答えた。

沙翻の知り合いの中には、体の具合が悪いわけでもないのに、一人で歩けないような、なよなよとした男はいない。

「あなたは、なにか、とても懐かしい……」

師直が言いかけた時、

「おおい、こっち、こっち」

一睡が呼んでいる。

見ると、桃の木の下に座り込んで、みずみずしい果実にかぶりついている。

「ほほう、見つけなさいましたか」

微笑を含んで師直が言う。

「水蜜桃ですな」

「水蜜桃です」

師直と一睡は微笑みを交わす。

重い荷物をここまで担いできて、沙醐は、喉が渴いていた。
一睡の食べている桃から目が離せない。

「師直殿、ここに縄が吊ってあります。ここにお首を差し入れられたら、下賤の者の肩にすがらなくても、よろしうございますよ」

誰が下賤の者だよ。沙醐は心の中で毒づいた。

「おお、ごくろつさんだったねえ」

師直は素直に、垂れ下がった丸い輪の中に首を掛けようとすが、少し高すぎる。

「ほら、この桶の上に乗って」

どこから拾ってきたのか、一睡が、丸い桶を逆さにして差し出す。

「何から何まですまないねえ。どれ、どっこい、しょ、っと」
師直は桶によじ登り、縄に首を差し入れた。

その時、一睡が、桶を蹴飛ばした。

縄がぐつとしまる。

「うぐっ、ぐぐぐっ」

師直の顔がみるみる紅潮していく。

「ひええええー！ 一睡さま、何を……」

考えるより先に、体が反応していた。

沙翻は慌てて師直の体を下から抱き上げ、首に掛った縄をたるませた。

「ほら、首をお出しなさい！」

師直は両手をばたばたさせる。

暴れられると、沙翻は、腕がちぎれそうだ。

「そうじゃないの、首から縄を外すのよ、あんたの両手は自由なんだから！」

もはや身分どころではない。沙翻はどなりつけた。

ようやく、師直が首に巻きついた縄を外した。

沙翻は力を抜いた。

火事場の馬鹿力を出し切ってしまったのだ。

支えを失って、師直の体が、どさりと地面に落ちた。

「うっ。腰が……」

「腰くらいなんなのよ……」

危うく死ぬところだったではないか。

「そうだぞ、沙翻、乱暴だぞ」

一睡がはやし立てる。

「乱暴ってねー！」

沙翻は、一睡を睨みつける。その手に、短刀が握られているのを見

て、ぎよっとした。

一睡は、素早く身を躍らせ、倒れている師直の首筋に短刀を突きつけた。

「どうも今日は仕損じる。師直殿、あいすまぬのう、手際が悪くて」

状況がわかっているのかいないのか、師直は、目を白黒させているばかりだ。

「実を申すと、マロは、血が出るやり方が、一番好きなんだ。沙醐、お前は、初めて見るんだろ？」

「一睡さま、何を申されます！」

もはや、何が何だか、わけがわからない。ナントカに刃物というやつだ。とにかく、なだめなければ、と思った。

「この辺りを切るとね、血が、それはそれは激しく飛び散るんだ。なんといったらいいか、まるで、抑えられていた流れが、一気に開放され、喜び躍り出るよう。身の丈くらいは、軽く飛ぶよ。赤くてね、それはそれは赤くて……」

師直の首筋を、うつとりとした目で見据え、一睡が言った。妖しい目つきに変わっている。

「一睡さま、刃物はなりませぬ。ほら、血は、お着物が汚れます」

自分でも、妙な言い草だと思ったが、異常事態にフリーズしてしまつて頭が働かないのだから、仕方がない。

「心配は要らないよ。百合根が洗ってくれるから」

「って、そういう問題じゃありません！」

「フヒィィ、沙醐とやら、助けてたも」

今頃我に返ったのか、師直が哀れな声で助けを求める。

「ほら、師直さまが、助けてくれって」

「血が噴き出すやり方は、好みじゃない？」

一睡が心外そうに首を振った。

「あの噴き出す血の優美さは、雨上がりの虹の架け橋にも似て、一瞬の生命の美の極致というか……」

その後に残るのは骸でしかないというのに、生命の美の極致はな
いものだ。

沙醐は呆れた。

「師直さま、ほら、なんとかおっしやって！」

「た、助けて……」

「では、他の方法を考えようか」

一睡は、短刀を鞘に収めた。

沙醐は素早くそれをひったくった。

「あ、何を……」

「こんなものを、子どもが持つもんじゃありません」

「マロをコドモ扱いしたな！」

「だって、コドモじゃありませんか」

「マロがコドモなんじゃない、そなたが、ババアなんだ」

「ババアですって！」

沙翻は柳眉を逆立てる。

「ま、迦具夜やカワよりは若いかもしれないけど」

「た、助かった……」

首をもたげたが、腹筋が足らず、師直は、起き上がることができない。

あいかわらず、地面に横たわったまま、じたばたしている。

「池や木に掛けた縄とか、さっきからずっと、この人を、殺そうと
してませんか？」

沙翻は問いただした。

「あれ、気がついてた？」

「気がつかないわけ、ないじゃないですか」

「そんなに口コツだった？」

「わ、わしを、殺そうと……」

師直が、か細い悲鳴を上げる。

「あんだ、何か殺されるようなこと、したの」

「なにも……」

「コヤツは、悪いことのできるタマじゃないよ」

ひとじとのように一睡が言ひ。

「で、投身と首吊りは失敗、流血もダメ、そうすると、残りの選択

肢はあまりないねえ。師直殿、どうする？」

「た、助けて……」

「助けてって、言ってますよ」

「助けてとは、人聞きが悪い。コヤツが死にたいと本音で語ったからこそ、マロは、手助けしようとしているのに」

「嘘。この人、死にたくないみたいじゃありませんか」

現に今、助けを求めている。

「嘘ではない。ゆうべ、ただすのもり 糺の森で出会った時、確かにそう言った」

「ゆうべ……。糺の森……」

「そう。あんた、シタマ 生霊になって、さ迷っていたじゃないか。とても辛い恋をした。叶う望みはない。もはや、生きていたくない、と、言っただんじじゃないか」

「……」

師直は黙り込んだ。

沙鞠は、はっと思い当たった。

「すると、さきほどの、あの、白い玉……イキスタマの主は……」

「そう。橘師直、こいつだよ」

蛍邸 その11

「あんた、死にたいの？」

沙醐は、師直の襟首を？んで揺さぶった。

一睡に影響されてか、だんだん、行動が粗雑になってくる。

「し、死にたくない……」

「死にたくないって」

心外そうな顔で、一睡が割り込む。

「そんな。叶わぬ恋はどうなった。麗しの、つれない君は、どうする！」

「生きてこそそのモノダネじゃ」

「ううむ、現金な奴め」

「ちょっと、そんな軟弱なことでもどうするの！」

恋に恋する乙女、沙醐は、再び師直の襟首を？んで、がくがく揺さぶった。

乱れた烏帽子えぼしが落ちそうになる。

「一度恋したら、最後まで貫きなさいよ！ ダメモトで、トライしてみるのよ」

一睡が頷く。

「まあ、ダメだろうが」

「そんなのわからないわ。第一、相手の姫君のお気持ちは、確かめたの？」

「いいや」

沙醐は呆れた。

「付文とか、してないの？」

「しておらぬ」

「じゃ、思ってるだけ？」

「まあ、そうじゃ」

「……」

「そりゃ、こんな風に引き籠もってばかりいたら、女もよりつか
ん」

涼しい顔で、一睡が言う。

「わしも、初めからこんな風に引き籠もっていたわけではござら
ん。あれは、宮中で行われた菖蒲根合の時……」

菖蒲根合とは、菖蒲の根の、美しさや長さを競う遊びのことである。
師直は、邸の池に見事な菖蒲ができたので、藤原道長の娘、太皇
太后、藤原彰子に献上した。

根合の席上、彰子の隣に、非常に初々しい、可憐な少女をみつけ
た。

どうやら、彰子の元に出仕している女房らしい。しかし、そうし
た働く女性にしては、痛々しいほど物怖じし、儂げであった。

後で、仲の良い女房にそれとなく聞いてみると、なんとこの少女
は、花山院の御落胤おつくいんだという。

花山院はこの時既に亡くなられていたが、在位二年とはいえ、立
派に帝だった方である。

その方が、出家して院になられた後、おできになった娘が、この、
漂うらみの君だという。

「高貴な身分でありながら、女房勤めの毎日、どんなにか、お辛
いことであろうかと、その毎日が思いやられて……」

師直は、袖でそつと目をぬぐう。要するに、一目惚れしてしまったのだ。

しかし、内気な彼は、もし、拒まれたらと思うと、安易に文を届けることさえできない。

ああだ、こうだと、推敲を重ね、和歌一つ、ものにするつもりできなかった。

断られるよりは、最初から、打ち明けぬ方がよい。

最初の一手も打たずして、師直は、失意の人と成り下がり、自宅に引き籠もってしまった。

そのうち、疲れやすくなり、手足も萎えたようになってしまった。そして、外出さえもままならなくなってしまったのだ。

「……情けな……」

言いさして、沙翻は言葉を引っ込めた。

思いを伝えぬうちに、敗北感にひしがれる師直は、確かに、情けない。

しかし、一途に思いつめ、その思いの深さゆえに、生霊となってさ迷い歩いたというのは、それはそれで、思いの純粹さを表しているといえないだろうか。

ましてやその生霊は、一睡によれば、恋が実らず、死にたいほど辛いと言っただけなのだ。

思っただけの恋。

当たって砕ける型の沙翻には、いささか釈然としない部分もあるが、世の中には、そんな恋もあったいい。

「ね、こいつが死にたがっていたのは、本当でしょ？」
沙翻のご機嫌をとるように、一睡が言った。

「小刀を返して頂戴」

「ダメ」

「なぜ！ 困っているかわいそうな生霊を助けるのが、マロの勤めなんだ。マロは、生霊ハンターなんだから」

「生霊ハンター？ 唐言葉からですか？」

「まあ、そのようなものだ。生霊はね、自分ではどうすることもできない辛い思いに惑って、生でもない死でもない、中有の闇にさ迷い出す。放っておくと、自分の身を滅ぼし、相手の身をも滅ぼしてしまう。だから、死にたいという奴は死なせてやるし、そうでない奴も、その望みを叶えてやって、二度と、魂が中有にさ迷いでないようにしてやるのが、功德というものなんだ」

沙醐は少し、感心した。人の為に何かしてあげるのは、よいことだ。

死にたい人の足を引っ張るのは、感心しないけど。

「あ、でも……。さっき、生き須玉を取り返すとか言ってませんでした？ 生き須玉は、ご自分のものだからって。ここの邸の生垣を壊した時」

「あれは、その……」

一睡が口を濁す。

「まあ、いいじゃないか。とにかく、マロは、生霊ハンターなんだから。任務は、遂行しないと」

それが、一睡の、趣味と実益を兼ねた「任務」であることは、容易に想像できた。

「でも、この人は、翻意しましたよ。もう、死にたくないそうです」

沙翻が言うと、師直は、がくがくと頷く。

「本当か……」

一睡は、その顔を両手で挟んで、じっと目を覗き込んだ。

息詰まるような時間が流れた。

「この目は……本当のようだな。なんだ、人騒がせな。つまらない。沙翻、帰るぞ」

「へ？」

「もう、帰る」

一睡の体が、ふわっと、浮いた。

「あ、待って下さいよ」

「心配しないで。お前の真上を飛んでやるから」

「私も一緒に飛びとうございます。もう、疲れてしまいました。私の体を引き上げて下さいませ」

「マロに、そんな力はない！ ずうずうしい奴だな。……ああ、そうだ。クビの件は、ナシ」

「ありがとうございます」

それだけは、嬉しかった。少なくとも、これで、宿無しの宿命は避けることができたわけだ。

腑抜けたようにへたりこんでいる師直をその場に残し、一睡を真上に頂いて、沙翻は、京の町を疾走した。

蛸邸 その11（後書き）

今回は、実在の人物が二人、ちらつと名前だけ出ています。

太皇太后彰子は、藤原道長の娘。中宮だった頃、夫の一条天皇を巡って、道隆（道長の兄）の娘、定子（つまり彰子とは従姉妹同士です）と、熾烈な後宮争いをしたことで有名です。

彰子に仕えたのが紫式部、定子に仕えたのが清少納言です。広報担当の、この優秀な二人は、各々の女主人の魅力をあまねく宣伝する為に、「源氏物語」「枕草子」を書いたとも言われています。

道隆の早死にや、兄弟の不始末（これに、花山天皇の出家がからんでいるのです。「大鏡」には、かの有名な阿倍晴明も、声だけ登場します）、さらに定子自身の死により、勝利は、彰子のものになります。

物語では、すでに一条天皇の御世は終わっているのです、太皇太后、となっっています。

もう一人の、花山天皇（院）については、またのちほど。

第一章が終了します。

ここまでお読みいただいて、ありがとうございます。引き続き、よしなに「ひいき」下さいます。

虫愛する姫

その1

二、虫愛する姫

蛭邸に仕えて、沙醐がまっさきにしたことは、カワ姫に謝ることだった。

なんといつても、大事な虫たちを逃がしてしまったのだから。

「もう、よい」

カワ姫は、扇を顔の前で打ち振りながら、けしけしと笑った。

「確かに、皆の言うことには、正しい面もあるな。幼虫が、ちょっと、増えすぎた。それに、長くは生きられないものだもの、おとなになった虫は、外の世界へ出してやらなければかわいそうじゃ」

「しかし、お部屋を滅茶苦茶にしまって」

「それは気にせんでいい」

カワ姫は、大鷹に頷いた。

「それより、見よ」

別の扇の先を、沙醐の前に突き出す。

何やら大切そうなので、沙醐は身を乗り出して覗き込んだ。

「前みたいな目に遭いたくなければ、触れない方が良くと思っぞ」

カワ姫が、何心なさそうに、つぶやいた。

差し出された繭型のそれには、そよそよと白い毛がそよいでいる。今しも、その一部が裂けて、中から畳まれた羽のようなものが出る。うとしている。

悲鳴をあげそうになった。

なんと、扇の先には、瞬りかけた繭が取り付いていて、中から、今にも、羽の生えた虫が出てこようとしていたのだ。

「ひ、姫さま、こ、これは」

「茶毒蛾じゃな」

「ガ、で、ございますか」

せめて蝶であって欲しかった。

「人の肌をかぶれさせる。これは、沙醐の方が詳しいな。沙醐は幼虫にやられたが、繭であっても、成虫になっても、一生を通じて、アンタツチャブルな虫じゃな。しかし、なんともかわいらしい」

かわいらしいとは、実際に、毛虫の被害に遭った身としては、認めかねる言い草ではないか。

なんでそのようなものを、室内で飼っているのか。細かい毛が飛んできたら、どうするつもりか。

思いつく限りをまくしたてようと思ったその時、姫が、唇に指を当てた。

「しっ」

繭から出た、湿ったように皺くちゃに丸まっていた羽が、ふるふると震えた。

新しい体に慣れぬせいか、虫は、時折羽を動かす。正常に動くか、試しているようにも見えた。

透明に近い白の体に、少しずつ、色味が表れてくる。

思わず見惚れてしまうような、神秘があった。

とうとう、畳まれていた羽が、大きく広げられた。何か、大仕事を見届けたような気がして、沙醐と姫は、顔を見合わせた。

気がつくのと、姫と沙醐は、随分長い間、顔を寄せ合って、一つの扇の上を眺めていた。

「こ、これは、失礼をば致しました」

あまりに、顔が接近しているのに気づいて、沙醐は飛びのいた。

相手は、貴族の女性である。同じ女性であつても、こんなにも顔を近づけるのは、無礼と思われた。

「どつじや、かわいいじゃろう」

姫は、上機嫌で、沙醐を見た。

ああ、この方は、なんて優しい目をしていらつしやる。

ふさふさした、およそ考えられない眉の下の、黒目がちのぎよろりとした目は、情味を湛え、ほんわりした優しい光を宿していた。

「ええ、かわいらしく、うざいます」

沙醐は言った。

「人は、どうして、蝶はかわいがるのに、蛾はいやがるのかの。

蚕などは、幼虫のうちは、桑の葉を食べさせるなどして、一生懸命世話をして、成虫になると、のけものにしてしまう」

「繭を煮て、絹糸を取るのでしたね」

いつぞや、父から聞いたことがある。

「そうじゃ、そなた、よく、知っておるな。煮殺してしまうのじゃ。そうして得た絹で、女は、身を飾り、親から授かった眉を抜いて、化粧をする」

沙醐は絶句した。美しい衣の大元が、蚕の大量殺戮とは、今まで、考えたことがなかった。

「人が、身をつくるおうとするのは、不自然じゃと、妾は考えておる」

カワ姫が、ぽつりと付け加えた。

沙醐は、改めて、カワ姫の顔を見た。なんだか、姫の言うことが、道理に叶っているように思われたのである。

「しかし、周囲の評判というものもございましょう」

「人の噂が、ナンボのもんじゃ」

吐き捨てるように、姫が言い放った。

「妾は妾じゃ。それだけで、充分」

姫は、ぎろりと沙醐を見回した。

「どうじゃ、そなたも、化粧をやめてみては」

「いや、それは……」

決して濃くはないが、沙醐は百合根に倣って、薄くおしろいを施し、眉毛も抜いている。唇にはほんのりと紅を差し、髪をきちんと梳いている。

沙醐は、自分のことを、決して、美しい女だとは思っていない。

むしろ、個性の強すぎる、あまり美しくない女だと認識している。
その分、傍から見て、せめて見苦しくないようにと、心がけて
いるのだ。

「よく、化粧をせぬと、女を捨てたも同然とか言う輩があるが、感
心せぬな。真の女らしさとは、内側から輝く性質のことだと思っ
てる。飾り立てても、夜には剥げるわ。ま、妾は、女らしくなくて
も、ちっとも困りはせぬが」

それは、困らないだろう。

「そなたも、身を飾らぬ方が、そなたらしくて、よいぞよ」
「私は、あまり、私のことが好きではございません」

カワ姫は、不思議そうな顔をした。

「虫は、な。人の内臓に巣くって、人を操ることができるのじゃ。
化粧などより、ずっと深い……」

カワ姫が続きを言いかけた時、

「姫、姫！」

几帳きせうの向むかいで呼ぶ声こゑがした。

「なんじゃ」

姫は立ち上がって、階たかのてっぺんの、廂ふすまの間まで出て行った。

「あ、うらー」

階段の一番下の段の所に、薄汚れた子どもたちの一群を見て、沙翮は叫んだ。

「ダメじゃないの、こんな所まで入り込んだら」

子どもたちは、揃って不満そうな顔をした。

この子たちは、近在の子どもらだが、いくら言っても、貴族の姫らの居所であるこの寝殿に、平気で出入りする。

カワ姫が、虫取りをさせるからだ。

「いいんじゃない、いいんじゃない。で、メメ、今日の収穫は？」

カワ姫は、リーダー格の少年に尋ねた。

メメという名は、ミミズから来ている。ミミズ、メメズ、メメ、という風に進化したらしい。カワ姫がつけたあだ名である。メメだけではなく、ここにいる少年たち全てが、虫にちなんだあだ名を持っていた。

カワ姫は、階を、どすどす降りて行った。

「はよ見せてたも」

「これ」

差し出された扇の上に、メメが、籠の中身を空ける。

「げっ」

沙翮は引いた。今度は、青虫である。ただし、大人の親指二本分ほどの太さがある。

「ふうむ、大きいことは大きいがのう。普通の青虫ではないか」

あろうことか、人差し指の爪の先で、青虫をちょんちょんと突付きながら、カワ姫が断じた。

「ちえ、だから姫さまは、ダメなんだ。ひっくり返してごらんよ」
イナゴマロと名付けられた比較的年嵩の少年が口を尖らす。

「こら！ 姫に向かって何ですか、その物言いは！」

沙醐は気色ばんだが、カワ姫は、頓着しない。懐から、箸を取り出し、青虫をつまんで、ひょい、とひっくり返した。

「素手で？ んだら、虫が弱るからの」

言い訳のように、つぶやく。

「腹のところ。足があるとして、その付け根辺りを、見てご覧よ」
子どもらを代表して、メメが言った。

青虫に足はない。無いものの辺りを見よとは、変な指示である。
しかし、子どもらと姫との間には相通ずるものがあるらしく、いささか近眼気味の姫は、巨大青虫の上に、覆いかぶさるように顔を近づけた。

「姫さま、カブレる……」

いくら、なりを構わないと言ったって、妙齢の姫君である。顔がかぶれたら、目も当てられないではないか。

沙醐は気が気ではない。

「大丈夫だよ、この虫は」

メメが、訳知り顔で言った。この少年は、沙翻が茶毒蛾でかぶれたことを知っている。沙翻は、メメを睨みつけた。

「おお！」

カワ姫が、奇声を張り上げた。

「銀じゃ。銀色に輝いておる！」

「え？」

姫があまりに夢中になるので、思わず、沙翻も覗き込んだ。

「ほれ、ここじゃ、ここを見よ。一列に、ほら」

「あ、ほんとだ！」

青虫の、横腹辺り、確かに、ムカデごときでは足が生えていそうな所に、点々と、銀色の点が規則正しく飛んでいる。黄緑の腹に、いやにメタリックな色合いの点である。

「なんだか、天然の色ではございませぬようですね」

思わず、沙翻は感想を述べた。

「そち、良いことを言う」

虫の腹から目を離さず、カワ姫が言った。

「なんじゃ、この点々は。まるで自然界のものではないような……」
後は口の中で何やらつぶやいている。

「ほら、凄いだろ！」

得意げにメメが割り込んだ。

「おらが見つけたんだ！」

「最初はおらだ！」

「山椒の葉の裏にいるって、おらが言った！」
子どもらが口々にどよめく。

「うるさいー！」

メメが一括した。

「ふうむ」

カワ姫がうなる。

「凄いぞ。収穫じゃ！」

「で、……」

子ども達全員に、期待の色が走った。

「うむ」

姫は頷くと、奥に消え、すぐに小さな包みを持って現れた。

「これでよかったのかな？ 白檀じゃ」

無造作に、メメに与えようとする。

「姫さま、そのように高価なものを……」

思わず口を挟んだ沙彌を、カワ姫は制した。

「いいんじゃない、いいんじゃない。メメ、よくやった」

「うん！」

メメは素早く包みを、薄汚れた着物の懐に押し込んだ。

子どもらは、騒がなかった。

分配については後で、ということまで話がついていると思われる。

カワ姫は、青虫に目をやったまま、階段を上ろうとする。あまりにあぶなっかしいので、沙醐が手を貸した。

「姫さま、一緒に虫取りに行く約束は？」

背後から、メメが呼びかけた。

「ああ、うん」

姫は、手元の青虫に夢中である。

「これから行くんでしょ？」

「今日は、行かん」

「え？」

もう、青虫以外、眼中にない。自分の足元さえ見ていない。

「今日は、この虫を見て過ぐす」

「珍しい虫がたくさんいる、ヒミツのハナゾノへ連れて行ってやるって、約束したじゃないか」

「そうだった。でも……」

「この虫も、そこで捕まえたんだ」

「え！ それは……。しかし……。そうじゃ、沙醐が行く！」

「は？」

姫の裳裾を払っていた沙醐は、いきなりふられて、思わずよろめいた。

悪い予感がする。

「妾の代わりに、虫取りには沙翻が行く。妾は一日、この青虫を観察していないといけないからな。沙翻、頼んだぞ」

「はあ」

「さ、ほら、妾のことはもういい。珍しい虫をたくさん捕まえてきておくれ。期待しておるぞ」

ああ、あ……。

童の頃ならいざ知らず、この年になって、虫取り……。

沙翻は目の前が暗くなる思いだった。

なぜこの季節に、満開の梅の花？

子どもらに案内されたのは、赤や白、薄桃色の花を重たくつけた、梅園だった。

「本当は、教えたくなかったんだ。でも、あの姫さまは、いい人だから」

言いながらも、メメは不満げだった。沙翻ではなく、カワ姫を連れてきたかったのだ。

それは、沙翻も同じだったのだが。

「ひとつ、約束しておくね。静かに、静かに虫取りをしておくね」

子どもらはそれだけ言うと、足手まといとばかりに、沙翻を一人残して、梅園のどこかに散り散りに走り去ってしまった。

静まり返ったその先は、幾重にも重なった梅の花に覆われて、見

通すことができない。

枝は、花の重みでゆらゆら揺れて、視界を遮る。

紅、白。桃色。

あるいは、混色。

匂いが、まるでしないわけではない。意識下に、そっと忍び込むように、梅の香りは忍び込んでくる。

まるで叶わぬ恋の始まりのように。

満開の梅の花にたった一人囲まれて、沙汰は眩暈がした。

ぶーん。

耳元で羽音がする。

ばし！

反射的に叩き潰す。蚊だ。終わりが近いとはいえ、今は、まだ、夏なのだ。

そうだ、虫取りだった。カワ姫の虫集めだ。

気を取り直して、梅の葉の裏をのぞいてみる。細かな赤い点がびっしりついていた。

なんだろうと良く見ると、点々ひとつひとつが、小さな虫だった。げ。

慌てて手を離す。

カワ姫の好みの虫ではなかったと、心の中で言い訳をする。姫は、毛虫青虫系が、お好みだ。

別の葉を裏返すと、例の茶毒蛾の幼虫が、二、三匹、固まってにらみ返してきた。

こいつらもおよびじゃない。なにせ、邸には、ありとあらゆる成長過程の茶毒蛾が、うようよいるんだから。

梅は、虫のつきやすい木である。
まして、夏に花を咲かせたりしたら……。

なんて気のきかない梅たちであろうと、沙醐は忌々しく思った。
遠くで、子どもらの歓声が聞こえた。

あいつら、人に静かにしろと命令しておいて、自分らが騒いでい
る。

全く、子どもというのは、度し難い。人間も、蝶も蛾も。

子どもの声とは違う、しわがれた怒鳴り声が聞こえた。

わーっ、と、子どもらのはやし立てる声。

ぱたぱたという走り回る音。

「ちょっと、どうしたの？」

沙醐は、目の前に走ってきた子どももの襟首を捕まえて聞いた。オケ
ラというあだ名の、一番小さな子だ。

「放せ！ 放せ！」

オケラは、手足をばたつかせて暴れる。

「イタツ！ 蹴らないでよ。何がどうなったってどういうの？」

「ウメババだよ。ウメババが襲ってきたんだ！」

ウメババ？ 梅、ババ？

沙醐の頭が情報を処理している隙に、オケラは身を振り切って、
あっという間に走り去っていった。

ゆさゆさと、紅梅の大枝が揺れた。

「こらあー！ いい年をして、お前も仲間かあー！」

満開の梅の花の向こうから、鬼婆が現れた。

まさしくそうとしか言いようのない、それは、登場の仕方であった。

「いい年ではありません！」

反射的に、沙醐は言い返していた。

こんな婆さんに、なぜ、年のことを言われなければならないのか。

「ふん、口答えを」

婆は、鼻で笑った。

「女は、十五を過ぎたら年増、十八を過ぎたら大年増、二十を過ぎたらネコマタ以外の何者でもない！」
仁王立ちになって断言する。

いい年をして、紅梅襲の女房装束をしている。黒くあるべき髪が、白く細り、長さも肩の辺りでザンバラになっているのが、いっそのこと不気味である。

人のことを年増のバケモノ扱いをする、この婆は何歳であろう。六十、七十、いや、八十歳は軽く過ぎていようであった。そもそも、生きているのが不思議なくらい、年老いている。

「ここが、梅屋敷の梅園と知っての狼藉か？」

「梅屋敷？」

「そうじゃ。お前、あの子どもらの仲間じゃないのか？」

「仲間、というか、一緒に来た、というか、いやいや、単に連れられて来ただけ、と言うべきか……」

正面切って仲間と認めるのは、抵抗があった。

老婆は顔をしかめた。

「何を言っているのか、さっぱりわからん。あいつらは、この頃しよっちゅう来ては、梅の枝を折ったりするけしからん奴らだが、はて、お前は、見かけない顔だね。どこの邸の者だ？」

「あの、蛭邸から来ました……」

形成不利と見て、途端に沙醐は従順になった。他人の敷地内に無断で入り込んだとあっては、おとなしくならざるをえない。

それにしても、あの子どもたち……。とんだところへ連れて来てくれたものだ。

蛭邸と聞いた途端、老婆の顔に、薄笑いのようなゆるんだ表情が浮かんだ。

「すると、新しく入った女房かえ？ カワ・迦具夜・一睡のお世話係として」

どうやら、沙醐のことを知っているらしい。

迦具夜姫や一睡はもちろん、按察使の姫君をカワ（毛虫）というからには、この老婆は、蛭邸の内情にほぼ通じているとみてよろう。

「はい……」

主人を知った人ならば、どのような災難が後日身に降りかからぬともかぎらない。沙醐は素直に応じた。

「「こちらに来るがよい」

老婆は、沙朶を従えて歩き始めた。

老婆は、腰が九十度に折れ曲がっているくせに、さっさと歩く。ついていくには、小走りで走らなければならぬほどの速度だ。そのあまりに達者な歩みに、半世紀以上は年若い筈の、沙翻の方が息切れがした。

「だらしがないのう」
老婆は鼻でせせら笑った。

梅林が途切れると、その向こうに、古い、こぢんまりとした屋敷が建っていた。

「ほれ、上がるがよい」
なんだか魔女に魔窟へ案内されたような気がしないでもないが、沙翻は、礼を言つて中に入った。

梅園を見渡せる庇の間に、案内された。

「蛭邸にお世話になっております、沙翻と申します」
改めて、深々と頭を下げた。

「わしは、梅じゃ。当家の留守宅を預かっておる、メイドじゃ」
沙翻の平伏した頭のでっぺんを満足そうに見下ろしながら、老婆は言った。

メイド？ 冥途？

「で、皆、変わりはないか？」
「はい、皆様、たいそうお元気で」

蛭邸の主人たちに精気を奪われて元気を失いかねないのは、こつちの方である。

「百合根は、生きておるか？」

「おかげさまで」

なんだか変な会話だなと思いつつも、沙醐は返事をする。

「あの女も、自分の見た物に正直になれば、もう少し楽になれるものを。しかし、生霊や部屋いっばいにはびこる虫や、空中浮遊を見れば、普通の神経の女なら、狂ってしまうかもしれないね」
すると沙醐は、普通の神経の女ではないのか。

いやいや、最初は随分驚いた。しかし、あまりに異常なことが続くので、神経の方で、驚くのをやめてしまったのだ。
いちいち驚いていたら、身がもたぬ。

「ときに、そなたは、和歌はさっぱりダメじゃが、漢文の素養があると聞いたが？」

不意に、妙な気配を漂わせて、梅が尋ねた。

この年でなければ、色気と間違いかねない、危うい気配である。

「素養と申しますか……」

母亡き家庭では、普通の女子の教育は困難だが、せめて自分にできることは、と、父が教えてくれた知識が、漢文だった。

それと、武術。

しかし、漢文に関しては、沙醐は良い生徒ではなかった。

武術と違って、じっと座っている漢文の講義が始まると、ころり

と眠ってしまったのだ。

「ええい、漢文が、読めるのか、読めぬのか」

「か、簡単なものの、意味を取るくらいでしたら、きつと、なんとか……」

沙翻は言いよんだ。

はつきりと、わからない、と表明するのは、教えてくれた父が気の毒すぎる。

「読める、というのだな。そうかそうか」

梅は、そそくさと立ち上がった。まさか、さつそく漢籍を持ち込んでくるのではあるまいかと身構えていると、盆の上に、小さな碗を乗せて戻ってきた。

「まずは、くつろがれい」

差し出された碗を恐縮して受け取る。

漆塗りの黒い碗には、透明な液体が入っていた。

「ささ、遠慮のう」

言われて口に近づけると、えも言われぬ芳香が鼻先に漂う。高貴な、それでいて瑞々しい若さを充分に含んだ、ふくよかな香りである。

「これは……」

幽かに甘く、柔らかな香気に満ちた液体が、馥郁と口の中に満ちる。

途中で止めることなどできず、一気に飲み干してしまいそうな、そんな飲み物だ。

「梅の乳じゃ」

危うく嘔き出すところだった。沙醐は、激しく咳き込んだ。

「誰の……誰の、お乳ですって？」

苦しい息の下から、やっとのことで質問を搾り出す。もうすでに、大部分を飲み込んでしまったのだから、是非、聞いておかねばならなかった。

「ああ、汚いのう」

梅は、人のことは到底言えないような汚れた雑巾で、あちこちを拭きながら、文句を言った。

「お乳ではない、そういう意味ならば。これは、梅の露じゃよ」
「梅の露？」

「そう。青梅の頃に摘み取ってな、甘い氷と一緒にしておく、露が出てくる。それじゃ」

それならそうと言ってくれればいいじゃないか。

梅の乳などと言うから、てっきり、梅婆さんの垂れた皺だらけの乳から染み出た何かだと思ったじゃないか。

再び変な想像をして、沙醐は、胸を叩き、やっとのことで、平静を取り戻した。

「そそっかしい女じゃのう。がつがつせんと、もっとゆっくり、

飲まれよ」

幸い、沙翻の頭の中まではわからない梅は、優越感に満ちた様子で、そう忠告した。

「実はな、当家のご主人さまは、大変、学識の高い方ゆえ、漢文で便りを寄越すのじゃ。これが、なかなか意味がわかりかねてのう…」

…」
そこで、沙翻に読んでくれというのか。

それにしても、ご主人さまといった、その声音が、妙に高く、心なしかそれを口にした時、年老いた体が、微妙にくねったような気がした。

「こちらのご主人さまというのは？」

それほどの学識者であるというのなら、音に聞こえた貴族であるはずである。

蛍邸との繋がりなども、是非、聞いてみたかった。

「口に出すのも、はばかられるお方じゃよ」

梅は、うつとりとした目をして言った。

「蛍邸とは、ゆかりの方なのでいらっしやいますか？」

「もとは、全然無関係だったのじゃがな。身罷りみまかし後、縁ができたのじゃ。迦具夜とは一緒に入京なされ、もちろん、あちも、同行させて下さった。あのお方は、あちのことを、とてもとても大事にして下さっていたからのう。一時たりとも離れて暮らしたくはなかったのじゃ。カワは、もうずっと前から都で待っておった。一睡は、

殆ど青草人なのじゃが……」

「身罷りし後」を「身籠りし後」と聞き間違え、じゃ、この主人は女か、と思っていた沙翻だが、後半は、殆ど聞いていなかった。

空がにわかには掻き曇り、怪しい光が、鈍色の雲をかぎ裂いたからである。

「キヤア！」

沙翻は耳を抑えてつつぷした。

「ああ、ご主人さま！」

梅の干からびた声が、殆ど喜悦の声と聞こえたのは、聞き違い？

その時、ドーン、と、ものすごい音がして、閉じた目の裏でさえ赤く燃えるほどの炎が上がった。

「か、カミナリ！」

こんなに大きな音と光は、初めてである。きつとすぐ近く……もしかしたらこの邸……に落ちたのに違いない。

恐怖のあまり、息も絶え絶えになりながら、沙翻は覚悟した。

こうしていないで、逃げなければ。

顔を上げた沙翻は、今度は本当に、腰が抜けた。

庭には、巨大な火柱が立ち、その根元に、青い肌、盛り上がった筋肉、そして、大きな角と牙……青鬼が立っていたからである。

「ひっ！」

もはや、声も出ない。

「ご主人さま……」

沙翻の脇の辺りをかいくぐって、何かが庭にまろび出た。子犬のように、一直線に、青鬼めがけて走っていく。梅だ。

「危ない！」

誓って言うが、体が自由に動くのなら、絶対、止めた。

しかし、沙翻の体は、金縛りにあつたように、ぴくとも動かない。

「ご主人さま、おかえりなさいませー！ 梅屋敷にお帰り下さいまして、ありがとうございます！」

老婆の声とはとても思えぬ、華やいだ鼻声を上げて、青鬼の手から、棍棒などを受け取っている。

「お先にお食事になさいますかあ？ それとも、お風呂になさいますかあ？」

見ると、梅の白かった髪の毛が、雷電に染まり、金色に輝いている。肌も張りつやを取り戻し、老婆には変わりはないけれど、生き生きと若々しく見える。

何なんだ。

何が起きたというのだ。

沙翻は激しく混乱した。

「食事も風呂も後でいい。梅、化粧が崩れておるぞ。先に風呂に

入って、着替えておくといい。あとで、参ろう」
「またあ」

梅は、不気味に身をくねらせた。

「エツチなんだからあ」

これが、どう見ても、八十歳を過ぎた老婆である。

沙醐は、貧血を起こして、倒れそうな気がした。

身をくねくねさせながら、梅が邸の奥に消えると、青鬼は、庇の間に上がり、胡坐をかいた。

「沙醐だな」

梅の嬌態にすっかり毒気を抜かれ、ついでに恐怖心と、最低限度の防御心さえ失い、沙醐は、呆然として頷いた。

「蛭邸での勤め、ご苦労だな」

思いもかけず、優しい言葉が、青鬼の口から滑り出た。

「わしは、蛭邸の奴らとは、じつこの間柄じゃが、みな、癖のある奴らばかりだからな。仕えるのは、並大抵のことではあるまい。だが、そなたは頑張っておる。期待しているぞ」

青鬼は、なおも、優しい言葉をかける。沙醐は、思わず心を許しそ
うになった。

「あやつらも、悪い奴らではないのだがの、ただ、人の情けというものが、すこうし……。あ、いや、悪口を言っているわけではないぞ」

「あの……もしかして……。あなたさまが、当家の、ご主人？」
沙醐は、恐る恐る尋ねた。

「おう、菅原道真、本官右大臣、正二位、とはわしのことじゃ。しかし、これらは、怨霊と化してから得た位じゃが、の……」
最後は、いくらか淋しそうに、青鬼は、言った。

菅公、菅原道真。

漢詩に通じ、代々文章博士もんじょうはかせに任じられるほど、博学多才の人。時の宇多天皇に重く用いられ、右大臣、従二位にまで上り詰める。が、次の醍醐天皇の御代に、讒言ざんげんされ、九州大宰府に左遷される。ついに都へ返り咲くことなく、その地で逝去。

って、つまり、菅原道真は、既に死んでいるのだ。それも、百年も前に。

しかも、菅公死後の騒ぎは、今なお、都の人々の記憶に、恐怖とともに焼きついて離れない。

記録的な凶作、疫病の流行、皇太子や皇太孫の、早すぎる死。

さらに、あの、清涼殿への落雷。

……多くの貴人たちが死んだ。

そして、醍醐天皇の讓位、そして崩御。

「お、お、怨霊……」

沙汰の声が震えたのも、無理からぬことである。

「おお、崇つてやったぞ。わしを陥れた奴らや、無関心を装っていたやつらを。あれは、小気味がよかつたのう」

菅公の怨霊は、思い出し笑いでもするように、楽しそうに笑った。

「しかし、あの、藤の木の、凶太い根元を断ち切れなかつたのは、残念であった。まあ、今後の楽しみとしよう。わしは、常に前向きに物事を考える夕子なんだな」

そう言つて、また、からからと笑つた。

「あの、梅は、の。わしが、大宰府へ左遷された時、わしを慕つて、京から飛んできたウい奴じやが、怨霊となつて京へ舞い戻る時に、また、くつついてきたのじゃ」

その時、混乱した沙翻の頭の中に、一条の思いがさつと過ぎつた。

「怨霊のあなた様とごじつこんといふことは、蛭邸の皆さまも、怨霊なので？」

生霊を追つて、空を飛ぶ一睡。迦具夜も空を飛ぶ。虫を愛する変な姫。

怨霊と考えれば、全て、辻褄が合う。

「うーむ」

道真の怨霊は、しばし、考え込んだ。

「まあ、世間一般の、フツの人間から見れば、怨霊とあまり変わらぬかもしれぬ。しかし、奴らは死んだことがないからのう。まあ、わしなら、本人達の前で、又シらは怨霊でござろう、などとは言わぬぞよ」

沙翻だつて、本人達を前にして、そんなことは、怖くて言えない。

「ところで、沙翻、」

菅公は、改まった物腰で、膝を乗り出した。

「この頃わしは、羅城門を定宿としておる。ここには、本来ならあまり帰つてきたくはなかつたのだが……」

そう言いつつ、邸の奥を気にする素振りをする。

「なにせ、あの梅婆さんがうるさくてかなわぬ。わしは、マニアではござらぬ。本当は、若い娘の方が好みなのじゃ。若ければ若いほどよい。しかし、生きていた頃からの腐れ縁だから、仕方がない」梅が聞いたら憤死しそうなことを、さらりと言つてのけた。

ウい奴じゃ、なかつたのか。

「そのわしが、わざわざ参つたのは、ほれ、これの為じゃ」

虎編の腰巻の辺りを、ごそごそさぐっている。怨霊とはいえ、沙醐は思わず目をそらせた。

「何を勘違いしておる。お前は、わしの好みにしては、トウが立ち過ぎておるわ。……鬼の衣裳というのは、腰巻しかないのだから、しようがないではないか。ここしか、隠し所がなかつたのじゃから。ほれ、見よ」

「……！」

言われたとおり目を上げて、沙醐は驚いた。

あのトラトラの腰巻の、どこかから出てきたのだと思うと、限りなく不気味であったが、そんな思いを吹き飛ばすような、儂げな少女が、鬼の足元に、はべっていた。

だれか貴人のお付きの少女でもあるのだろうか、身なりは高級なものをきちんと着込んでいたが、うつむき、小さくうち震えていた。

美しいことは美しいのだが、一度目をそらせたら、再びその表情を思い描くのは難しいのではと思えるほど、印象の薄い目鼻立ちである。

とにかく、生命力に乏しい、全体として、白っぽい少女であった。

それが、淋しげに、身を投げ出すようにして、そこにいた。

「この方は……」

「お前、自分で話すか？」

菅公は、促すように、少女の背中を太い指先でつつく。

少女は、いやいやをするように、首を横に振った。

長い髪が、こぼれるように、その横顔を覆う。

沙翻は思わず、抱き寄せるようにして、そっと引き寄せた。

「大皇太后のもとに出仕している女だ」

太い声で、菅公が言う。

「ゆうべ、わしが、糺の森の沢で涼んでいたら、飛んでおつたのじや」

「飛んでおつたって？　じゃあ、この方も、生霊！」

頭がすっかり蛭邸モードになっている沙翻には、迷わず叫んでいた。

「でも、人の形をしているわ！」

一睡の捕らえた師直せいちの生霊は、白い球形だった。

しかし、ここにいるのは、生気に乏しいとはいえ、紛れもなく、少女の姿形をしている。

「それは、生霊の思いの深さによる。あと、捕らえた者の技量にもな。拙い者が捕らえようとすれば、魂の一部を掠め取るばかりで、筒や珠の形に過ぎぬ。しかし、わしのように、上位の者が捕らえれば、このように、人型を留める」

虫取り網を振り回して、生霊ハンターをきどる一睡は、所詮、「拙い者」に過ぎぬのである。

沙鞠はしげしげ、引き寄せた少女を眺めた。少女の生霊は、恥ずかしげに目を伏せた。

「あなたも何か、辛いことがあるのね？」

……生霊は、自分ではどうすることもできない辛い思いに惑って、生でもない死でもない、宙有の闇にさ迷い出す……。
一睡はそう言っていた。

「私は、誰からも愛されない定めにごさいます」
細い声が、腕の中から聞こえた。

「私は、親さまから、捨てられました……」
それだけ言うと、少女の姿はいつそう白く、透明に近いまでに白くにじんていった。

「親というのは、今は亡き花山院のことじゃ」

「すると、この方が、漂の君！」

先帝の子でありながら、女御に仕える身となった皇女。

まさしく、師直の思い人、漂の君ではないか。

「誰からも愛されないなんて、そんなこと……」

沙鞠が言いかけたその時、ぱたんと激しい音がして、几帳が倒れた。倒れた調度の向こうに、鬼のような憤怒の表情を浮かべた梅が立っていた。

「何の為の人払いか！ いつになく優しいと思ったら、女を連れ込んで！ それも、こんなに若い、若い……」

ぎりぎり歯軋りをする音。

「うわ、まずい、沙醐、とりあえず、漂の君を連れて逃げるんだ」
「逃げるって。え？」

逃げるような悪いことはしていない。

「梅、落ち着け。お前はわしの、最後の宿りではないか」

「ええい、うるさい！ たまさか帰ってきたかと思えば、このざまかい！ 許さぬ。ゆるさぬぞー」

「待て。けしからぬ話ではない。話せばわかる……」

「何度その手をくらったことか！ この度は、だまされまいぞー」

「沙醐、逃げ。急いで逃げろ」

青鬼菅公に背中を押されるようにして、沙醐は、漂の君の手を握ったまま、外へ押し出された。

何が何だかわからぬままに、少女の手を引いて夢中で走る沙醐の目の端に、鬼婆と化した梅が、青鬼に飛び掛るのが見えた。

虫愛する姫

その3（後書き）

藤原道真公といたら、吉備真備と並び、文人として右大臣まで上り詰めた、本の虫、憧れの方でございます。

そのようなお方を、九州大宰府の「飛び梅」の木とともに、このよ
うな役回りにしてしまいましたことは、一重に、愛すればこそ、と
いうことで、ご寛恕頂きたいと存じます。

……今、パソコンの画面が、ふっと消えたけど、本当に尊敬してる
んです！ この思いに免じて、どうか祟らないで下さい……。

「それで、連れて来ちゃったの？」

しきりに爪を気にしながら、迦具夜が言う。

「はあ、もう、何やなにやら、大混乱で」

「そもそも、なぜまた、梅屋敷になぞ行ったかのう」

カワ姫がしたり顔で言った。

「なぜまた、って、私は、姫様のご命令で、あの人外魔境へと連れて行かれたんですよ」

「妾は、梅屋敷へ行けとは、一言も言っではおらぬが」

「メメヤオケラたちと一緒に虫取りに行けって言ったじゃないですか。忘れちゃったんですか？」

「虫取り！」

カワ姫は、はたと膝を打った。

「そうじゃ、虫取りじゃ。で、収穫はあったか？」

「あるわけないじゃありませんかっ！」

「まさか、手ぶらで帰ってきたというのか？」

「収穫は、この生霊だよ」

躍り上がらんばかりにして、一睡が言う。

さつきから、しきりと漂の君の生霊の周りを飛び跳ね、うつむいたままのその顔を、しげしげと覗き込んだり、髪の毛の匂いをかいだりしている。

「近年にない収獲じゃないか。沙醐、でかした」

「それは、あなたのウデがないせいよ。前から思ってたんだけど、むしりとられた生霊の一部というのは、ほんとに、気の毒なものね」
迦具夜姫は、何が気になるのか、右手の人差し指の甘皮の辺りをしきりに搔いている。

「うるさい。網の柄が短いせいだ。いつも、ほんの少しのところ、本体に逃げられるんだ」

「いいか、沙醐、今後、虫取りに行つて、収獲なくして帰るのは、まかりならぬ……」
これは、カワ姫。

「虫取りにはもう、行きません！」
沙醐は、思わず声を荒げた。

「それより、この姫さまです！」

「そうよ。どうするつもり？」

「この方は、悩んでおいでです。誰からも愛されることがないと。親御様からも打ち捨てられてしまったと……」

思わず、声が詰まった。

「もし、男が欲しいなら、私にへばりついてくるのを、適当にみつくろつてあげる。いくつ欲しい？」
迦具夜姫が、爪から目を離れた。嬉しそうな顔をして、瞳がきらきらしている。

迦具夜姫は確かに美しいのだが、清純な内気さを漂わせる漂の君

と並ぶと、非常に邪悪な美しさであることは否めない。

「みつくるってって、大根じゃないんですから。この姫さまには、幸せになってもらいたいんですよ……」

恐怖の梅屋敷からの逃避行の間中、漂の君は、一言も発しなかった。途中沙醐が気遣って声を掛けても、怯えたように頷いたり、首を横に振ったりするだけ。

しかし、沙醐が転んだ時は、心配そうにそばにしゃがみこみ、泣きそうな顔で、助け起こそうとしてくれた……。

いつしか沙醐は、漂の君を、妹のように感じていた。

「私の男は、大根……」

迦具夜姫の姿が、ふっ、と消えた。

「あっ、迦具夜姫さま……!!」

「心配しないでよい。この女は、意に染まぬことがあると、すぐに姿を消す」

忌々しげに、カワ姫が言った。

「私はまだ、ここにいるわよ。悪口を言ったら、承知しないから」

「私は別に、姫さまのことを、悪く言ったわけではございませんよ。慌てて、沙醐は言った。」

「でも、私の引っ掛けてくる男のことは、よく思っていないでしょ？ 漂の君を幸せにすることもできないような、ヘタレばかりだと、思ってるんですよ」

「それは、まあ」

「ふん」

迦具夜姫の機嫌は直りそうもない。

「まさか、あの、師直とメアワセようというんじゃないだろうかね？」

信じがたいという風に、目を大きく見開いて一睡がつぶやいた。

「幸せについて……。無理と違うか？」

「でも、あの方は、お金持ちです」

手入れの行き届いた、大きな邸を思い出して、思わず、沙醐は口走っていた。

「この際、とりあえず、財産のある方に託すことです。師直さまなら、女性に暴力をふるうこともなさそうだし」

「というか、あいつは、尻に敷かれるタイプだし」
自信たっぷりに一睡が言った。

「大切なのは、漂の君を思うお気持ちです」

先に財産の持ち出ししてしまった自分を恥じながら、沙醐は慌てて付け足した。

「生霊になるほど、姫を思い続けたのですよ」

「それは単に、奴の優柔不断というか、自信のなさの表れというか……」

「いいじゃない、一度枕を交わしてさ、気に入らなかったら、二度と会ってやらなきゃ、いいんだから」

不意に、空中から、迦具夜姫の姿が現れた。その両目が、きらきらと輝いている。

「そうじゃ、漂の君は、血筋が良いのだから、師直殿から搾り取るだけ搾り取ったら、さっさと別れて、新しい奴を見つけるのがよい」

「ああら、カワと意見が合ったのは、久しぶりね。五百年ぶりくらいかしら」

「知るか。妾はな、男に頼る人生はよくないと思うておる。だが、一般女子が自立して生きるのは、難しい世の中だから、仕方がないではないか」

「なんだか、私の育ての親のようなことを言うわね」

「あの、竹取りの……？」

「そう、私が結婚しないと、死ねないって言うのよ」

「又シには、決まった殿方がおらぬのう」

「だから、まだ生きてるわ。親孝行なのよ、私って」

「永遠に死ねないとは、気の毒なことよ」

「なによ、永遠にって」

「ね、あなたのことを、一生懸命思ってくれている殿方がいらっしやるのよ」

沙醐は、恥ずかしそうに下を向いている漂の君の生霊に話しかけた。

「そのお方はね、あなたを思うあまり、魂が体から飛び出してしまっただけなのよ」

漂の君の生霊は、信じられないという風に、沙醐を見た。

そのふつくらとした唇が、何か言いたそうに、細かく震えた。

「親から好かれなくなつて、別にいいじゃない」

沙醐は小さな声で付け加えた。

それから、おもしろそうに迦具夜とカワ姫の掛け合いを見物して

いる一睡に言った。

「取り合えず、師直さまに、和歌を贈るようにな説得してみてください」

「なんでマロが」

心外というように、一睡は膨れた。恐らく、めんどつくさいのだから。

「だって、顔見知りだし」

「沙翻だって顔見知りじゃないか」

「私の身分では、そのようなことは申し出せません」

「でも、マロだって、師直の体とは、あの時が初対面だし。それに、腰が抜けた奴を放り出して来ちゃったじゃないか」

「しっ！」

沙翻は、漂の君を気にして、制した。「生霊にまでなって恋に悩む貴公子」のイメージを大切にしなければならぬ。

一睡は、不服そうに、さらに言い募った。

「それに、マロは、まだ子どもだから、色恋のことはよくわからない」

「都合のいい時にはかり、子どもぶって……」

沙翻は呆れた。

しかし一睡は、ケほども気にした様子はない。うっとり無遠慮に、漂の君を眺めている。

「それより、見てよ、なんて美しい生き須玉だろう。完璧な人型をしている。この上は、永遠に苦悩とやらを続けてもらって、マロの至高のコレクションのひとつにしたい」

「一睡さま！」

「じよ、冗談だよ、冗談。でも、そういうことなら、百合根に頼んだらいいんじゃない？ 根回し的なことなら、大の得意だから」

「百合根さま……」

なるほど、考えてもみなかった。

確かに、デリケートの男女のことなら、一睡や姫たちよりも、世慣れた百合根の方が適役かもしれない。

問題は……。

「百合根、ゆりねー！」

一睡が蛮声を張り上げ、迦具夜とカワ姫が、はっとしたようにこちらを見た。

「なんでございますかー」

間延びした声に戻ってきて、筋張った指が垂れた布を押し上げた。

「あらまあ、皆さん、お揃いで。何か楽しいご相談？」

百合根はぐるりと一同を見渡し、漂の君の上に目を止めた。

ゆっくりと息を吸った。

そして、そのまま、ひっくり返った。

虫愛ずる姫

その4（後書き）

漂の君のお父さんの、花山天皇についてです。

花山天皇は、17歳で即位します。母は、藤原伊尹（難しいので、いい、と読んだりします）、時の権力者の娘です。

伊尹が早くに亡くなり、やがて末弟の藤原兼家が権力を握ると、兼家は、自分の娘の産んだ一条天皇を位につける為、花山天皇が邪魔になります。でもまさか、殺してしまうわけにもいかないので、策略を用いて、花山天皇を剃髪・出家させてしまいます。在位わずか2年、19歳での出家です。

なかなか風狂の人であられたようで、出家したからと言って、お経を唱えてばかりいたわけでは、なかったようです。

「大丈夫？ 帰れる？」

夜になり、人の往来もなくなった頃、沙醐は庭に降り、漂の君の生霊にそつと問いかけた。

美しい生霊は、儚げに頷きながら、ゆっくりと舞い上がった。

「心細かったら、いつまでもここにいていいのだぞ！」

一睡が未練がましくその裾に手を伸ばす。

「でも、あまり長いこと魂が離れていると、体が弱ってしまつとおっしゃったじゃないですか」

「まあ、そうだけど」

「では、行かせてあげることです」

「大皇太后の御所は、女のイジワルが激しいと聞くぞ。亡くなった定子さまのところと違って」
一睡がしたり顔で言う。

後宮や貴人の住まいでの、女部屋の嫉妬については、下々の者の間でも、広く噂になっている。

身分もプライドも高い女たちを一箇所に集めて押し込んでおいたらどうなるか、簡単に想像がつく。

「あなた、イジメられているの」

既に漂の君は、一条の光の束になっていた。その光が僅かに揺らいだような気が、沙醐にはした。

光は、ゆつくりと沙醐の頭上で旋廻し、それから、思い定めたように、御所の方角めがけて、一直線に飛んでいった。

「かわいいそうに、自分に自信がなければ、御所での生活は、さぞかし辛かるうのう」

いつの間にか、カワ姫が、そつと階を下りてきて、ささやいた。

「女の嫉妬ほど、愚かしく、恐ろしいものは、ない」

女の嫉妬とは全く無縁そうなカワ姫の口から出た言葉に、沙醐は驚いた。

「よくそのようなことをご存知ですね」

「妾も、女の端くれじゃ。いろいろ苦勞もしておる」

「はあ」

いまひとつ、ぴんとこなかった。

「ああ、あ、行っちゃったよ」

一睡がつぶやいて、がっくりと肩を落とした。

「マロはもう、寝る」

悄然と、邸の方へ去っていった。

「時に、迦具夜さまは？」

カワ姫が答えようとしたその時、透垣の辺りで、がさごと物音がした。

「カワ殿、カワ殿」

忍ぶような声が呼んでいる。

「おお、権少尉殿」

カワ姫が呼びかけると、何のまじないか、烏帽子の真上に、木の葉

を一枚乗せた、身なり卑しからぬ男が現れた。

確かに、身なりは卑しくないのだが、その男は、あまりに小男で、あまりに貧相でありすぎた。

「迦具夜姫には、目通りかなわぬか？」
自分の容姿もわきまえず、男は言った。

「さあ、今夜は、方違えゆえ……」
カワ姫は言葉を濁す。

方違えとは、方位が悪いと言うことで、居所を変えることを言う。そんな話は聞いていなかったので、沙醐は驚いた。

権少尉と呼ばれた男は言った。

「先日は不浄の日、その前は、朝から牛の糞を見たとかで物忌み、いったいいつになったら、姫は、私と会って下さるのだろう」

「少尉殿も、間がお悪い……」

「わしには、もう、時間がないのじゃ。神無月に入ったら、肥後の国に派遣されてしまう……」

「それはまた、急な話」

「かの国でたちの悪い窃盗団が大暴れをしているとかで、その追捕使としてじゃ。いや、左遷ではないぞ。無事に帰ってこられれば、検非違使の長官も夢ではなかるう。きつと、多分」

「無事に帰って来られたらね」

「え？ 何か言われたか？」

「いえ、何も」

「わしは、是非、迦具夜姫に、一緒に来て欲しいのじゃ」

それは無理なんじゃないかい？ 沙醐は心の中で突っ込みを入れた。

あの、人間離れした美しさを誇る迦具夜姫が、このようなさえない小男について、あっさりと都を離れるわけがない。

少尉は、長々とため息をついた。

「なあ、わしは、姫の出された難題をクリアしたのではなかったか……」

「少尉殿は、頑張られましたものね」

「もともと、法律を研究する明法道みょうほうどうの出だったにもかかわらず、迦具夜姫に説得され、必死に武芸に励み、ついに今年の除目の折しよくに、検非違使庁の少尉に任命されたと言つのに。ああ、それなのに、姫はつれなく……。親に逆らい道に背いたのも、みな姫の為だというのに……」

「少尉殿は、本当に、よくやられました」

「おお。わかつていただけか！」

「ええ、この都で、少尉殿のご努力を知らぬ者はありません」

「あの、迦具夜姫を除いて、じゃ」

少尉は、苦いものを口に含んだかのように言い捨てた。

「そして、その迦具夜姫に、一番、わかつてほしいのじゃ」

「何分、変化へんげの人ですからね。普通と違うんです」

「そうじゃ。あのように美しい、神々しいまでに光り輝く女は、他に二人とはいまい。まして、わが赴くべき肥後の地には……」

堪え切れず、少尉は両目を拭った。

「なあ、カワ姫。迦具夜の姫君に伝えてくれ。わしは、そなたを愛しておる。いつまでも待っておる。たとえ、ひとりむなしく、肥後の里へ落ちて行くことも、わしの姫への愛は、永遠じゃ」

言葉だけ聞けば、確かに感動的だった。

いや、何分夜間ではあったし、この場に迦具夜姫がいたのなら、一抹の感動を覚えることもあったかもしれない。

この男が、もう少し、背が高かったら。

顔立ちが、もう少し貧相でなかったら。

平安朝の夢見る少女、沙醐が思い描く、貴公子としては、この権少尉という男は、少し、いや、かなり、小柄で地味すぎたのである。これでは、時代を超えた絶世の美女、迦具夜姫には吊り合わない。

「ええ、ええ、少尉殿の真心はお伝えしますとも。その心情に胸打たれない女など、この平安京にはおりますまい……あの、迦具夜を除いて」

「おお！ ありがとうございます！ ありがとうございます、カワ殿」

カワ姫の最後の言葉は、少尉には聞こえなかったようだ。

「これで安心して、肥後の国に落ちていかれようぞ。いつの日か、必ず、迦具夜姫が後を追ってきてくれると信じて」

「お気をつけて。道中、ご無事を祈ります」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

勢いがついたのか、少尉は、カワ姫に抱きつこうとして近寄り、月明かりに間近にその顔を覗き込み、ぎよっとして飛び下がった。

「いや、お頼み申しますぞ。カワ姫。今は、そなただけが、心の頼りじゃ」

取り繕ったように言う。カワ姫は、薄ら笑いを浮かべていた。

「もし、少尉殿。イワナガ姫の昔語りをご存知か？」
去りかけた背中に、カワ姫が問いかける。

その昔、イワナガ姫とコノハナサクヤ姫の姉妹を送られた天皇家の先祖は、美しいコノハナサクヤ姫だけを手元に留めて、醜い姉のイワナガ姫を、父の元へと送り返した。

その為、天皇家は、花のように栄えはするが命はかなく、岩のように永遠であることはできなくなったという。

少尉は、はた、と立ち止まった。

「いや。わしは、カワ姫を信頼しておる」

背を向けたまま、いやに分別臭くそう言うと、彼は立ち去っていった。

「なーにが、信頼しておる、だか」

憤懣やるかたなく、沙翻が言う。

「随分失礼な男ですね」

「大方、妾のこの長い眉が、伸びきった鼻の下でもくすぐったのであろう。いや、男なんてみんな、あんなものよ。お前も、虚しい希望は抱かぬがよいぞよ」

カワ姫は、少しも気にしている気配がない。

自覚があるのなら、眉を剃ればいいのにと、沙翻は思った。

「約束しちゃったけど、いいんですか？ あんな小男の言うことを取り継いだら、迦具夜姫は怒るんじゃないですか？」

「あの女は、どうせ、妾の言うことなぞ聞きや、しないのだから、取り継いだりはせぬ」

「え、じゃあ、約束なんてしなければいいのに」
それはちよつと気の毒かも、と沙醐は思った。

「言っても言わなくても、同じだから、言わぬのじゃ。結果が同じなのだから、約束など、あまり関係がないの」
悟ったように、カワ姫が言った。

そういうものかもしれぬと思える自分が、沙醐には怖かった。

「ところで、他の皆さまは、方違えをなさらなくてよろしいんですか？」

「方違え？ 何のことじゃ」

「え？ 迦具夜姫さまは、方違えなさったと……」

「ああ、あれか。嘘も方便、なに、どうせ、いつもの夜遊びよ」「えっ！」

「あの小男が任地へ行くので、スペアを補充しておるのじゃ。全く、おサカンなことじゃ」
「……………」

もう、何をか言わん、だ。

カワ姫が、苦々しげに口をすぼめた。

「迦具夜は、病んでおる。それも、ひどくフクザツに」

「はあ」

「一見、美貌であるからして、黙っていても男どもが、わんさと寄ってくる。それを、じらしてじらして、最後に、うんと残酷な方法でふるのが、あやつの一癖の娯楽でな」

困ったものだというように、カワ姫は、肩をすくめた。

「カワ姫さまは、そのようなやり方は、よろしくない？ 殿方がお嫌いとお承りましたが？」

「人としてどうかと思うのじゃ。期待を持たせて、裏切るというのは」

それから、ふっ、と息を吐いた。

「今日、竹取りの翁の話が出たが、妾の親さまも、気味の悪い虫ばかり愛でてないで、せめて蝶にせよ、とか何とか、それはそれはうるさかった。しまいには、鬼と女とは人に見えない方がいいのだ、とか言い出して、妾は、簾の陰に隠してしまったものよ」

苦笑いをする。

「じゃがそれも、子を思う親心。虫を愛するという行いは、とかく世間から異なもの、糾弾されやすい。しかし、実際に見た人さえいなければ、口さがない噂と誤魔化することができるからな」

「それって、幽閉されたのでは？」

「まあ、やり方としてはどうかと思うがな。しかし、妾が虫を飼うのを、無理やり止めさせようとは、決して、なさらなかったよ。あの子には、何か、考えがあるのだろう、と、ご自分にいい聞かせておられた」

「……………」

「親というものは、どうしたって、子どものことを思うものなのだよ。方法が誤っていたり、力余って、迷惑な方向へ突っ走ったりすることはあるけれども」

しみじみとカワ姫は言った。

「しかし、あの、漂の君の親御さまは……………」

「花山院じゃ。問題の多い御仁であった」

カワ姫は、ため息をついた。

「天皇として在位の間も、高貴な姫をとつかえひつかえ、それも一端寵愛するとなると、周囲のものが、もう、恥ずかしくなるほど猛烈に通いつめるのだが、すぐに飽きて捨ててしまう」

「はあ」

「その上、自分の乳母の娘にも、手を出したのだぞ。乳母の子といったら、同じ乳を飲んで一緒に育ったわけだから、きょうだいも同様。しかも、そのきょうだい同様の女が、他の男との間に産んだ娘にまで手をつけたのだから……出家の身で」

「すると、母と娘に、手をおつけになつたわけ？」

「うむ。それもほぼ同時に、じゃ。母・中務なかつかきは女の子を二人生んだが、このうちの一人だけは、どういうわけか、民間に里子に出してしまった。それが、あの漂の君だ」

「……」

高貴な人の子とは聞いていたが、そのような父親だったとは。

楚々として悲しげだった漂の君が、一層、気の毒に思えてくる。

親の因果が子に報う必要は、全然ないのに。

「まあ、女好きは、病気だから仕方がないとしても、自分の家の前を通りかかった貴人の行列に投石させたり、自宅を検非違使に包囲されたり」

検非違使というのは、治安を守る警察のことであるから、花山院は、何か、悪いことをしたのだろうか。

「藤原伊周に、矢を射掛けられたのは、又しも、知っているだろう」

「？」

「はあ、なんとなく」

叔父の道長に政権を奪われ、今は語る人もいなくなってしまうが、藤原伊周は、かつて政権の中枢に食い込んでいた貴公子だった。

「って、そんな、生まれる前の話をされたって……。」

「頼りないな。弓を射たのは、花山院に女を盗られたと勘違いした伊周の早とちりだったらしいのだが、ほれ、ここでも女、よ。その後、双方の従者が入り乱れての大乱闘。死者も出たらしいぞ」

「はああああ」

「なんだ、そのため息は」

「私の想像していた、平安貴族と、えらく印象が違いますもので」「貴族など、ならず者集団に過ぎぬ」

吐き出すように、カワ姫は言った。

「平安とは名ばかりの、この世の中が、なんとも生きにくいのは、みな、松と藤のせいじゃ。松に絡んだ藤の、強烈な嫉妬と妄執の所産よ。我らは……」
はっと気づいたように口をつぐんだ。

「いや、これは、話すべきことではなかった。……沙醐？」

歴史の話が難しすぎたのか、沙醐は、こっくりこっくり、舟を漕いでいた。

三、月からの使者

「沙醐さま」

都の大路で声を掛けられた。

都に知り合いはあまりいない。

迦具夜姫に命じられて、渡来ものの紅を買いに来た沙醐は、立ち止まった。

「……漂の君？」

漂の君の实体とは、あれから何度か会ったが、振り返って驚いた。

儂く、悲しげな、印象はない。

むしろ、さんさんと降り注ぐ昼間の太陽の下で、今を盛りと咲き誇る、八重咲きの花のような、そんな生命力を湛えていた。

「これはこれは。誰かと思いましたよ。何だか、一段とお美しくなられたよう」

よう、は失礼だったかな、と思った。

漂の君は、華やかに笑った。

「あなたは、笑顔の方が素敵ですよ」

「沙醐さまこそ、いつもいつも、笑ってらっしゃいます」

それは多分、無理無体を押し通す主人達に使われる者としての宿命であろう。

無理難題を押し付けられたら、笑うしかないではないか。

「蛭邸の皆さまは、お元気ですか？」

「あの人たちは、殺しても死なないから」

「その節は、大変お世話になりました……」

それは、単に、皆が興味本位に動いただけだろうと沙醐は思ったが、曖昧に笑うに留めた。

「ほら、また、笑ってらっしゃる」

「だから、これは……」

「沙醐さまの、そんなところが、私は大好き！」

沙醐は、はっとした。

しづしづ仕事をこなしている日常で、人から好かれるような笑顔を身に着けるといいう、なんだかとてもない奇跡を起こしたような気がした。

「からかつてはいけません。お話を逸らせていらっしやいますね。漂の君には、なにか、とても良いことがおありになったのでしょうか？」

百合根の策が、功を奏したのだ、と沙醐は思った。

ありとあらゆる失敗を想定しては悲嘆に暮れる師直の尻をひっぱたき、なんとか和歌を贈らせたと聞いている。

もっとも、偵察していた一睡によると、和歌も文も、業を煮やした百合根の代表作だということだったが。

漂の君は、くすりと笑みを漏らした。

「私、恋を試してみました」

「はあ」

「今まで、地味に、息を潜めるようにして生きてまいりましたけれども、ここへ来て、燃えるような熱い恋を経験してみたいと思うようになってきました」

「それは、いいことですよ。何にしても、あなたは、まだ、お若いのですから」

「沙汰さまは、恋は、馬鹿げたことだとは、お思いにならない？」

「そんなこと……」

「母は、そう言ったのです」

「え？」

漂の君の口から、母の名が出たのは、初めてのことだった。

「恋は、馬鹿げたこと。女は、自分の力でしか幸せになることはできない。男君に頼ろうなんて、不潔な考え」

カワ姫と同じようなことを言っている。

しかし、カワ姫は、時代がなんとかだから、そうした生き方も許す、というような言い方をしていたような気がする。

「お前は一人で生きてゆけ。私の生みの母は、そう言いました」

「漂の君のお母様って……」

母娘で花山院の子を産んだ、その母の方だ。漂の君の姉が、その、娘になる。

母と姉が、父の子を産んだのだ。

さぞかし複雑な家庭環境であったことだろう。

「私、」

不意に、初めてあった時の、あの、内気そうな表情が蘇った。

「私、生みの母のことは殆ど知らないのです、多分。幼くして兵部ひょうぶの元へ里子へ出されましたから」

兵部というのは、宮中に仕えている女房の名だ。

「多分」という言葉が引っかかったが、家庭内のことをあまり聞き出すのは、ぶしつけと思われた。

「兵部の家では、うまくいつているの？」
つとめて、何気なさそうに尋ねてみた。

「ええ、それは、もう。ですが、兵部には兵部の子どもがおりますから。それに私はもう、一人で生きていけますし」

「余計なことかもしれないけど……」

沙醐は、慎重に言葉を選んだ。

「時には誰かを頼りたくなるというのは、とても人間らしいことじゃないかしら。皆が皆、強い人ばかりじゃ、私なんか、疲れてしま
うもの」

漂の君は、低い声で笑った。

「とても、沙醐さまらしいお考え」

「まあ、人生は一度きりだしね。親の考えで自分の生き方を決めるのは、どうかと思うのよ。自分で自分の人生を引き受ける為にも」

漂の君は、一瞬、泣きそうな顔をした。

「太皇太后さまの所は、どう？」

根掘り葉掘り尋ねる、世話好きオバさんになったような気がした。しかし、漂の君の生霊を見送りながら一睡が言い捨てた、「女のイジワル」が、ずっと気になっていたのだ。

百合根は優しいが、中には陰湿なイジメに走る女房もいる。

漂の君は、心外そうに、目を見張った。

「皆さん、とてもよくして下さいます。特に、太皇太后さまは、本当にお優しく、人の心のわかるお方でいらっしやいます」

「ふうん。なら、いいんだけど」

「太皇太后さまのことや、お仕えする人たちのことを、よく言わない人たちがいることは、私も聞き及んでいます……」

かつて、一条天皇の中宮として、藤原道隆の娘・定子と、道隆の弟である道長の娘・彰子の二人が、同時に立った。

定子と彰子。従姉妹同士にあたる、二人の中宮。

二人の中宮が、というより、中宮たちにお仕えする女房たちは、何事につけ、競い合っていた。

彼女達は、それぞれが仕える女主人の「格」をあげるべき存在だった。後宮は、いろいろな才能をもつ女房たちで、いっぱいだった。そこはさながら、中宮主催の、芸術サロンとでもいうべき場所になっていた。

いずれも、父親の道隆や道長が、競って集めてきた、才媛たちである。

プライドの高さは、想像に難くない。

結局、定子の父・道隆は早くに亡くなり、政治の実権は、道隆の息子達ではなく、弟・道長に移った。

少し遅れて、定子は産褥で死去。

女の戦いは、彰子側の勝利と終わった。

しかし都では、彰子や、その女房達の評判は、あまり良くない。二度目の出産で亡くなった、中宮定子をいたむ声は、未だに、都にうずまいている。

定子の生んだ、第一皇子・敦康親王をさしおいて、彰子の生んだ後一条天皇が即位しているのだから、弱い者をかばう習性のある都の人々に、彰子の評判は、すこぶる悪い。

当然、彰子に仕える女房たちの噂話も、それはそれは、悪意に満ちている。

もちろん、大変な権力を持つ彰子太皇太后のことであるから、表だってと悪口を言ったりはしないのだが。

「でも、彰子さまは、亡くなられた定子さまの皇子・敦康親王さまを、引き取って育てられたのですよ。即位の件も、ご自分のお子さまがあられたにもかかわらず、ぜひ、敦康親王さまを、と、それは熱心に、お父上を説き伏せていらっしやいました。その願いが叶えられず、ご自身のお産みになった敦成親王が即位された時は、一時、お父上の道長さまと険悪な仲になられたくらいです」

漂の君としては珍しく、口を尖らせ、激しい口調で言っただけだ。

道長は、天下を取るための最後の布石、天皇の外祖父になりたかったのだ。

その為、どうしても実の娘・彰子の産んだ子を天皇として立てる必要がある。

定子の産んだ皇子が即位すれば、亡兄の孫が天皇になってしまう。だから、半ば強引に、彰子の産んだ皇子を天皇に立てた。

それくらいの事情は、沙鞠もわきまえていた。

そして、世の習いで、なんとなく、今は亡き中宮定子を気の毒に思っていた。

だから、生きて実権を握った太皇太后・彰子の元で働く漂の君の身の上を案じていたのだ。

しかし、漂の君が太皇太后を援護する口ぶりからすると、雇い主である太皇太后・彰子に、深く心酔しているのだろう。

それならそれでいい。

一睡の「女のイジワル」は、大事な生き須玉を手放すことを強要された、やつかみだったのだろう。

沙醐は頷いて、歩き出した。

しばらくは、二人とも、無言だった。

「沙醐さまは、恋をしたことがおあり？」

不意に、漂の君が尋ねてきた。

「……………」

恋、ねえ。

咄嗟に、答えられなかった。

「私は、確かに、生きていると感じたいのです」

そういう漂の君の声は、はっとするほど真つ直ぐだった。

「そう思うようになったのは、沙醐さま、あなたのお陰です。あなたと、蛸邸の皆さま……生霊となったおぞましいこの身を、疎むことなく、まるごと受け容れて下さった、みなさま方のお陰」

吹っ切れたような、笑顔だった。

幸せになつて欲しい、心の底から、沙彌は思った。

風情もなく秋の草が繁茂する蛭邸に帰り着くと、中から、凄まじい、男の泣き声が聞こえた。

「な、何事！」

思わず叫ぶと、一睡が、まろび出てきた。

「師直だよ。師直が来てるんだ」

「師直さまが？ でも、なんで泣いてらっしゃるの？」

「ふられたらしいよ。男はあまた、とか何とか、そういう意味の歌が送り返されてきたそうさ。しかも、百合根経由で」

「では、漂の君には、百合根さまの代作と見抜かれていたわけですね」

あるいはそれが敗因だったか。

だが、つい今しがた、漂の君自身の口から、燃えるような恋がしたいと、聞かされたばかりではないか。

それなのに、初めての文を見ただけで、こつもずばりと断ってくるものだろうか。

「……それは、師直以外の相手と、ということじゃない？」

話を聞いた一睡は、眉をしかめた。

「師直からの文で、あら、私って意外ともてるんだあ、なんて自信を持つちゃって、だったら、こんなシヨボイ男じゃなくて、もっといい男を漁りにいくぞーって、きつと、そう思ったに違いない。

女は、怖いね」

「そっきますか」

「間違いない」

子どものくせに、なかなか女心に詳しいではないか。

「まあ、私も、あの師直さまでは、ちょっと、その、月とすっぽん、と申しますか……」

「捨石だね」

一睡が短く言い捨て、勝手にまとめた。

「でも、とにもかくにも、これで漂の君が、誰からも愛されないなんていうおかしな妄想から解放されたんだから、師直の行いにもそれなりに意味があったということだ」

それは全くその通り。

沙翻も、思わず深く頷いてしまふのだった。

「それで、師直さまは、今？」

「百合根が相手をしている」

「それにしても、文を見ただけで、速攻断つてくるなんて、百合根さまも、いったい、どのような歌を贈られたのでしょうか」

「百合根は、何でも古臭いからなあ。ともに白髪の生えるまで、とかなんとか、やっちゃったんじゃないの？」

なるほど、ともに白髪の生えるまで、燃えるような恋、というのは少々きつい気がする。

何にしても、男の愁嘆場に行き会つのは、真っ平だ。

迦具夜姫の局に行つて、使いの品を届けようか、それとも、カワ姫の所で、新種の虫でも見せてもらおうかと逡巡していると、物凄いい足音がした。

廊下は、まっすぐだ。

逃げ隠れする場所はなかった。

「沙醐どの」

しかし、沙醐の反射神経は、というより、防御反応は、確実に進化していた。

脳で考えるより速く、脊髄で反応した。

沙醐は、慰めを求めて抱きついてきた師直の体を、どっ、とばかりに、投げ飛ばしていた。

月からの使者

その1（後書き）

3章目に入りました。

ここまでおつきあい下さいまして、ありがとうございます。

さて、いよいよ、話が流れ出したので、来週から、月・火も、アツプ致します。時間はまちまちかもしれませんが、お許し下さい。

お楽しみいただければ、幸いです。

満月の夜が近づいていた。

迦具夜姫は、月を見上げて、ため息をついてばかりいるようになった。

「どうなさいました、この頃。夜遊びにもおいでにならないで、月を見上げてばかり、おいでになります」

十五夜も間近のある晩、沙鞠は、また、縁に出て、月を見ている迦具夜姫の側に座って、問いかけた。

「月の顔を見るのは、忌むべきこと、と申しますよ
そんな言い伝えを聞いたことがある。」

迦具夜姫は、深くため息をついた。

何か言いかけ、口をつぐんだ。

そしてもう一度、思い切ったように、口を開いた。

「沙鞠や。今まで黙っていたのだけれども、実は私は、この地上の人間ではないのだよ」

「知っています」

「知ってるって……」

「姫さまが人間であろう筈がありません。カワ姫も一睡さまも人間離れしていらっしやいます。特に迦具夜さまは、怨霊、とまでは申しませんが、妖怪、に限りなく近いのでは、と、私、思っております」

「お前、それは、失礼じゃないかい？」

「むしろ、妖怪に失礼かと……」

「安心していいわ、私は妖怪などではないから。もちろん、怨霊でもないけど。聞いて驚くがいい、実は私は、月の世界の住人なので」

「はあ」

「……驚かないの？」

「だって、お体が光ったり、消えたり、空を飛んだりするのを見えますからね」

「うーん、状況証拠をばら撒きすぎたのね」

迦具夜姫はため息をついた。

「とにかく、もうすぐ満月、非常にヤバイ事態です」

「なにをやらかされたの？」

「何にしても、もはや手遅れ」

「はあ？」

「私は、月の世界に帰らなければなくなるやもしれません」

迦具夜姫は、再び月を見上げ、深いため息をつくのだった。

「カワ姫、カワ姫、大変です！」

「あ、これ、粗忽者め！ そこな箱に触るな！」

「おっとっとツと」

沙鞠は、踏みかけた白い箱の真上で、足を止めた。

「危ないところでした。このような足元に、大切な虫を、お置きな

さるな」

「あわてふためいて侵入してくる馬鹿者がいなければ、何をどこに置こうと、妾の勝手」

「少しは、掃除する者の身にもなって下さいよ」

「だから、掃除はいいと言っているだろうが」

「そういつわけには参りません」

現に、この局に近づくだけで、妙に咳込む。

「それで、何をそんなに騒いでいるのだ」

「ああ、そうだ、迦具夜さまです。迦具夜さまが、月からの使者に連れ戻されてしまうかもしれない、と、こつおっしゃるのです」

「ああ、また、それが」

迦具夜姫と聞いて、何かを期待しているように見えなくもなかったカワ姫は、心底がっかりしたように、肩をすくめた。

「またそれが、って、前にもそんなことがあったのですか？」

「毎年のことよ。毎年、十五夜が近くなると、月に帰るの帰らないのと、大騒ぎをしとる」

「では……」

「もちろん、帰ったことなど、一度もござらぬ。現にこつして、この邸に暮らしておるのだからな」

「はああああ」

一気に力が抜ける思いがした。

なんだ。

「お前、迦具夜に、月の世界に帰って欲しくないのか？」

面白いものでも見るように、カワ姫は、沙翻の顔を覗き込んだ。

確かに、迦具夜姫は、エキセントリックだし、邪悪なところもある。そのうえ、非常に美しい。

同性として、これほどカンに触る存在もない。

しかし、だからと言って、姫が嫌いかということ、決して、そうではなかった。

突飛な言動は、純粹さの裏返しだし、邪悪さは、何かを面白がっているだけで、決して悪意からではない。

少なくとも、沙翻への悪意は、微塵もない。

むしろ、好意の片鱗めいたものを感じるのだが、それは、或いは、勘違いかもしれない。

「それは、帰ってほしくないのに決まっています」
沙翻にしては珍しく、きっぱりと言いつつ切った。

「ほう」

カワ姫は目を細めた。

「迦具夜に言えば、喜ぶぞ」

「お願いです、黙っていて下さい」

迦具夜姫が聞いたなら、本人は好意だと信じる、どんな裏返し行為……単純に、仕返しと言っていて……が返ってくるかわからない。

「安心せい、月の世界でも、あやつは、持て余されておるのだから」

「……………」

その時、邸の入り口の方が、にわかに騒がしくなった。

「吾が子、吾が子、ご無事でいるか？」

「ああ、竹取りのじいさんが来た」

カワ姫が露骨に眉をしかめた。

「毎年毎年……。絶対に、月に帰ることなどありえないのに」

「竹取のおじいさんって……」

「迦具夜の育ての親よ。光る竹の節で泣き喚いている迦具夜を見つけて出し、育て上げたのだ。もう、よほどいい年の筈だ」

「はあ」

「迦具夜がいつまでたっても結婚しないので、心配で心配で、死ぬことができないのだそうだ。……気の毒に」

話していると、ぱたぱたという軽い足音がして、御簾のすだれが、ぱつと捲り上がった。

「おお、カワ姫！ 久しぶりだな」

「一年ぶりでございますね」

カワ姫が、冷静に返した。

「ふん」

答えた老人は、なるほど、梅ばあさんと張りそうなひどい年寄りではあったが、その小柄な体は鍛えぬかれ、動く足取りも敏捷であった。

「按察使の大納言殿からの言付けじゃ。虫ばかり愛でてないで、はよ、婿を取れ！」

「まったたく、どこの親も……」

カワ姫は露骨に舌打ちをした。

その後、どのように辛辣な罵詈雑言が続くかと、沙醐は首を竦めたが、意外なことに、カワ姫は、それ以上、何も言わなかった。

「あ、竹取の、お爺さま！」

心底嬉しげな声がして、一睡が顔をのぞかした。

「おお、一睡殿！ さてもさても大きうなられましたな」
爺の相好が崩れた。

一睡が走りよってきて抱きつくくと、竹取の翁は、その体を持ち上げ、高い高いをした。

老人と子どものそれは、まことに、心洗われる、麗しい情景だった。

不意に、爺の顔が歪んだ。

さては、一睡の体が重すぎたか。

腰の骨にヒビでも入ったかと、沙醐は、本気で心配になった。

「うっ」

一睡の体を下に下ろし、爺は、目を拭う。

「お爺さま、どうなされたの？」

天使のような純粹な声と言葉遣いを、一睡も使用できるものらしい。

「わしはいつたい、いつになったら……。いつになったら、おまえ様のような、かわいいマゴを持つことができるのか……」
「それは永久にムリ」

氷のように冷たく、巖のように厳かに、カワ姫が言い渡した。

十五夜の日がやってきた。

竹取の翁は、朝から大張りきりで、邸の周囲を見回っている。竹の筒から大金が出てきたとかで、つわものを大勢雇い、警備に充てている。

中には、迦具夜姫目当ての貴族もいるらしい。

「ほれ、どこにどんな縁が転がっているやもしれぬからな」
皺だらけの臉をひくひくさせて、不気味なウインクを沙汰に送ってきた。

「懲りぬヤツじゃ、あのジジイも」
入れ違いにカワ姫がやってきて、うんざりしたようにつぶやく。

「あれ、姫さま、お出かけですか？」
「うん、ここはうるさいからな。虫も寄り付きはせぬ。しばらく、メメらのところでも世話になりにいこうかと思って」
「メメたちのところですか？ いけません、そのような下賤の者の所へまかりなさっては！」

虫取りの名人と言ったって、近在の、下々の者の子らではないか。

「沙醐、口を慎め」

珍しくきつい口調でカワ姫が言う。

「人に貴賤はないわ。むしろ、額に汗して口を糊する糧を得る人々が、本当に尊いのだと思わぬか？」

「それは……」

「食べ物が一番の宝なのだよ。物や金になぞ、何の価値も無い。そんなことを言うのは、フジの世になってからだ」

理解しかねることをつぶやきながら、カワ姫は、引き寄せた牛車に、ひらりと飛び乗った。

「そういうわけで、二三日帰らぬが、心配するな」

「はあ……」

「ああ、それから、これ」

カワ姫は、何やらかさかさとしたものを一枚、沙醐に手渡した。

「今夜はこれが必要になると思うぞ」

「なんですか、これ？」

「蝉の羽じゃ。光を遮ってくれる」

「蝉の羽？」

悲鳴を上げて投げ捨てなかったのは、沙醐にもある程度の馴れが生じていたからであろう。

カワ姫は、満足そうに頷いた。

「では、留守を頼む」

「……いつてらっしやいませ」

その時、牛の轡を抑えていた侍従が、こちらを向いて、にやりと笑った。

「あ、メメ……」

「俺らが、一番尊いんだよ。国の宝さ」

少年は、にやりと笑った。

いよいよ暗くなると、警護の人の数も増え、荒れた屋敷内にも、慌しい雰囲気が増え溢れた。

「まあ、どうしましょう、どうしましょう」

百合格は、普段使わない物をしまつてある蔵と、邸の間をうろつろしては、しきりと困っている。

「百合格さま、何をなさっているのです？」

中庭で鉢合わせて、沙汰は思わず尋ねた。

「何を、つて、これだけの人数が集まっているのですよ？ 碗は足りるかしら？」

「杯の数は大丈夫？」

「碗？ 杯？」

「高麗の皿も出すといいわ。ああ、花瓶も必要ね」

「……？」

「なにをぼんやりしているの？ 宴に間に合わなくなってしまうのではありませんか？」

「宴、ですか？」

「ええ。こんなたくさん殿方が集まっているじゃありませんか。」

迦具夜さまの、集団お見合いの宴ですよ

「は？ 今宵は月よりの使者が、迦具夜姫を連れ戻しに来る……でも、決して連れて行かないそうですけど……夜だったのでは？」

「あなた、何の話をしているの？ 月よりの使者だなんて、また、夢物語を」

「でも……」

「わざわざ、さぬきの里より、親御さまがおいでになっているのですよ。姫さまの行く末を案じてのことに決まっていますでしょう。さ

さ、手違いがあつてはいけません。肴はまだか、お酒は充分届いて
いるか……」

百合根はせかせかと歩いていく。

「ああ、忙しい、忙しい」

え、……っつと。

今夜は、月からの使者が来る夜。

でもって、迦具夜姫の集団お見合いパーティ。

沙翻は混乱した。

えーと、私はどうすればいいのかな。

一応、迦具夜姫の一大事ということで、髪をきりりと結い上げ、
男のように水干姿に、弓の入った筒を背負っていた沙翻は、にわか
に拍子抜けしてしまった。

そういえば、百合根は、立ち働いているにもかかわらず、珍しく
唐衣まで着こんで正装していた。

もしかして、おこぼれにありつけるってこと？
って、あたししたら、なんてさもしいことを！

しかし、打ち見たところ、身なりのいい、貴公子然とした男が多
い。

玉の輿もアリかもしれない……。

沙翻の心中を知ったら、カワ姫は激怒したかもしれないが、平安
のこの時代、女の幸せは、男によって、簡単に左右されてしまうの
である。

仕方ないではないか。

開き直って、着替えに行こうとした時、にわかには月の光が強くなつた。

地面まで発光しそうなほど、強く明るい光が、月から降り下りて来る。

「目が痛い……」

あちこちから、悲鳴が聞こえる。

あまりの眩しさに、目を開けていられない。

……光を遮ってくれる……。

不意にカワ姫の声が耳元に蘇って、沙醐は、懷中に仕舞い込んでいた蝉の羽を取り出した。

目に当ててみる。

薄い羽は、光の強さを遮ってくれる。

光の大元、まんまるく満ちた月から、見たこともないような豪華な装束を身に着けた貴人たちが、しずしずと舞い降りてくるのが見えた。

「迦具夜姫、お迎えに参りました」

中でも一際立派な風体の者が、声をかける。

しかし、邸は戸がたてられ、人の声は、そよともしない。

「姫、さ、意地を張っていないで、出ておいでなさい」

月の使者の声がうんざりして感じられたのは、異界の者の常、であるのか。

それでも応えのないのを見て取るや、月の使者は、ゆっくりと片手を上げた。

ばたん。ばたん。

家中の扉が音を立てて開いていく。

使者は、静かに手をこまねいた。

家の中から、光り輝く迦具夜姫の体が、すうーッと現れた。

「あつ、姫さま！」

沙翻が飛びつくより早く、何者かが、姫の足元にすがりついている。

「竹取の……」

それは、竹取の翁だった。

「ええい、たった一人の大事なわが子を、月の世界へなどやってたまるものか」

「親さま、親さま、大丈夫ですよ」

優しい声を掛けたのは、意外にも、月からの使者だった。

「これは形式的なことですから。毎年のことでしょう」

「それでも、月になぞ、やらぬぞ」

「だから、大丈夫ですってば」
げんなりしたように、使者は言った。

使者が手を振るうと、姫の体は、翁の手をふわりと抜け出して、宙に舞った。

月の使者と対等に向き合う。

「ええと、姫さま、穢れた地上の食べ物にも、すっかりお慣れになったことでしょうか、解毒剤の件は省略して、っと。……で、成績はどうですか？」
「五十三人」

姫はつつけんどんに答えた。

「たった？」

「だって、十二で割って御覧なさいよ。一月に四人から五人よ」

「少なすぎます」

「充分よ」

「記録によれば……」

月からの使者は、後ろを振り返り、何か巻物のようなものを受け取った。

「最初の年は、一二三名。内訳は、左遷八十九名、失踪三十二名、死んだ人も二名いました。次の年は、一一七名、内訳は……」
「だってしょうがないじゃない、」

迦具夜姫が遮った。

「悪い噂が立ってしまったんだもの」

「そこは、うまくおやりになるべきです」
「魔性の女、とか、傾国の美女、とか、とにかく、私と付き合つと身を持ち崩す、なんていうのよ」

「はあああ」

月からの使者は、ため息をついた。

「では、月にお帰り遊ばしますか？」

「絶対、いや」

「賢明です」

使者はまた後ろを向いて、別の巻物を受け取った。

「地上に降りられるまでに、あなたが壊された建物、三〇五二棟、使い物にならなくされた輿、一万五六七基……」

「帰りません」

「……被害総額、一兆五千七百……」

「だから、帰るつもりなんかないんだってば！」

「というより、帰ったら、大変なことになりますよ。弁償の為、一生、ただ働きです。被害総額がさらに拡大する恐れもあるわけです……」

使者は、巻物をくるくるとまいて、ぽん、と、後ろの従者に手渡した。

「しかし、年間五十三という数字は、あまりに効率が悪すぎます。それだけの人間しか落とせなかったとして、はたして、いつになったら、人間界に安寧が訪れるとお考えですか？」

「五十六億七千万年後かな」

「それは、弥勒菩薩が哀れな人間どもを救済すると言う約束の時でしょう。迦具夜姫ともあるうものが、仏の力を頼ってはいけません。ライバルですぞ」

「わかってるわよ。冗談よ」

迦具夜姫は、肩をそびやかした。

「来年は、もっとうまくやるわ。より多くの男達を不幸にして……」

救つてみせます」

「あなたのその美しさで、一人でも多くの人間に墮落と救済を……。期待しております」

使者は、ゆっくりと上昇した。

「いずれにしても、お帰りになるおつもりなんて、ないので。無理に月の世界へお連れすれば、どついつ目に遭つか……」

なおもぶつぶつ言い続けていたようだが、その体が高みに上がるに従つて、聞こえなくなつていった。

月からの使者たちの行列は、しずしずと、月の光の中に吸い込まれていった。

厨くしやで気絶していた百合根が息を吹き返すと、宴会が始まった。

大量の酒がふるまわれ、笛や琴が、かしましく鳴り響いた。

ざわざわというざわめきの中、しかし、平穩だったのは、初めのうちだけだった。

たちまちのうち、貴公子たちは酔漢と化し、あちこちで、目もあてられないような乱れた光景が繰り広げられた。

コンパニオンとして連れ込まれた女房に言い寄るなんてのは、まだ、かわいいうちである。

悪口雑言をわめきたてる者、葩を押し倒して暴れまわる者、四股を踏み、家具調度を壊す者たち……。中には、取っ組み合いの大立ちまわりを演じる者もいた。

これが、平安貴公子というものか？

動きやすい衣裳から、紅葉襲に着替えて出てきた沙醐は、あきれ果てて、乱れに乱れた宴席を見回した。

……いやだ。私ったら、何を期待していたのだろう。

少なくともそこには、沙醐の求めるような理想の貴公子などいなかったのである。

宴の主演、迦具夜姫は、といえば、竹取の翁の面前に据えられ、なにやら説教されている。

きつと、早く良い男を見つけよ、と、くどくどと申し渡されているのである。

……人間を不幸にして救うとは、どういうことだろう。

沙醐は、さきほどの天人との会話について、姫に教えて欲しいと思ったが、これでは、割り込む隙がありそうもない。

それにしても、竹取の爺さまも、迦具夜姫を自由にして、参加している貴公子たちに機会を与えてあげればいいものを。

せっかくのお見合いパーティーを、親自らが握りつぶしているようなものである。

いざ、結婚、とか、お見合い、とかいうと、男親など、こんなものなのかもしれない。

翁と迦具夜姫は、激しく何かを言い争いつつ、居所へと引き上げていった。

ふと、沙醐は、広間の隅を、一睡が、抜き足、差し足で歩いているのに気がついた。

辺りは一面、濃い酒の匂いが立ち込め、みな、自分の楽しみに夢中である。

誰も、こそこそ歩く、小さな子どもの姿など気にも留めない。或いは、本当に見えていないのだろう。

しかし、しらふの沙醐には、はっきりと見えた。

一睡が、抜き身の刀をぞろりと引きずっているのが。

「一睡さま……」

沙醐は息を飲んだ。

一睡が目ざしているのは、部屋の隅で、すねたように胡坐をかき、ぐいぐいと、流し込むように酒を飲んでいる一人の男だった。

水色の水干、白い袴。

まさしく、当代切つての御曹司と見受けられる身なりである。

しかし、その白い顔面には無精ひげが生え、眼光鋭く辺りを睥睨するさまは、貴族というよりも、むしろ近頃新興してきた武士のようであった。

一睡は、まさか、あの男を……。

不意に、師直を殺そうとした時のことが、脳裏に蘇った。

一睡は、生霊の辛い思いを消し去る為、その願いを叶えてやろうとする。

生霊が死にたいと願えば、自殺の手助けをすることだって、やりかねない。

あそこで酒を飲んでいいる男が、生霊になり、自殺を希望しているとは考えがたいが、しかし、明らかに、一睡の狙いは、あの男である。

あぶない……。

あの男が相手では、勝ち目はない……。

しかし、あまりに距離があり過ぎた。

ここからでは、止めるに間に合わない。

男の背後に立った、一睡が刀を振り上げた。

もはやこれまでか。

切りつける！

沙翻は目をつぶった。

息が詰まり、時間が止まったように感じた。

恐る恐る目を開いたとき、刀は、男の手にあった。

「一睡さま！」

時間が緩やかに流れ出す。周囲の人はまだ、何も気がついていない。沙翻はあわてて駆けつけた。

「一睡さま、お怪我は」

沙翻は一睡をしっかりと抱きしめた。一睡は、真っ青な顔をしていた。

「なぜ死なぬ。なぜ、血が出ぬのだ」

「このようなおもちやで、死ねるわけがなかるう」

男は太刀を投げ捨てた。

ぱたり、という、およそ刀らしからぬ音がした。

「だが、お前は死なねばならぬのだ、この、人でなし！」

沙翻の腕の中で、一睡がわめいた。

「お前を怨んでいるものがある。怨みのあまり、身は生霊となって、宙有をさ迷っている者がいる！」

「知ったことか」

男は鼻で笑った。

「乳母の腕に抱かれて安心したか。なんとも情けない小僧よのう」

一睡が、沙翻の腕をほどこうとして暴れた。そうはさせじと、沙翻は必死に一睡を抱き止めた。

「子どもの悪戯です、悪戯ですから……」
沙翻は必死で訴えた。

広間が、しんと静まり返った。
ひそひそとささやき声が聞こえた。

「おい、お前」

男は、沙翻をぎろりと見た。

「おもちゃとはいえ、命を狙われたのはこのわしじゃ。そいつの心配をするなら、このわしのことを気遣うべきではないのか」

「も、申し訳ありません」

「不愉快だ。帰る！」

男は立ち上がり、周りに侍っていた人々を引き連れて、立ち去っていった。

「一ツ目のヤツ！」

緩んだ沙翻の腕の中から躍り出るようにして、一睡が地団太を踏んだ。

「偽の太刀を寄越したな。くそ！」

「何をおっしゃいますか。偽だったからこそ、助かったのですよ」

「沙翻は、マロがあいつにしてやられると思うのか？」

「気迫が……。あのお方の全身からは、何か、殺気のようなものが

感じられました。一睡さまでなくても、危のうございます」

「奴が、荒三位だ」

吐き出すようにして一睡が言った。

荒三位、荒ぶる三位、藤原道雅。

藤原道隆の孫で、中関白家の御曹司。故中宮定子は、叔母にあたる。

大叔父である道長が勢力を握ってからは、すっかり落ち目になってきてはいるが、それでも藤原一族であることに代わりはない。

「あやつはな、沙醐。何の罪も無い、使用人に……それも他人の使用人だぞ……、ただ、気晴らしの為だけに、部下に指図して、殴る蹴るの集団暴行を加えさせたんだ。藤原でなければ人でないと思っっているんだ。おかげで、その使用人は、大怪我をした上に精神を病み、生霊となって、毎晩毎晩、糺の森をさまっている。そんなの、人間のすることか？ そんな奴を生かしておいていいのか？」

「しかし、相手が悪過ぎます……」

荒三位の悪い噂は、都で知らぬ者はない。

藤原の跡継ぎとして甘やかされて育った彼は、父親の失脚と共に、失意の人となった。

従者を使つての乱暴狼藉の他、自身も、衆人環座の中、派手な暴力沙汰を起こしている。

「おまけに、マロのことを子ども扱いした。沙醐、お前のことは、乳母扱いだ！」

「それは、別に構いませぬ」

現に、一睡に対して普段やっている仕事は、乳母の仕事である。

「あいつだけは、許さぬ。一ツ目に言っつて、今度こそ、本物の太刀を鍛えさせる」

「一睡さま、どこへ……」

「ここは酔っ払いばかりだ。空気が悪い。百合根、百合根！」
一睡は、通りかかった百合根の後を追った。

荒三位が立ち去った後、周囲は何事もなかったかのように、酒池肉林の世界に立ち戻っていた。

この酔客たちの何人が、今の一幕を覚えているか、心もとない限りだ。

もつとも、その方が、沙醐や一睡にとっては都合がいいのだけれども。

酔っ払いに袖をつかまれ、振り放すことができないでいた百合根は、一睡の姿を見ると、ほっとしたような顔をして、懐に招き入れた。

百合根をつけ狙っていた酔っ払いは、なんとも白けた顔になって、袖を放し、次の獲物を探しに行ってしまった。

百合根にまかせておけば、安心だな。

沙醐は思った。

それにしても、その、一ツ目とやらを厳しく諫めて、たとえ贖物であろうとも、二度と太刀など渡さぬよう、きつく申し渡さなくてはならない。

「いちまいい、にーまいい、」

百合根が一睡と立ち去ってしまった後、雇われ女房たちと、酒肴を運んだりして、懸命に立ち働いていると、耳元で不気味な声がする。

同時に、熟柿にも似た、気色の悪い匂いが、ふんと漂ってきた。

「あ、これは、右大将殿」

なんと、賢人右府と呼ばれるほど、賢者で名高い、右大将・藤原実資^{すけ}も、この、お見合いパーティーに参加していたのだ。

「ふふふ、動いちゃダメ。さんまいい、」

「右大将殿、何をしておいでで？」

きつと、深遠な、真理についても熟考しておられるのである。

「君の、衣裳を数えているの。何枚着ているのかなー」

「うのお。」

沙醐は、男の襟首をむんずと？んで、どう、と投げ飛ばした。

右大将、藤原実資は、幸福そうな笑顔を浮かべて、目を回した。

これだけできあがっていれば、後日、沙醐の狼藉を思い出すことなど、出来よう筈もない。

で、酒席はといえば、実資のささやかな受難など、大海のさざ波
と言えるほどに、乱れに乱れているのであった。

月からの使者

その4（後書き）

右大将、藤原実資の酔態ですが、これは、筆者の捏造ではありません。「紫式部日記」の、若宮生誕50日の祝儀の項に、ちゃんと記されています。その点、創作力のなさというか、オリジナリティーの欠如というか………事実は小説よりも奇なり、ということ、ご寛恕下さい。

また、荒三位・藤原道雅も、実在の人物です。

深夜の羅城門など、来たい所ではない。
まして、若い女の身で、たったひとりで……。

鬼が出る、とか、盗賊団の根城である、とか、疫病が流行った時は死体捨て場である、という噂まで流れている。

しかし、菅公、菅原道真の怨霊は、確かに、羅城門を宿りにしていると言った。

菅公が鬼というのは、それはその通りである。

羅城門は、朱雀大路すずくおおじの南の外れにある。

この内側が洛中、外側が洛外。

羅城門は、都の、内と外を分ける門なのだ。

同時にそれは、魔境との結界……。

そう言う者もいる。

満月の月が、大路を煌々と照らしていた。

丹塗にぬりの柱が、何本も、太く聳えている。

沙汰さたが生まれる前に二度ほど、暴風雨で倒壊し、現在は完璧な姿ではないけれども、その威容は、充分に伝わってくる。

……胸が華やぐほどにあかい巨きな柱に、下からはよう見えぬが、な、緑青を噴いたような、それはそれは鮮やかな、碧の屋根……。

父がよく話してくれた、ありし日の羅城門の雄姿である。

決して近づいてはならぬと教えられた、都の外れの、魔境。

ふと、沙醐は、耳をそばだてた。
門の上階の楼から、笛の音が流れてくる。

沙醐の知らない曲であった。

それにしても、なんと哀切で、なんとしみじみと人の心に染みわたる曲であろう。

「沙醐」

至近距離で名を呼ばれ、沙醐は飛び上がった。

稲妻も見せずに現れた雷神、菅原道真が、両目をぎらぎらさせながら立っていた。

「ああ、びつくりした。いきなり現れないでくださいよう」
「すまなかった。って、お前は、わしに会いに来たんじゃなかったのか？」

「そうです。そうですけど」

沙醐は耳を濟ませた。

笛の音は止んでいた。

「もう。菅公さまが驚かせるから、笛がやんでしまったではありませんか」

「ふん」

菅公は、太い鼻息を噴き出した。

「あのような素晴らしい笛の音、沙醐は、初めて聴きました。せめて、もう一曲、聴いていたかったのに」

「笛の主は、もうおらん」

菅公は、ぼそつと言った。

「あやつとお前を会わせるわけにはいかぬ。だから、わざわざ出向いてやったのだ」

「そのお方とは？」

「大変な美青年だ。管弦の技量も確か。人の心を奪い去る。あのよ
うな男にお前を近づけたら、蛭邸の連中に、何と言われることが」

そのような方なら、是非、お会いしてみたかった、と、先ほどの
宴で、平安貴族というものに心底失望した沙醐は、しみじみと思っ
た。

「女にとっては、男は、不器量で不器用な方が安全なのだ」

馬鹿にしきったように、菅公が言う。

「はあ」

「ところで、沙醐、何か用があるのだろうか？ わざわざこの時間に、
この羅城門を訪れたからには」

「私は、」

沙醐は、ためらった。どこから話を切り出したらいいのか、わから
なかった。

「菅公さまは、カワ姫や迦具夜姫とは、古いお付き合いだとお話
しになっておられましたね」

梅屋敷の梅が、菅公は、怨霊になってから、迦具夜姫と一緒に京にやってきた、カワ姫は、そのもつと前から都にいる、と話していた。

「おう、やつらとは、古いつきあいだ」

鬼は、重々しく首肯した。

「菅公さまが亡くなられたのは、随分昔のことですよね」

婉曲な言い回しで、沙翻は言った。

菅原道真が、九州大宰府に左遷され、その地で失意のまま客死したのは、百年以上前のことだ。

「それがどうした」

「そして、菅公さまが、雷神となって、都に崇られましたのは、その直後のことと、噂されております」

「その通りだ。鉄は熱いうちに打て、と言うからな」

菅公は懐かしそうな顔をした。

「清涼殿に落ちてやった時の、あいつらの顔といたら!」

「ということは、菅公さまは、怨霊となって、百年以上前に、この都にお戻りになったということになります。」

沙翻は、背筋がぞくぞくとした。

「そして、同行された迦具夜さまも。カワ姫は、すでに都におられたとお聞きしました。つまり、迦具夜姫もカワ姫も、少なくとも、百歳を越える、と……」

それなのにあの美貌。まあ、カワ姫は美女ではないが、少なくとも、若い女に見える。

人間離れた言動が垣間見られる彼らだが、本当に、人間ではないのではなからうか。

でも、だとしたら、何だというのだ？

そして、平安京に住む目的は？

「理屈を言う女は、嫌われるぞ」

菅公は、目をぎよろりとむきだした。

「しかし、ものを考える女は、嫌いではない。個人的には、な」

「私は、恐ろしいのです」

菅公に訴えながら、怨霊相手に、恐ろしいもないものだど、頭のどこかで考えていた。

梅婆さんに叱られ、頭を抱えていた菅公は、どこか憎めない。真の恐ろしさとは無縁の存在のように感じられた。

「蛭邸のみなさまは、奇人変人の方ばかりではございますが、情に厚い方たちとお見受け致しました。少なくとも、私は、そう信じしております」

信じなければ、やっていけない。

「それなのに、今、沙翻の心には、疑念がきざしております……」

沙翻は、堰を切ったように、胸のうちを吐き出し始めた。

カワ姫は、虫を飼っている。気味の悪い趣味だが、それは個人の

自由だ。

問題は、カワ姫が、虫が、人を操ることができると考えていることだ。

虫は、人の内臓に巣くって、人を操ることができる……カワ姫は、確かにそう言った。

実際そんなことができるか否かは別にして、虫が内臓に入り込むと考えるだけで、ぞっとする。それは、皮膚がかぶれるどころの比ではなからう。

迦具夜姫は、月の世界から来た天女だ。だから空を飛ぶ。

驚くべきことだが、そういう変人は、遠く唐や天竺にもいると聞く。

しかし、迦具夜姫は、人を不幸にしようと画策している。不幸に落としてやるのが、即ち、幸福になることと、考えているらしい。それって、あり？
現に、権少尉という人が、迦具夜姫に入れ込んだ拳句、肥後の国へ左遷されたと話していた。

一睡に至っては、生霊救済の為なら、自殺幫助から殺人までやりかねない。

蛭邸の人々について、沙醐には理解できない点が多すぎる。

「そもそも、あの方たちは、どうした方たちのなのですか？」

怨霊・菅公に、そう、問わずにはいられなかった。

「昔、この国には、あまたよるずの神々がいた。……他に言葉がないから、神と言うが、人を救ったり願いを叶えたりする存在では

なく、なんていうか……ただ、人とともに在り、ともに喜び、ともに涙するだけの存在だった。

人々の心に寄り添っていただけだ。

人々も、彼らを身近な存在と思いきすれ、何かを頼んだりしようなどということとは、夢にも思わなかった。

なにせ、失敗の多い、そそっかしい奴らばかりだったからな」

菅公は静かに語り始めた。

「しかし、天の神の子孫であると自称する人々がやってきて、この国を支配し始めると、昔からいた神々の存在は、ジャマで仕方がなかった。

新しく来た人々には彼らの神があったからな。イザナギ・イザナミとか、アマテラス・スサノオとか。

そこで、彼らは、文字を発明した。隣の大国の漢字を借りて、大急ぎで作り上げた文字だ。

なぜだかわかるか？

文字で記された神話は、後の世に伝わるからだ。後の世に伝わって、神話は、真実になる。

一方、この国にもといた神々は、もちろん、文字などという高尚なものは持っていなかった」

沙鞠は、驚いて目を見開いた。思いもかけない話が始まったからである。

「もといた神々……八百万の神々は、国中に追われ、迫害された。神々の迫害……それは、彼らを信じ、かばう人々を迫害することだ。追い詰め、殺戮し、そして命乞いする人々を、奴隷にしてしまおうと」

菅公はため息をついた。

「そのたくらみは成功した。」

『日本書紀』やら『万葉集』やらいう書が編まれ、いにしえの神々は、次第に人々からも忘れ去られ、死に絶えていった。

この国は、新しい神たち、その子孫の支配する国となった。

だが、一部、生き残った神たちもおったのじゃ」

「はい……」

「古い神は、歌い、踊る人々と一緒に都にやってくる。」

なぜなら、神とは、楽しい、憂いのない存在だからだ。純粹で、まるで子どものような、わけのわからん振る舞いをする。

……カワ姫は、東国の、子ども好きな虫の神だった。

ほれ、疍の虫、とか、腹の虫、とかいうだろう。体の虫が騒ぐのは、カワ姫のちよつとしたいたずらだ。

カワ姫は、常世神とこよみと名乗って、都にやってきた」

「迦具夜さまは……？」

「迦具夜は月からきた神だ。」

悪意のある女神で、関わった男どもを墮落させずにはおれない。

しかし、墮落させられた本人達は、本当に不幸だったのだろうか？

真に美しいものに身を捧げた一途な生き方は、それは、不幸せな人生だったと、切って捨てられるだけなのだろうか。

世の為人の為にならぬから、嘲られ蔑まれていいのか」

「……」

「迦具夜は、志多羅神したらと名乗って、やはり歌い踊る人々と共に、こ

の都へやってきた。西

国からの旅で、丁度、大宰府から京へ戻る途中だったわしと梅も、同行させてもらったのだ。な
んだか、とても楽しそうだったからな」

それから、百年以上の付き合いということになるのか。

「一睡は……一睡だけは、素性がはっきりしない。

だが、母親は、はっきりしている。眠り姫だ。この都で、ずっと、ぐーすか、眠っておった。

元々、忘れられた存在だったから、迫害されることもなかった。

そのまま眠り続け、つい先ごろ目を覚まし、どういうわけか、一睡を生んだ」

「はああ」

思わずため息が出た。

普通でないことはわかっていたが、まさか、「神さま」だったなんて。

「いや、だから、神さま、と言ってしまふのは、やはり抵抗があるな。

たとえば、沙彌、お前が凄く嬉しいことがあったとする……最近、何か嬉しいことはなかったか？」

「そうですね。この頃一番嬉しかったのは、ちょっと前のことになります。が、蛭邸に就職できたことでしょうか」

仕事が喜び？ 我ながらいやになった。

「ふむ。そういう時、古の神々は、いつの間にかそばにいて、祝い

酒を振舞ってもらい、赤飯などをご馳走になったりする。そのうち、大声で笑い、うかれて踊り出す」

「はあ」

「逆に何か悲しいこと……たとえば、親しい人が死んでしまったりした時……古い神々は、そっと近寄ってきて、肩を抱き、一緒に泣いたりする。

……だが、それだけだ。

決して、慰めたり助けたりしてはくれない」

どさくさに紛れて人にたかるだけの、ほとんど役立たずの神ではないか。

「そう、古の神々……八百万といわれるほどたくさんいた神々は、そろいもそろって役立たずだった。

ただ、役立たずであるがゆえに、人々に愛されていた」

「それで、その、古の神々であったカワ姫や迦具夜姫は、なぜまた都へやってきたのですか？」

滅ぼされた神々や、信仰してくれていたがゆえに、虐げられた人々の復讐……。

答を聞くのが怖かった。

「わしは、わしを陥れた奴らが、憎い。菅氏を封じ込め、天下を握った藤原氏が。

……自分のことは、どんな醜い感情でも語れる。

だが、蛭邸のやつら……古い神々のことは、よく語れぬ。

なにしろ、人と同じ尺度で推し量ることなどできないのだから」

怨霊にも語れないとは。

「ただひとつ言えることは、あやつらは、都の人々が、窮屈で生きづらいのが、不思議で、本意で、ならぬようだ。

古い神々の死や、滅ぼされた人々の犠牲の上に成り立った生活なのに」

古い神は、楽しみ之神。

だから、都の人々の生きづらさが、我慢ならない。

どうして、もっと楽しまないのか。歌って踊って、人生を謳歌しないのか。

「時に、沙彌」

菅公は、トラ模様の腰巻を探っている。また、何かを出そうとしているのだ。

「花山院からの言付けだ。このあいだ、冥府へ行ってきたからな」

「花山院……」

漂の君の父親だ。だらしなくて女垂らしで、大いに問題アリの……。

でも、花山院は、もう死んだ筈。

ああ、そうか。菅公は、死者の国へ行ったんだ。怨霊だから、まあ、里帰りのようなものか。

あちこち探って、菅公は、よく磨いた水晶の塊のような透き通った四角い塊を取り出した。

月の光にかざす。

すると沙翻の眼前に、古めかしい衣裳を着けた、年配の男の姿が浮かんだ。

男は、視線の定まらない顔つきで、口を開いた。

「わしは、漂の君の父親ではない。本当の父親は……」

ふうーっ、とかき消えた。

「え？ それだけ？」

「冥界でもまだ開発途上でな。これでも長い時間を収めることができるようになったんだ」

菅公は大事そうに澄んだ塊を仕舞い込んだ。

「漂の君の父親ではないって、それ、どういうこと？」

「花山院の伝言はこれだけだ。自分で考えるのだな」

菅公は、かはははは、と大声で笑った。

雷が唱和し、羅城門の辺りに、時ならぬ豪雨がしぶきはじめた。

蛭邸の、カワ姫と迦具夜の出自開示です。

皇極3（643）年、駿河国、富士川のほとりから、虫を祭る信仰が起きました。人々は歌い踊り、財を擲って、この虫……常世神……を崇めたということです。やがて騒ぎは都へと波及していきますが、あまりに騒ぎが大きくなったので、秦河勝^{はたのかわか}によって、成敗されてしまいます。

志多羅神もまた、民間信仰の神で、農業の神とも、疫病から守ってくれる神ともいわれています。シダラというのは、歌や踊りの際の言葉だったようです。「シダラ手を打つ、足を打つ……」と、歌い踊っていたのでしょうか。

ところで、さきほどまた、入力した分が、全部消えちゃったのですが（元原稿があるから、大丈夫だけど）、そういえば、菅公登場です。

本当に、これ、……。

紅の袴

その1

四、紅の袴

冬は早朝。
つとめて

そんな馬鹿なことを書き残したのは、どこの見栄っ張りか。

師走の明けきらぬ空の下、早起きのカワ姫の為に、火を起こした炭を運びながら、沙醐は震え上がった。

突き刺すような寒さとは、このことである。炭桶を持つ手がちぢかむ。今朝はまた、一段と寒い。

カワ姫は、ほの暗い灯の下で、その灯火に覆いかぶさるようにして、一心に書物を読んでいた。

「おや、読書ですか？ 姫さま」

話しかけながら沙醐は、古の神ともあるうお方に、このように気楽に声をかえていいものだろうかと、ふと、思った。

「うるさい」

朝食が間に合わないのか、乾飯をばりばりほお張りながら、カワ姫が応える。

周囲の虫かごは相変わらずである。ただ、越冬の為、虫そのものの姿は見えない。

冬は寒いが、ほっとする季節ではある。

結局、神とは言っても、仏のような、人間より上のものとは違うのだと、沙翻は思うことにしている。

自分達人間と、何ら変わることはない、血の通った存在だと。

「姫さま、いけませんね。もう半刻もしたら、ご飯はんたくになりますから」

「半刻も待てるか！」

カワ姫は、ぎよろりと目をむき出した。

「妾はもう、一刻も前から起きておるのじゃ」

それはまだ、夜中ではないか。

「姫さまは早起きですねえ。もっとゆっくり眠ってらっしゃればいいのに。私なぞ、もう、眠くて、眠くて、毎朝、寢床を離れるのが、死ぬほど辛うございます」

「お前は、眠っていると、な、ぴくりとも動かぬ。まるで、死んでいくようだ。眠りとは、死ぬようなものだ。お前は早く死にたいのか、沙翻」

「いえ、滅相もない」

沙翻は慌てて、手を打ち振った。

「姫さま。姫さま」

その時、格子の外から、幽かに呼ぶ声がした。

「あの声は……」

「メメ？」

二人は顔を見合わせた。

くどいようだが、季節は冬、非常識な子どもとはいえ、このような早朝からメメが顔を見せることは、滅多にない。

冬は、採りたいような虫がないから。

「どうした？」

不吉な予感を感じて、沙醐も、カワ姫に続いて階の上まで出てみた。

降り積もった雪の上に跪いた子どもの姿は、いつもの生意気な様子と違って、寄る辺なく、心細げに見えた。

「神泉苑の辺りで、犬に喰い散らかされた若い女の死骸が発見されたんだって」

沙醐は思わず口に手を当てた。若い女の身でありながら、なんとむごたらしい死に様であろう。

「女は、紅色の袴の残骸を身につけていた。丁度通りかかった太皇太后の郎党が、それは、太皇太后が、お付きの女房にあげたものだと言い出したんだ」

太皇太后……藤原彰子。権力者藤原道長の娘。寵妃定子を追い落とし、皇后の座を射止めた、故一条帝の妃……。

そして、その彼女に仕えていたのは……。

「まさか」

「うん」

沙醐は目の前が、真っ暗になった。

「ゆうべ、太皇太后邸に強盗が押し入って、近くにいた漂の君という女房をさらって逃げたって。紅色の袴は、その女房に与えられたものだったんだ。……漂の君って、こちらのお邸と縁ゆかりの女人だろ？」

カワ姫がゆっくりと振り返って、沙醐を見た。

その目には、怒りとも悲しみともつかぬものが溢れていた。

「うそ……」

沙醐はその場にしゃがみこんだ。

十二月六日、太皇太后邸に忍び込んだ賊たちは、家人に騒がれ、目ぼしいものは何も盗らずに逃走した。

その際、賊の一人が、運悪く近くにいた漂の君を、ひよいと担いで、拉致し去ったのだ。

賊の一人は、間もなく山城の国で捕まった。隆範たかのりという、僧形の男だった。

漂の君を連れ去ったのは、女房装束を奪い去るのが目的だったと、隆範は言っている。高価な衣裳は、高く売れる。

だが、それ以上のことは、硬く口をつぐんでいた。

一緒に忍び込んだ者たちの氏素性に関しては、特に。

漂の君の死骸は路上に転がされ、朝までの間に、犬たちがその肉を食らった。

後に残っていたのは、長い髪と、さんざんかじられて血にまみれた頭部、そして、赤い袴の残骸。

身元がわかったのは、それでも、幸いだったのだ。

幸い……この場に、なんと似つかわしくない言葉であろう。

「その隆範という男、私が尋問してあげる」

髪を後ろに束ね、美しい顔を白く浮き立たせた迦具夜姫が、不気味に笑った。

「仲間がいたのよ。その仲間の名を、絶対に吐かせる」

「迦具夜、やりすぎるな」

カワ姫が、警告するように言った。

「検非違使の手に落ちた以上、こちらが手を出す筋合いのものではない」

「こつちの素性がわからなければいいんですよ」

迦具夜は心もち、不快そうに言った。

「まかせて」

「私も」一緒に参ります」

漂の君の為に何かしてあげたくて、でもどうにもこつちにもそれは手遅れで、それでも何かせずにはいられない苛立ちを抱えながら、沙彌も立ち上がった。

「地上をいくの時間がかかる」

迦具夜は、ふわっとした薄衣のようなものを沙醐の頭から被せかけた。

ふわり。

沙醐の体が浮かぶ。

「これは……？」

「天の羽衣よ。沙醐、行くわよ」

「はい」

自分の体が空に浮かんでも、もはや、何の驚きも疑念もなかった。

紅の袴

その1（後書き）

うら若い姫君の残酷な死は、「今昔物語集」で読み、ショックを受けました。

その後、この事件の詳細を、『殴り合う貴族たち』（繁田信一著 2005年 柏書房）で知りました。

それ以外のエピソードは、完全に創作であり、文責は、せりももにあります。

紅の袴

その2 (前書き)

少し、残酷なシーンがあります。

「あなたはここで待っていて」

検非違使の詰め所上空まで来ると、迦具夜は言った。

「ですが、姫さま」

「ほら、あそこ、あの、建物ね、あそこに下手人は囚われているの。見張りをちよつとたぶらかして外へ出してから、あの屋根の真ん中に穴を開けてあげる。そしたら、上から見物できるでしょ」

「姫さまが危険すぎます」

「私は、ほら」

迦具夜の姿が、ふつ、と消えた。

ああ、そうだった。迦具夜姫は、自在に姿をかき消すことができるのだ。

「じゃ、見てらっしゃい」

迦具夜姫の気配が消えた。

暫くすると、看守が、建物から出てきた。

何やら、後ろ髪でも引かれるような様子で、中を覗き込んでいる。

「では、信乃大路の廃寺で。待っておるぞ。きっとだぞ
未練がましい声が聞こえた。

看守は建物から出ると、足早に歩き去っていく。

まだ屋根があるので、迦具夜がどんな手管を用いたのか定かではないが、うまく偽の逢引の約束を取り付け、看守を外へと追い出し

たのдарろう。

それにしても、出会って即、逢瀬の約束とは、凄い早業である。

間もなく、空気が揺れる気配があつて、静かな竜巻のようなものが、吹き上がってきた。

音もなく、何の騒ぎも起こらない。

風が静まると、屋根の一部が、嘘のように丸く切り取られていた。沙汰は、恐る恐る、屋根に開いた穴の上空まで行って覗き込んだ。

中に、一人の男の姿が見える。

なるほど、墨染めの衣を着け、頭も丸めている。

よもや盗賊の成れの果てとは、言われなければわからない。

ピシッ。

何も無い空中から、いきなりムチが舞った。柳の若枝のようによくしなるムチだ。

「ひっ」

短い悲鳴が聞こえた。

ピシッ。

再び、鋭く空気を裂く音。

繰り返し繰り返し繰り返される、しなやかな一撃。

僧衣の男がのけぞった。

「名前は知らない。先月、市で知り合った……」
掠れた声を絞り出す。

ピシリッ。

一際大きくしなるムチ。

男はぜいぜいと息を吐き、まるで死んだように、ぐったりと打ち伏した。

すると、部屋の隅からするすると縄が伸びてきて、あつというまに、男の体を、台の上にくくりつけた。

男の口に、金色に輝く漏斗が差し込まれる。

目に見えない空中から水が湧き出し、次から次へと、漏斗に注ぎ込まれる。

男が息を吹き返し、激しく咳き込んだ。

情け深くも、口から漏斗が外された。

「ダメだ。あのお方のことを言ったら、俺は、殺されてしまう……」

容赦なく、再び漏斗が口に突っ込まれ、光る水が、しぶきを上げて注ぎ込まれていく。

男の顔が、激しく左右に打ち振られた。

眦が裂けそうに広がった。

再び漏斗が外された。

その頬が、激しく鳴った。

右の頬。左の頬。

ぴしゃり！　ぴしゃり！

肉を叩く、くぐもった音。

激しい殴打が加えられている。

「わかった……。許してくれ……。藤原の、道雅さまだ。三位・道雅公。あの方の仰せで、女を拉致した。けれど、誓ってそれだけだ。俺は、殺してはいない……」

顎が鳴り、目鼻の造作が激しく上に寄った。

口から血が噴出し、男は悶絶した。

……。

「ああ、楽しかった」

何事も無かったかのように舞い上がってきた迦具夜姫は、涼しい顔で言った。

「黒幕は、荒三位あらいみだったのでね」

「確かにあの男ならやりかねないわ。あなた、あの男のこと、知ってるの？」

「先だつての宴に、来てましたよ」

沙醐は、一睡との間で起こったことを、手短かに話した。

「一睡の向こう見ずにも困ったものね。それにしても、そんな男を招待するとは、お父さまの人を見る目のなさときたら……。男なら誰でもいいんだから」

それは姫自身にもいえるのではないかと、沙醐は思ったが、黙っていた。

空高く舞い上がったまま迦具夜姫の不興を買ったら、身の安全は、保障の限りでない。

「これからどうします?」

「もちろん、道雅邸へ直行よ」

「私は一度、蛭邸へと帰った方がいいような気がします」

「なんでえー」

迦具夜姫は不服気だ。

「カワ姫や一睡さまも、主犯の荒三位の拷問に一枚噛みたいと思いになるんじゃないやありませんか?」

「拷問?」

迦具夜姫が聞きとがめた。

「あなた、さっきのアレ、拷問だと思ってるの?」

拷問以外のなんだというのだ?

「あいつはあれで、結構ヨロコんでたわよ。僧衣なんてつけちゃ

って、さ。仏教関係のヤツには、ヘンタイさんが多いのよ」

仏や僧に、含むところがありそうだ。

「先ごろも月よりの使者の方がおっしゃっておられましたが、姫さまは、仏とライバルの関係におありだとか」

「そうよ。人類救済の手段において、ね。私への絶対的な服従か、仏への帰依か。それを言うなら、神道も景教も、拝火教も、みんなライバル」

「……よくわかりませんが。それにしても、かの男、私には、死ぬほど苦しんでいたように見えました」

「私にブタして、ヨロコばない男が、この世に存在するわけ、ないじゃない」

「姫さまは姿を消しておられたわけですから……」

「ああ、そうか。次からは、姿を現してやるわ。出血大サービスよ」

「はあ。しかし、あれだけ痛い目に遭わされて、喜ぶなどは……」

「あの悶え苦しむさまが、ヨロコビなのよ。……あら、どうしたの？」

「深遠な謎でございます」

迦具夜も迦具夜で、考え込んだ。

「沙鞠の言うことにも一理あるわね。特に一睡は、血を見るのが好きだから……漂の君にも懐いていたし。ここは、あのチビに、ハナを持たせてあげようかな」

「あの、姫さま。私、ちょっと立ち寄りたいたい所がございまして」「この辺に、いい男でもいるの？」

迦具夜の目の色が変わった。

「いえ、男ではございませぬ。女でございます。それも、かなり年配の」

「なんだ」

迦具夜姫は、あっさり興味を失った。

「つきましては、この羽衣、もう少しお貸し頂けないでしょうか」「いいわよ。じゃ、蛭邸で待ってるわ。あなたも、荒三位をムチ打ちたいでしょうか」

この人と完全に会話が噛み合うのは、永遠に不可能ではなからうか。

そんな思いを感じながら、空中で、姫と別れた。

紅の袴

その2（後書き）

荒ぶる三位（三位は、位を表します）、藤原通雅は、藤原伊周これちかの子で、中宮定子は、叔母に当たります。しかし、伊周が政治の実権を失い、また、定子が亡くなると、後ろ盾のないみじめな境遇となりました。伊周を追い落とした黒幕は、もちろん、伊周の叔父、道長です。

伊周が追い落とされたきっかけとなったのは、例の、花山天皇（出家して、花山院）が、からんでいます。

花山院と伊周は、同じ家に住む姉妹の元に通っていたのですが、院が自分の思い人の所に忍び込んだと勘違いした伊周が、院に矢を放ったのが、没落のきっかけでした。矢は、袖を射ただけだったので、一時は天皇だった人ですからね……。

思えば、伊周の祖父・道長の父、兼家は、19歳の花山天皇をたばかって強引に出家させ、長兄の伊尹から政権を奪いました。この兼家の子と孫の世代で、同じ花山院をダシにして争いが起こり、兼家と同じく、殆ど日の目を見ないと思われていた、末の方の息子、道長が、長兄の血筋から、政権を奪取したのです。

紅の袴

その3

「漂の君の所に、出入りしていた男がいたそうだよ」

沙醐が帰り着くと、前後して、検非違使の詰め所へ偵察に行っていたイナゴマロが報告に来た。

「『アラザンミ』という貴公子だそうだよ。でも、漂の君はそれを、とてもとても嫌がって、逃げてばかりいたそうだ」

「荒三位！」

沙醐と迦具夜姫は、顔を見合わせた。

「なんだなんだ、二人とも。知り合いか？」

怪訝そうにカワ姫が尋ねる。

「迦具夜のお見合いパーティーに来ていたヤツだ！」

一睡がすっぱ抜き、カワ姫がじろりと迦具夜を睨んだ。

「とんだ悪人をこの家に入れよって」

「一睡が切り損ねた、極悪非道の、生霊泣かせよね」

迦具夜が暴露し返す。

「ん？ 何の話だ？」

そういえば、カワ姫は、あの晩、メメたちの所に泊まりに行っていて、留守だった。

迦具夜と一睡が反目しあっているの、仕方なく沙醐は、さきほど迦具夜にしたのと、同じ話を、また繰り返した。

「一睡！」

カワ姫の雷が落ちた。

「この家でそのような真似をして……沙醐にもしものことがあったら、どうする！」

「いえ、私は大丈夫ですのぞ」

つい、習慣的に、沙醐は一睡をかばった。

「一ツ目のせいだ。あいつが、本物の太刀をマロに寄越さないから……」

「本物の太刀であっても、お前に人を切り殺すのは難しいわ。血糊や脂で、手がつるつる滑るんだぞ。力もいるし、刃こぼれせずに、人を切ることなど、できるものか」

何だか、微妙に論点がズれている気がした。

「畏れながらカワ姫、技量の問題ではなく、人を切るべきではないと、お叱りになるべきでは……」

「馬鹿にするな。刃こぼれなんか、させるものかつ！」

「そうよそうよ、カワの言う通りよ。虫取り網でさえ、満足に扱うことができないのに、太刀だなんて、千年、早いわ」

「マロのタモさばきを馬鹿にしたな！ それに、あれは、虫取り網ではない、魂網タマアミだ！」

「ええい、黙れ！ 沙醐を見よ。仲の良かった漂の君に死なれて、あのように、気落ちしているではないか。沙醐の為にも、何かしてやるつという気にはならぬのか」

「なってるよ！」

すかさず一睡ががなりたてた。

「ねえ、沙醐。あなた、漂の君と仲が良かったんでしょ？ 荒三位の話は聞いていなかったの？」
ふと思いついたように、迦具夜が問う。

「いいえ。藤原道雅さまのお名前が出たことなど一度も……」
「藤原道雅！ 道雅、と申したか！」

カワ姫は、色をなした。
「しかとさようか？」

「はい……藤原道雅公、通称、荒ぶる三位、荒三位……」
「藤原道雅とな。伊周の息子、道隆の孫……高階たかしな貴子の孫……」

カワ姫は大きく息を吸い込んだ。
「高階！ 伊勢ゆかりの高階じゃ！」

「えええ、そうだったの！？」
迦具夜が唱和する。

「ちよっとちよっとおー、年輩の二人で盛り上がったってさあー、若いマロらには、さっぱりわけがわかんないよあー」
一睡が不平をもらした。

沙醐も、情報を持って来たイナゴマロも、目を白黒させるばかりである。

「伊勢神宮は……皇室ゆかりの神々を祭っている」
そう言うカワ姫の声は、救いがたいほど冷たかった。

迦具夜も、いつも口元に浮かべている、からかうような陽気な微笑を消している。

「伊勢神宮」と聞いた途端、一睡もすうーっ、と真顔になった。

皇室ゆかりの神々……。

それはまさしく、元々この国にいた古い神々を追いたて、滅亡においやった「新しい神々」ではないか。

凍りついたような空気が流れる。

沙醐は、首筋にざわりとするものを感じた。

しかし、二人の姫たちの冷やかさは、一瞬のことだった。

「『伊勢物語』を知っているか？」

カワ姫が切り出したとき、辺りの空気には、いつもの穏やかさが戻っていた。

『伊勢物語』。

たしか、ケタ外れに女好きの男が、とつかえひつかえ、女を口説き落としていく物語ではなかったか？

「教養のないヤツらじゃのう」

カワ姫は、ため息をついた。

「伊勢物語最大の山場で、タイトルの由来となった出来事は、伊勢神宮の斎姫、恬子内親王との悲恋物語じゃ」

「というより、ずばり、二人の濡れ場語りね」

迦具夜が訂正する。

「あのう……」

沙翻は恐る恐る尋ねた。

「伊勢の斎姫と叫びたら……異性との交際は許されていなかったのでは？」

伊勢神宮で神に仕える立場の姫君は、姉妹、実娘など、天皇と近い皇族が選ばれる。

斎姫と呼ばれるその立場にあつて、恋愛はご法度なのだ。

「そこはそれ、相手があつた、在原業平だから……」

「なりひらあゝ」

意外な方角から、うなり声が聞こえた。

「わつ、梅ババア！」

それまで部屋の隅でおとなしく侍^{はべ}っていたイナゴマロが、着物の裾をめくり上げ、脱兎のごとく走り去つていった。

部屋の隅の暗がりには、梅屋敷の梅、菅公を慕つて、京から大宰府へ飛び、大宰府から京へと付き従つてもどつてきた梅が、ひっそりと、しぼんだ様子で立っていた。

「なんだ、梅、案内も乞わず」

「さてもさても、失礼な奴らじゃ。案内なら乞うた。誰も出てこなかったぞ」

「座敷童子のヤツ、さぼつておるな」

苦々しげに、カワ姫がつぶやいた。

そういえば、沙翻が始めて来た日に、百合根の局まで案内してく

れた少女がいた。

それ以降、見かけていないが、あれは、座敷童子だったのか。

「それより、その忌まわしい名を口にするな」

「在原業平」

「ええい、忌々しい」

梅は齒軋りをした。

「ああ、確か、菅公の無二の親友だったな！ 生前の」

カワ姫が膝を打った。

「あの男さえいなかったら……。あの男のお陰で、ご主人さまは……。ご主人さまは、女好きになってしまわれて……。よよとばかりに、梅は泣き崩れた。

一睡が咳払いした。

「で、その在原業平と齋姫ができちゃって、どうなったの？」

「できちゃって、なんて、子どもが言うもんじゃありません」

沙醐は慌ててたしなめた。

しかし、沙醐だって、続きが気になる。

「うむ。一夜限りのことだったのだが、恬子内親王には子ができた。しかし、未婚の内親王のこととて、具合が悪い。そこでその子を引き取ったのが、当時伊勢神宮の禰宜ねいだった高階氏。高階貴子は、その末裔あたる」

「ということとは、高階高子の孫の、荒三位もまた、伊勢神宮の齋姫の子孫ってわけ」

したり顔で、迦具夜姫が付け足す。

「そう、同時に荒三位は、憎つき在原業平の、子孫、ということじゃ」

苦いものを口に含んだように、梅が言い捨てた。

「時に、梅、おぬし、何しに来た？」

「何しに来たとは、心外な。あちは、道真さまのメイド、道真さまの御用でまかりこしたに決まっておる」

「メイド、というのには、年が行き過ぎてはいないか？」

「メイドという職業に、年齢制限はない！」

断固として梅は言い張った。

「それで、菅公からの言伝てとは？」

「荒三位を手荒く扱うのはやめてくれ。大切な親友の子孫だから」

見るからに不本意そうに、梅は、しぶしぶ口にした。

「ほほう。これほどの罪人とがびとを、ほほう」

カワ姫が顎をしゃくるようにして、ことさらに大袈裟に言う。

「あちだって、ご主人さまを悪の道へ導いた業平の子孫など、できれば根絶やしにしたいわい」

「それは不可能だろう。業平の子孫は、国中にはびこっておるだろうからな」

すまし顔で、カワ姫が言う。

「へえ、業平って人、そんなにあっちこっちに女がいたんだ。尊敬

しちゃうな」

「一睡さま！」

「なぜ菅公は、自分で来ないの？」

あまり興味がなさそうに迦具夜姫が聞いた。

「道真さまは、物忌み中じゃ」

「へえ、怨霊が、物忌み？」

「つ、月のサワリじゃ」

「菅公つて、女だったっけ？ つつーか、死んでるでしょ、既に」
「うっ」

「閉じ込められてんだよ、梅屋敷に」

けるっ、として、一睡が言った。

「今朝、見てきた」

「また、女に手を出したのじゃ」

忌々しげに、梅は言い捨てた。

「今度は、宇治の橋姫じゃと。頭に鉄輪かなわを巻いたおかしな女なのに、
なぜ……」

「菅公の悪趣味は、今にはじまったことじゃないじゃないの」
慰めるように、迦具夜が言った。

梅は、手放して泣き出した。

「でも、どうする？ このままでいいの？」

梅の泣き声の合間を縫って、迦具夜が問う。

「いいわけないよ……」

一睡が威勢よく応えた。

「何が何でも、荒三位に天誅を加えなければ」

「そうね。ムチでおしおきよ」

「じゃが……」

考え込みながら、カワ姫が言う。

「その隆範じゅうはんとかいう盗賊の言うことを鵜呑みにして、いいものだろうか。藤原道雅といえは、落ちたりといえども、藤の家の貴公子。女に不自由はしておらぬだろうに。それに、噂になるほど追い回していた女を殺すほど、アホだろうか」

「自分が犯人だと言ってるようなものですものね」

さすがカワ姫と、その洞察力に感心しながら、沙醐は頷いた。

「一度、本人に会って、しかとその本音を聞いてみたいものだ」

「手荒な真似はしてはいかんぞ。ご主人さまからのお達しだ」
梅が言った。

だが、ここに一睡と迦具夜がいる限り、それは無理だろう。

「生き須霊……」

ふと、沙醐はつぶやいた。

その声は、思いがけぬほど響き、全員の目が、沙醐に集まった。
沙醐は動揺した。

「いえ、もし、本当に、道雅さまが漂の君のことを思っていたら……
…そして、その死に、無関係だとしたら、きっと、心がここになくなるほど辛く悲しい思いをしていらっしやるのではないでしょううか

……」

「甘いわよ、沙醐。スピアはいくらでもいるわ」

「そうだよ。人を生霊に仕立てるほどの男だぜ」

「そ、そうですよね……」

言い立てられて、沙醐は、慌てて撤回する。

「いや、待てよ。案外いい考えかも……」

カワ姫が、ぱつと顔を上げた。

「虫を、送ろう。人生が辛くて、生霊になって、さ迷わねばいられなくなるような……」

「なるほど！ そしたら、マロが捕まえる！」

「ダメ」

迦具夜とカワ姫、ついでに沙醐も同時に言った。

「な、なんでだよ……」

さすがに年長の女三人にダメ出しをされて、一睡も引く。

「だって、お前は、生霊の一部をちぎってくるだけだから」

「そうよ、そうよ。梅、菅公を貸して」

「ご主人さまは、謹慎中……」

「梅林に、虫を放つぞ！」

カワ姫がすごんだ。

「わ、わかった。そ、その代わりに、きつと、生霊狩りだけだぞ。

一睡と、そうだ、沙醐も伴につけるのじゃ。間違っても、女の元にしのでいかぬように」

「まっかしといてっ！」

とりあえず生霊狩りに行けるとわかった一睡が、二人分、即諾した。

沙鞠に辞退する暇はなかった。

辞退する気もなかった。

……漂の君の死。その、真実を知りたかった。

裁かれるべき者が、裁かれねばならぬ。

紅の袴

その3（後書き）

高階恬子が、斎姫であったのは、史実ですし、荒三位・藤原通雅が、その直系子孫にあたるのも、系譜の通りです。

ただ、恬子内親王と在原業平との件は、そういう説もあるというだけに留まります。

「伊勢物語」69段を、事実とみる考え方ですね。

物語中の菅公の新しい浮気相手（？）、宇治の橋姫について補足を。

男女関係のもつれから嫉妬に狂った橋姫は、相手の女に祟る為（女はなぜか、男ではなく、新しい女に害をなすのです）、鬼になることを希いました。姫を哀れと思った、貴船大明神は、鬼になる為の、ハウツーを伝授しました。

姫は、神のアドバイスに従い、髪を角のように結び、顔と全身を真っ赤にぬりたくりました。そして、鉄輪（鉄の輪に、3本の足がついたもの）の足に、松明を括り付けて逆さにしたものを頭に被り、ついでに口にも松明をくわえ、夜な夜な町を徘徊しました。頭に懐中電灯を差した、「八つ墓村」の殺人鬼のようです。

その姿を見た人は、あまりの怖さにショック死したそうです。怖いです。せりもものホラーなんか、メじゃありません。

糺の森で

その1(前書き)

やや、下品な描写があります。

糺の森で

その1

五、糺ただすの森で

「行つたぞ、沙醐！ そつちだ！」

糺の森に、蛮声が走る。

沙醐は、網を、きつ、と構えた。

ここは、辛い思いを抱えた人の魂が、生霊となって漂う空間。
この世とあの世の境。中有の闇。

荒三位が、漂の君の死に、どれだけ関係していたかは、まだ、わからない。

また、今までに、どれほどの人から恨みを受けた身かも、問わな

い。
ただ、逃がすわけにはいかなかった。

ほんの僅かでも、ヒントが欲しかった。

なぜ、漂の君は死なねばならなかったのか。

その答えの、とっかかりなりとも、引き出さねばならない。

逃がすものか。

「行つたぞ。その先は、袋小路だ。任せたぞ、沙醐」

木々の枝の向こうに、怨霊の鬼火が青白く燃えている。

幽かな風圧が、飛んでくるモノがあることを教えた。

網は、中腰で構えた位置だ。

竹の柄を持つ両手が、汗でじつとりと湿っている。

逃がさない。

ぼっん！ ぼっん！

飛んでくるそれは……。

え？

裸の、男？

生霊つて、着物、着てなかったっけ？ いや、漂の君は、ちゃんと着ていた。

たくさんの疑問やら反論やらが、頭の中をうずまいている間に、それは、ぐんぐん、ぐんぐん、迫りくる。

そのまま、狙い済ましたように、網に飛び込んだ。勢い余って網を突き破り、大変な衝撃に、沙醐は尻餅をついた。

そのまま、上半身も、仰向けに倒れる。

……本当は、口から飲ませる虫が、一番効果があるんだ。でも、警備が厳重で、飲ませることができないというなら、仕方がない、羽虫を使っしかないな。今ひとつ、使い勝手の悪い虫じゃが。

歯切れの悪い、カワ姫の言葉が蘇る。

魂が、体に留まっていることを、辛くさせる虫。
使い勝手が悪いって、魂が着物を着ていないということ？

き、聞いてません。そんなこと。

「おお、沙醐、よくやった」

鬼火が辺りをぱつと照らす。

「沙醐？ 沙醐？」

一睡の声。

「げ。気絶しちゃってる」

「打ったのは尻だけだろ。気絶する道理がない」

誰かの手が、顔面を撫でる、さわさわした気配。

沙醐はうつすらと目を見開いた。

菅公と一睡が、雁首並べて覗き込んでいる。

そして体の上の、この、気配。

「ぎゃーっ」

我ながら、この世のものとも思われぬ悲鳴があふれた。

「沙醐、お前」

菅公が言った。にやにやしている。

笑う怨霊。

「もしかして、キムスメか」

「キムスメって、何？」

すかさず一睡が聞いた。

羽虫を使うもう一つの弱点は、魂が外にいる時間が短いこと。

カワ姫は、その点を繰り返し強調した。

聞き出すことは、早めに。魂は、あっという間に、結界をもすり抜け、体に戻ってしまう。

「わしの結界をすりぬけることなど、できるものか」

菅公は、鼻で笑っていたが。

「しかし、見事なまでの生霊だな。生きた体と、少しも変わらなように見える。カワの虫の威力は、大したものだ」

生霊は、ふてくされたような顔をして、あぐらをかいていた。

その腰には、一睡の上着が巻きつけてある。

腰巻に使用されるのは厭だと抵抗した一睡だったが、最終的には沙翻の為だから、と、菅公が、恩きせがましく言って、上着を差し出させた。

「やっぱり、網で取ってるうちは、ダメなのかな。沙醐みたいに、全身で抱きとめるのでなくちゃ」

沙醐は、自分の体についた匂いが気になって、体中を嗅いでいた。なんだか、生臭い匂いがする。

「だから厭なんだよ。素手で捕るの」

すまして一睡が言った。

「さて」

菅公の怨霊が、荒三位の生霊と向き直る。

「お前が、漂の君をさらわせたのであろう」

金棒を、地面に、ずん、と突き立てる。

「そして、殺したのだ」

並の人間なら、たとえ無実であっても、たやすく己の罪を認めてしまふような、恐ろしい声である。

しかし、荒三位の生霊は、断固として首を横に振った。

「嘘をつけ。お前が、漂の君を追い回していたことは、屋敷の者なら、皆、知っている。しかし、漂の君は、お前を避けて逃げ回っていた。可愛さ余って憎さ百倍、かなわぬ恋の腹いせに、さらって殺したのであろう」

生霊は、傲然と顔を持ち上げ、菅公の亡霊をにらみつけた。
貴公子とは名ばかりの、ふてぶてしさである。

「隆範は、吐いたよ。その程度の男を、部下とすべきではないね。
え？ 何か言ったらどう？」

あざけるように、一睡が言った。

生霊の顔つきが変わった。

と、その体が一条の光となり、横とびに飛んだ。
結界が発光し、びりりと震えた。

「おお、危ない。逃げられるところだった」

目を傷めそうなほど強い光が治まると、荒三位の生霊は、哀れな
様子で、結界に限られた僅かなスペースに倒れていた。

「こいつ、結界に、体当たりをしおった。下手をすると、死ぬぞ」

「どうせ死ぬのなら、魂じゃなくて、体の方に傷をつけて、出血多
量で死なせたい」

一睡が希望を述べた。

「あの、」

沙翻が間に入った。

「私も、話していいでしょうか」

「おお、沙翫、裸の男に慣れたか？　こんなの、大したことはないぞ、何しろ、実体がないのだからな」

そう言うあんただって、怨霊ではないか。

沙翫は菅公を無視して、結界の前に立った。

「三位さま、いえ、藤原道雅さま。あなたと亡くなられた漂の君は、ご兄妹でいらっしやいますね」

沈黙が流れた。

糺の森で

その1（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。
いよいよ、最終章に入りました。

隆範りゅうはんの拷問を終えて迦具夜姫と別れた後、沙翻は、兵部ひょうぶの家を訪ねた。

兵部は、漂の君の育ての親となった、女房だ。

沙翻は、ずっと、娘に向かって、お前は一人で生きてゆけ、と言いつ放った漂の君の実母のことが気になっていた。

家庭が複雑なことは、わかる。

花山院という男を挟んで、実の娘と恋敵の関係になり、漂の君を産んだ。

とても恋愛を讚える気になど、なれないであろう。

しかし、だからといって、自分の娘に、一人で生きてゆけ、などと言いつ渡すものだろうか。

沙翻の耳には、「生みの母をほとんど知らない。多分」と漂の君が言いつた、その、「多分」という言葉が、繰り返し繰り返し、蘇つた。

自分は、母のことは、わからないつもりでいるだけでも、本当は、心の奥底で、全て、理解しているのだ。

……多分。

そういう意味ではなだろうか。

しかし、いかに娘といえども、別の人間である母親のことを、理解などできるのだろうか。

もし、漂の君が、母親のことを理解していると考えていたとした

ら、それは、自分が母親の懊悩の原因であると、そう、思い込んでしまっているということではあるまいか。

自分が、親の苦しみとなる。

そんな風に思うことが、どれほど辛く、切ないことか。

だから、漂の君は、母という人を、知らないことにしたのだ。

私は、親さまにさえ愛されたことがない……。

漂の君がそういう「親さま」とは、父・花山院ではなく、母・中務つかさのことだったのではあるまいか。

育ての親・兵部は、実母・中務には、娘・漂の君への愛情が、全くなかったことを認めた。

むしろ、憎んでさえいたと言う。それは、公然の事実だから、隠すまでもないという態度だった。

兵部の家で場所を聞き、沙翻がそのまま、右京にある中務の家へ行けたのは、迦具夜が貸してくれた羽衣のおかげである。

市が立つ右京は活気はあったが、貴族の邸の多い左京に比べて、物騒である点は否めない。

中務の家は、かつて天皇であった人の愛人だった者が住む家とは思えないほど、寂しく荒れ果てていた。

折悪しく外に出ていた中務は、空から舞い降りた沙翻を見て、度肝を抜かれた。

その上、すっかり過去の人となっていた、花山院の名を聞かされ、恐慌にかられた。

それが、冥界の亡霊の話なのだから、尚更である。

沙醐は、花山院の亡霊が、漂の君は自分の子ではないと言ったことを話した。

そして、漂の君の死を知らせた。

中務は怯え、錯乱した。

彼女が怯えたのは、空飛ぶ沙醐に対してでも、花山院の亡霊に対してでもなかった。

彼女が恐怖のあまり狂ったようになったのは、生まれてから一片の愛情も注いだことのなかった娘・漂の君に対して、だった。

……。

中務が、花山院を裏切ったのは、暴力ゆえだった。

相手は、藤原伊周。（これちか）

荒三位・道雅の父親である。

藤原中関白家の長男、伊周と花山院の、女を巡る確執は、これが始めてではない。

女が原因で、伊周は、花山院に、弓を引いたことさえある。

最もこれは、花山院と伊周が、姉と妹の所へそれぞれ通っていただけのことで、伊周の早とちりだったらしいが。

しかし、この事件がきっかけで、伊周は共謀の弟・隆家とともに、一時、京の都を追われ、結果的に、藤原中関白家は、政治の表舞台

から消え去ることになる。

罪を減じられ都に戻った伊周が、花山院の女・中務に手を出したのは、そういう過去からの因縁によるのだろうか。

女を巡る、伊周との二度目の遭遇に、花山院は、表立って騒ぐような真似はしなかった。

黙って、中務の元から去っていった。

中務は、愛していた院に、捨てられた。

彼女自身には、何の罪もなかったというのに。

そして、藤原伊周との間に生まれた漂の君は、里子に出された。

漂の君は、生まれながらに、罪の子だった。

その出生がそもそも罪だった上に、母から愛人を奪った点でも、罪だった。

花山院は、こともあろうに、中務の上の娘、漂の君の姉にあたる女の元へと去っていったのだ。

……

中務は、それだけのことを話し終わると、狂ったように泣き始めた。

その泣き声の合間合間に、漂の君への呪詛が混じっているのを、沙翫は聞いた。

完全な狂女だった。

沙翫は、黙ってその場を立ち去った。

母の愛は、最後まで、語られなかった。娘の死を悼む言葉さえ、その口から漏れることはなかった。それが、なにより、痛ましかった。

「そうだ」

それまで一言も口をきかなかった荒三位・藤原道雅が、ようやく口を開いた。

「私と漂は、同じ父親の血を引く、兄妹にあたる」

「伊勢ゆかりの者どもは、結束が固い。伊周と妹・定子、弟・隆家。その後を継ぐのが、又しら、伊周の子ども達なのだ」
菅公がゆっくりと言った。

「それにしても、沙醐、よく調べたな」

「黙っているなんて、ひどいよ」
一睡が不平を並べた。

「お許してください。私にも、それがどういふことなのか、わからなかったのです。もし、今回のことと何の関係もないのなら、亡くなった漂の君の一身上の事を、しゃべりまくるのは慎まねば、と思っただのです」

沙醐は正直に謝罪した。

「まあ、それは、いいよ。でも、それでも、荒三位、あんたへの疑いは晴れたわけじゃない」

一睡が、ぐい、と荒三位を睨む。

「私は、漂が、太皇太后の元で働いているのが、気の毒でならなかったのだ。気の毒で、そして不快で、仕方がなかった」
全てを諦めたように、荒三位が言った。その様は、無念そうでもあり、悲しげでもあった。

「そうか。太皇太后・彰子の父、道長は、お前の父、伊周を追い落とした、憎つくき大叔父だ。それに、彰子自身は、お前の死んだ叔母・中宮定子のライバルだった。お前は、身内の、それも腹違いの妹が、自分たちの血族を表舞台から蹴散らした者……道長とその娘、彰子……の元で働くのが、我慢ならなかったわけだ」

「だから殺したの？」

「自分を誘うように、一睡が尋ねた。」

「妹が、太皇太后の元で働き続けたから？ 自分の思い通りにならないから？」

「違う。私は、漂を殺してなぞいない」

「なら、なぜ、漂の君の死体が、都の大路で発見されたりしたの！
しかも、犬に喰われて……」

犬に喰われて……そう聞くと、荒三位の生霊は、静かにすすり泣き始めた。

「私が兄であると名乗ると、あの子は、それなり二度と、私と会おうとしなくなった。私は、女房づとめをやめて、わが邸へ来るように申しやった。一族の仇の家で働く必要など、ないではないか。だが、あの子は、その申し出を断ってきた。太皇太后を裏切ることはできない、と言って……」

沙醐は、太皇太后彰子を深く敬っていた、漂の君のことを思い出した。都の心ない噂話を匂わせても、頑として、太皇太后・彰子を擁護していた。

「そこで、隆範に、あの子をさらってくるよう、命じたのだ。わが血の流れを汲む者が、あの憎き道長の、娘の下で働かされているのは、我慢がならなかった。しかし、あの子は、途中で逃げ出しました。あの子があんまり暴れるので、乱れた上着を脱がせていたという話は、後から聞いた。しかし、まさか、そのままの姿で逃げてしまうとは……隆範にも、仲間の者にも、予想もつかなかったそうだ」

暗い夜のこと、逃げられたことに気づいて後を追ったのだが、闇にまみれて取り逃がしてしまったのだという。

菅公も一睡も、しばらく無言だった。

やがて、改まった口調で、一睡が言った。

「伊勢にゆかりの者の内紛など、マロラの知ったことではない。しかるに、ここは、糺の森。この世の、現在・過去・未来、全てとつながっていると知っているか」

「ごうっ、と、大きな風が、吹き渡る。

「過去を現出させる。嘘はないか」

菅公は、黙ったまま、腕を組んで仁王立ちしている。

「覚悟はよいな」

荒三位が、静かにうなずいた。

「ごうっ、と、再び強い風が吹き渡った。木々の葉が舞い落ち、あたり一面に渦巻いた。

「風が鼻を、口を塞ぎ、息ができない。

凄まじい突風に、全てが舞い飛んだ気がした。

気がつくくと、夜の都が見えた。

皓皓と月に照らされ、白く輝く大路。
木枯らしが小さく吹き渡る。

酷寒の月下に、下着姿の女が、一人。
赤い袴をはいている。

ふらふらと、心ここにあらずという風に歩いている。
まるで酔っ払いのように、心もとない。
右に左に、体が揺れる。

女の姿が、ふっと消えた。

しばらくして、道端の溝から、白い手が、ぬっと現れる。

渾身の力をこめて、体を持ち上げるのが見える。

ずぶぬれの女が、全身から滴をしたたらせて、溝から這い上がってきた。

冷たい風が吹き渡る。

女はしばらく、路に倒れ伏せていた。

盗賊はびこる夜の大路、人は、一人も通らない。

女が動いた。

何度か身じろぎをして、やっとのことで立ち上がる。

髪が、凍えて固まっている。

こおりつくほどの寒さなのだ。

数歩歩き、そこにあつたお邸の門を叩く。

人の気配はあるが、返事はない。

門の内から、息を殺して、外の様子をうかがっている。

女はふらふらとよろめき、真っ直ぐ立っていることができない。

扉の向こうの、人の気配が消えた。

みすばらしい下着姿に、扉を開けるまでもないと判断したようだ。

女は再び歩き出し、向かいの家の門を叩く。

こちらの家も、反応はない。

しかし、門の扉の向こうから、短い、人の呼吸が、はっはっ、と聞こえる。

中の一人が、奥の主人の元へ駆けて行く。

再び走って戻ってきた彼は、静かに首を横に振る。

憐れな女を、門の内側に入れる許しは、出なかった。

扉は開かれない。

次の家。

そのまた、次の家。

どの家の門も、開くことはない。

暫くの間、じっと、女の様子をうかがっている。

主人のご意向を伺う者もいる。

そして、誰かが結論づける。

扉を開ける必要など、ない。

何軒目かの家で、静かに拒絶された後、女は、大路に倒れ伏す。

冷たい、師走の風が、その僅かな生命のともし火を、ふっ、と吹き消す。

腹をすかせた、最初のやせた犬が、その姿を現せたのは、女が骸となるやならずの時だった。

続いて二匹目の犬が、三匹目の犬が、いずれも、飢えた目をして、大路の果てから、音もなく集まってきた。

木の葉が激しく舞い散り、宙に渦巻く。

「漂よ。漂よ。このような仕打ちを一身に受けて、お前は、死んだのか。」

「つらく苦しいばかりの命を……、」

「妹よ、お前はなぜ、生まれてきてしまったのだ……」

悲痛な声が、糺の森に木霊した。

紅蓮

その1

六、紅蓮

「そういうことだったのね」

迦具夜姫が、静かに言った。

カワ姫も、読んでいた書物から顔を上げる。

「都の者は、みな、同罪じゃ。下人も、主人も」

その黒い目に、激しい炎が燃えたぎっているのが、見えた気がした。

「沙醐、頼みがある」

静かな声が、かえって不気味だった。

「百合根を、姪の家に送り届けてくれぬか。お前にも、休暇をやる」

この邸に来て、初めての休暇。

だが、沙醐はだまされなかった。

「何をなさるおつもりですか」

カワと迦具夜と一睡、三人は顔を見合わせ、すぐにお互いにそっぽ

を向いた。

「行くところがなければ、梅屋敷にでも遊びに行くがよい。菅公が謹慎中とあらば、梅が、相手をしてくれようぞ」

梅屋敷になぞ、行きたくなかった。

それなのに、なぜか、沙醐は頷いていた。

頷かされている。

そう、感じた。

紅蓮　　その2

久々に可愛がっている姪に会えると、百合根は素直に喜んでいだ。土産の品をあれこれ包む。夜明けと同時に出発となった。

門を出たとき、向こうから、筋骨たくましい大男が歩いてくるのが目に入った。

心なしか片足をひきずっているようだが、沙醐の背は、その男の臍の辺りまでしか届かないだろう。

段々に近づいてきて、あ、と思った。

その男は、片目が潰れていた。

一ツ目……。

擦れ違ったとき、男の体全体にまとわりついていた、鉄が溶けるような匂いを放つ熱気が、沙醐のほうに漂ってきた。

「何を見ているの？」

振り返って後ろを見ている沙醐に、百合根が問いかけた。

「今の男……。片目の……。」

「え？」

百合根は不審そうに、後ろを振り返って、目をすがめた。

「誰もいないわよ」

しかし沙圃には、蚩邸の敗れた築地を潜っていく男の姿が見えた。

「さあ、もっと速く歩きましょう。姪の家まで、女の足では、半日以上かかってしまうわ」

うきつきとした口調で、百合根がせかした。

紅蓮

その2（後書き）

日本の製鉄集団には、一つ目の伝説が多くあります。これは、焼けた鉄の色を見続けるのに片目をつぶっていたから、との説があります。

刀といえば、鍛冶。そういうわけで、一睡ご用達の鍛冶師は、片目なのです。

紅蓮 その3

昼飯を食べていけ。

百合根の姪の家ではしつこく誘われたが、沙醐は辞退して外へ出た。

蛍目ざして歩き出す。

気がせて、途中から小走りになった。

なぜ、自分が、休暇の申し出を受け容れてしまったのか、不思議だった。

そもそも、この局面で休暇を取るなど、ありえない。

まるで何か、大きな力に頷かされたような気がする。

意志に反して、無理やり。

不吉な予感で、全身が震える。

北東の方角に、煙が立ち昇っているのが見えた。

ぎょつとして目をこらす。

煙ではない。虫の大群だ。

物凄い数の虫たちが、空を低くたれこめ、都を覆うように飛び広がっていた。

「ああ……」

風が、血なまぐさい匂いを運んでくる。

犬猫の死骸では足りない。
それも、一人二人の数ではない。

突然、ぴんと張り詰めた冬の空気を引き裂いて、女の哄笑が響き渡った。

貴族らの邸宅の上空に、十二単をまとい、あでやかな黒髪をなびかせた女の姿が浮かび上がった。

だが、一瞬のことだった。

次の瞬間、女の体は、信じられないくらいの速さで、地上めがけて突っ込んでいった。

目を覆う間もなく、地上から火炎が噴出した。

都の大火……。

ここ何日か、雨の降らない、乾いた冬晴れの日が続いていた。

火は、あっというまに、燃え広がっていく。

ぱちぱちと、木材のはぜる音が聞こえる。

どくん、ずくん、という地響きは、大きな邸宅の崩れ落ちる音だ。

あちこちで、人の悲鳴が聞こえる。

断末魔の、恐ろしい悲鳴が長く尾を引き、突然途切れる。

まだ、沙翫のいるところまでは、火の手は来ていない。

沙翫は北東の空を睨んだ。

これは、漂の君の敵討ち……。

漂の君を死なせたのは、都の人の、無関心。

自分さえ安泰ならそれでいいという、冷たい、心。
門の内側は安泰で、外側は死という、それが許される、この都。

そんな都など、焼け落ちてしまえ……。

「お前も、暴れに行くかい？」

不意に、後ろから声をかけられた。

梅が、立っていた。

「漂の君を見殺しにした、あの、上品ぶった都の人々に、思い知らせてやったらどうじゃ？」

梅は、太刀を差し出した。

沙彌は手を伸ばす。

心が、もやもやしていた。

生まれた境遇から、どうあがいても、幸せになれなかった漂の君。努力や心がけなど、何の得点にもならない、この、都。

先祖から伝えられたものが、土地や財産なら幸せに。

因縁や貧困を伝えられたなら、不幸に。

それは、一生、変わらない。

どうしようもない悔しさと、見通しのなさ。

ここで刀を振るいまわして暴れば、全てを断ち切ってしまうれば、どんなにすっきりするだろう。

沙醐の手が、太刀の柄をつかんだ。

刀が、ふつと消えた。

梅が大声で、げたげたと笑った。

「神が許さないんだ。蛭邸に仕える沙醐であっても、神は、許さない」

沙醐は、夢から覚めたように、我に返った。

「み、皆さまは……。蛭邸の、皆さまは……」

「そろそろ、引き上げただろ」

梅は涼しい声でそう言った。

「清涼殿あたりの火も消えた。あちは様子を見にまいるが、お前も来るか？」

帝のお住まいになる清涼殿さえも、焼けた。

あつてはならぬことだ。

とんでもない恐怖に、沙醐は震え、がくがくと頷いた。

梅は、人を小ばかにしたように頷くと、沙醐の体に手を回し、地面を蹴った。

二人の体が、ゆっくりりと、大地を離れる。

「あちは、飛び梅だからの」
気持ちよさそうに、梅は言った。

空から見た都の中枢部は、完全に廃墟だった。

右京職、左京職などの行政の要、大学院、奨学院、勸学院などの学問の府、食料庫たる穀倉院。

皆、黒く焼け焦げ、元の姿は想像もできない。

何より恐ろしいことに、朱雀門の内側、内裏までもが、廃墟となっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5112w/>

澤の螢

2011年11月2日12時07分発行